

荒野に咲く花々

-メキシコ先住民統治議会の女性たち-

グロリア・ムニョス・ラミレス/
Desinformémonos



2023年3月

構

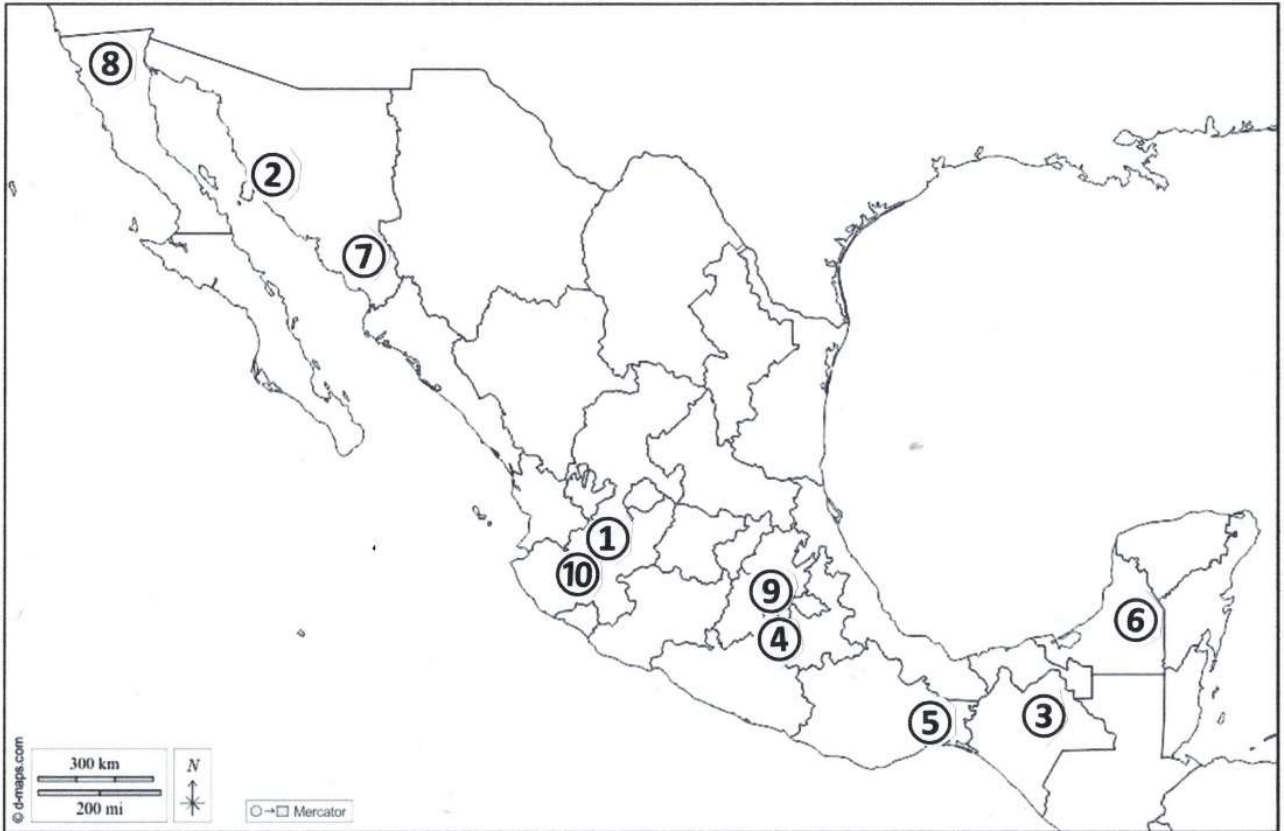
成

まえがき

グロリア・ムニョス・ラミレス

- 1 私たち女性ぬきのメキシコはもういない
ロシオ・モレノ…1
- 2 子守歌ではなく、戦士の歌で寝かされた
ガブリエラ・モリノ・モレノ…16
- 3 これがありのままの私、今まで生きてきた私
グアダルーペ・ベラスケス・ルナ…28
- 4 私たちがすべきことを誰かが言ってくれはしない
オスベリア・キロス・ゴンサレス…40
- 5 水、大地、風、山林を独占、私たちをペオン扱いする
ベッティナ・ルシラ・クルス・ベラスケス…53
- 6 女性は今以上のものを求めない。私たちの声に耳を傾けて
サラ・ロペス・ゴンサレス…67
- 7 30代になり否定された世界を評価できた
ミルナ・ドローレス・バレンシア・バンダ…80
- 8 先住民、女性ということで踏みにじられたくない
ルセロ・アリシア・イスラバ・メサ…92
- 9 これが本来の私の姿
マグダレナ・ガルシア・ドゥラン…102
- 10 希望は苦悩の大きさに比例する
マリア・デ・ヘスス・パトリシオ・マルティネス…116

あとがき



- ① ハリスコ州ポンシトラン行政区メスカラ：コカ
- ② ソノラ州ピティキト行政区デセンボケ・デ・ロス・セリス：コムカク（セリ）
- ③ チアパス州チェナロォ行政区アクテアル：ツォツィル
- ④ モレロス州テポストラン行政区：ナワ
- ⑤ オアハカ州フチタン行政区：ビニサー（サポテコ）
- ⑥ カンペチェ州カレンダリア行政区：マヤ
- ⑦ ソノラ州ナボホア行政区コウィリンポ：ヨレメ（マヨ）
- ⑧ バハカリフォルニア州テカテ行政区フンタス・デ・ネヒ：クミアイ
- ⑨ メキシコ市：マサワ
- ⑩ ハリスコ州トゥспан行政区：ナワ

基本用語

先住民全国議会（CNI）、先住民統治議会（CIG）、善き統治議会（JBG）
 サパティスタ民族解放軍（EZLN）、革命的労働党（PRT）、労働党（PT）
 制度的革命党（PRI、2000年まで政権担当の支配政党）
 国民行動党（PAN、2000年代政権担当保守政党）
 民主革命党（PRD、1980年代結成の反PRI政党）
 国立メキシコ自治大学（UNAM）、通信運輸省（SCT）、連邦電力委員会（CFE）
 全国先住民庁（INI：1949年創設先住民対策機関）、
 先住民族開発全国委員会（CDI：INIの後継組織、2001年設立）
 地峡部労働者農民学生連合（COCEI、フチタン本拠に1973年結成）
 土地領域防衛テワンテペク地峡部先住民族会議（APIITDTT）

彼女たちは私たちと特に違うというわけではないが、はっきりと異なっていることがある。彼女たちは忌まわしい人種差別にさらされてきた。彼女たちは自らの歴史、言葉、服装まで否定され、領域、聖地、儀式センター、自然資源も奪われた。企業や政府は領域にある水資源、山や森、風まで強奪しようとする。しかし彼女たち、闘う女性たちの娘や孫娘たちは、自らの民族、メキシコ全体のため、新たな未来を予言しようとする。みんなの大切なものを防衛するため全身全霊を捧げている。

彼女たちは犠牲者ではない。権力者や慣習にしばられていない。しかし屈辱を受けてきたことは確かである。彼女たちは押しつけられた運命に挑戦し、地域や世界の伝統を打ち破りながら、自らの歴史を築いてきた。準軍事組織に9人の家族を殺されたルピータが言うように、それぞれの戦いの歴史のなかで現在の彼女たちは形成されてきた。ロシオ、マグダレナ、サラ、ベッティナは闘いをやめようとしないう罪状で政府に逮捕・投獄された。ガブリエラはメキシコ海軍の犯罪行為と対決し、ミルナとオスベリアは領域を飲み込もうとする土木重機と対決し、ルセロは薬用植物を略奪する勢力と対峙している。治療者にして防衛者のマリチュイは彼女たちの広報官である。彼女たちだけでなく、多くの先住民女性と協力しながら、より善い世界を作り上げることに人生を賭けている。サパティスタが言うように、より善い世界とは数多くの世界が共存し、人々の意見に従って統治される世界である。

全員が母語を保持しているわけではないが、心はコムカク、ヨレメ、コカ、ビニサー、ナワ、ツォツィル、マサワ、マヤ、クミアイそのものである。ミルナが言うように、両親や祖父母たちは母語を教えない方が学校や都会でひどい扱いを受けないですむことを知っていた。しかしサパティスタ蜂起を機に、マグダレナは長い三つ編み、スカート、母語を取り戻すことになった。政府が先住民族でないとする共同体でロシオは自分が先住民とを知るようになる。

彼女たち全員が先住民全国議会（CNI）の創設した先住民統治議会（CIG）の代議員である。CIGは闘いを可視化し、先住民・非先住民であれ人々がサパティスタ民族解放軍（EZLN）が提起したイニシアティブに加わるよう呼びかける。2018年の大統領選挙に参加するが、目的は当選ではない。権力を掌握することは彼女たちの目標ではない。それ以上のものを目指し、みんなのために歩んでいる。彼女たちの時である。CIGは全土の200名近くの先住民で構成され、男女同数である。2016年12月の第5回全国先住民議会の決議で構築された。破壊を抑止し、抵抗と反乱を強化することが彼女たちの目標で、自治の構築に彼女たちは貢献している。

報告では様々な方法で10人の女性の物語が語られる。彼女たちや彼女たちの属する先住民族の闘いは、非先住民の女性を含めた多くの女性の闘いを代弁している。不毛とされる大地にうごめいている悪しき存在に抗して咲く花々である。彼女たちの声は私たちの声、彼女たちの未来は私たちの未来である。

1 私たち女性ぬきのメキシコはもういない



ロシオ・モレノ
ハリスコ州ボンシトラン行政区メスカラ
先住民族コラ
1983 年生まれ

ハリスコ州のチャパラ湖畔に飛び地のようにある先住民族コラの共同体メスカラに CNI が来たことが切っ掛けとなり、メスカラの人々は領土を守る闘いの新たな段階に進みだし、国内のほかの先住民族のことを知ることになる。2006 年 11 月、「先住民族自治と母なる大地防衛」全国フォーラムが開催され、全国の CNI 代議員たちがメスカラ共同体に参集した。そのことに関して、ロシオ・モレノは次のように言っている。

「フォーラムは、私たちだけでなくすべての先住民族に対して仕かけられた戦争が展開していることを理解する一つの窓口になった。私たちが土地の一面を守ろうとするならば、全国的な闘いを展開すべきであることをフォーラムの場において理解することができた。私たちは個別の問題にとどまっていたてはならない。CNI は私たちに政治的な方針を構築していくのを手助けしてくれた。フォーラムは私たちが出会う場であった」

34 年という彼女の人生の 15 年間、ロシオはメキシコ国内の先住民族、ナシオン、部族の全国ネットワークである CNI とともに進んできた。「CNI は私たち先住民族同士で分析し、考察し、対話する場である」。彼女は CNI の運動、

経歴、挫折もよく知っている。CNIの集会は、「国内の先住民族の問題を議論する場であり、どのような自治構築を目指すのか、どのように会議を強化するのか、話し合う場である」と、彼女は説明する。

2016年、CNIは創設20周年を迎えることになった。「私たち先住民族の状況について総括し、20年前より状況は悪化していることが確認できた。この20年間、私たち先住民族、私たちの組織、そして国全体もひどい衝撃を受けてきた。先住民族の領域における私的所有がとて増えている。その一例は鉱山開発であり、国土面積の40%以上が鉱山開発権の対象として占有されている。先住民の行方不明者は数千人に達し、失業や略奪にさらされ、CNIのメンバーの殺害も多かった」。

要するに状況はますますひどくなっている。「もっと悪化すると、私たちは予測している。人類や生命に対する戦争が展開され、川は川でなくなり、山は山でなくなり、雨まで制御し、風さえ盗もうとしている」。だから、「攻勢に転じ、何かをしていくことが私たちの緊急課題である」という結論に達した。「何か」とは組織化を進めることだと、ロシオは説明する。「組織化ができないと、私たちはすべてを失ってしまう」。さらに、「組織化することは私たちが持っているものを堅持するための最後のチャンスといえる。なぜなら略奪と殲滅のレベルはとて警戒すべき段階になっている」と、彼女は付け加える。

選挙が終われば嵐がくる。すでに雲は厚くなっている

このような状況を踏まえ、EZLNの支援のもと、先住民族によって選ばれた全国の男女の代表で構成されるCIGを構築し、それを通じて2018年の大統領選挙に参加するという取り組みにCNIは着手した。その目的は「選挙に勝つためではなく、先住民族がいることを可視化し、組織化を呼びかけることである」。「この取り組みでは、組織化に重点がおかれている。先住民族の声を聞いてもらうために選挙の場を利用するよいチャンスと、私たちは確信している」と、先住民族コカの代議員ロシオは語る。2018年の選挙プロセスは「特定の時空間のものだが、それはCIGの最終目標ではない」と、彼女は明言する。

「破壊は先住民族だけの問題ではなく国全体の問題である」と、ロシオは断言する。それは「生命に対する戦争」であり、「それを阻止する唯一の方法は、私たちが殲滅されないように私たち自身が組織化することである」。「選挙が終われば嵐がくるだろう」と、ロシオは予測している。「何もかも倒れるかもしれない。私たちの眼の前には雨をたっぷりと含んだ黒雲が広がっている。暴風の季節が到来しようとしている。それに備えないと、私たちは生き残れなくなるだろう」。だから、CIGと広報官マリア・デ・ヘスス・パトリシオの提案に要請されているのは、「政府や私たちを破壊しているこの戦争に立ち向かうため、全国的な同盟や組織を作ること」である。

「大統領選挙に勝つことが目的ではない」と、彼女は繰り返す。「それによって私たちの問題が解決することはない。マリチュイがメキシコを6年間統

治したとしても、私たち先住民族のためにはならない。CNIはこの点については明確である。善意の問題ではない。この国の統治者が善意の人というだけではダメである。私たちが戦い、糾弾している理由は、この国の構造がもはや機能していないからである。だから投票自体には何の意味もない。私たちの国では不正投票が横行している。支配者連中は今後 6 年間メキシコを統治する人をすでに決めている。私たちが賭けているのは選挙ではない。私たちの考えでは、私たちはその場所、上の支配者たちのお祭りの場を占拠し、そこから権力を糾弾しながら、権力の解体を目指さなければならない。重要なのは誰が大統領の座につくかではなく、全体の構造を変えることである。私たちは構造を変えなければならない。私たちは、この国のすべてのセクターと対話できていないので、何をすればいいのか、よくわかっていない。だから私たちはお互いの声に耳を傾ける必要がある」。

彼女の説明では、各先住民族から男女 1 名ずつ選ばれた代議員で CIG は構成される。全国で約 180 人の代議員がいる。「そして各代議員は、国中の人々と対話するという公約だけでなく、それぞれの共同体における仕事も担うことになる」。代議員の半数が女性で構成され、この取り組みにおける女性の役割は特筆に値するものとなっている。マリチュイ広報官の全国キャラバンでおもに話をするのは女性たちである。キャラバンを受け入れるのも女性たちで、先住民族の問題を語るのも女性たちである。

ロシオは先住民族や諸組織の内部に潜んでいるマチスモについてはっきり語る。サパティスタの女性たちが主導して自分たちにふさわしい場を要求し獲得した共同体の内部の反乱について、彼女は次のように語る。「サパティスタの女性たちができたことを私たちがしないというのは時間の損失でしかない。なぜなら、私たちの中には埋め込まれたマチスモや人種差別があり、今まさにそれを告発し変革すべき時なのである」。「この呼びかけを通じて、私たちが理解できることから長所を引き出さないといけない」と、メスカラの島の中心に座ってロシオは言う。「私たち女性抜きのメキシコはもういない」と、彼女は静かに語る。

人種差別と女性の排除

ロシオが 7 歳だった時、ハリスコ州ポンシトラン行政区の役場町に出かけた際、タコスを食べるため通りの屋台に座った。すると叔父に叱られたが、ロシオはその理由がわからなかった。その後の母親の説明では、叔父は彼女を守ろうとしたという。誰かがロシオに何か文句を言って傷つけることを怖れたという。だが彼女は理解できなかった。通りの屋台に座ったとあって、どうして文句を言われるのか？メスカラの先住民にはその権利がなかったという。

「それは法律で規定されていなかったが、私たちの頭に刷り込まれていた。その場所は自分たち先住民が座れる場所でないという考えが染みついていたのである。だから、叔父は私がひどい扱いをされることを怖れていたのである。



2006年「先住民自治と母なる大地防衛」全国フォーラム



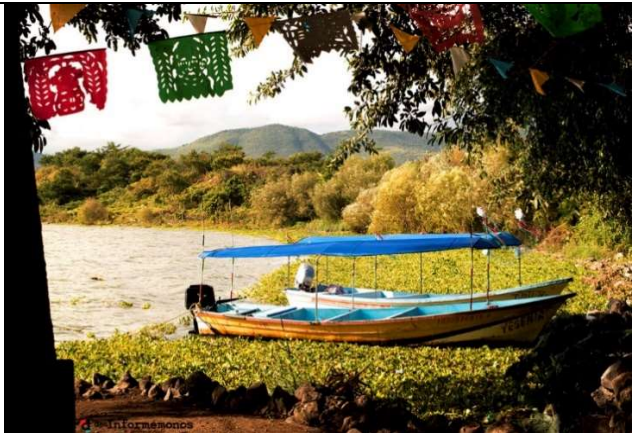
2017年12月5日、メスカラ訪問のマリチュイ



メスカラ共同体とチャパラル湖周辺の行政区



1579年のアトラスに描かれたチャパラル湖とメスカラ



湖の水はかつて汚染されておらず飲むことができた



ロシオの母親ロサ・モレノ



CNIでの活動歴は2006年以来と長い



1534年の日付があるメスカラ権原証書

ロシオ・モレノは34歳だが、CNIの中ではとても長い活動経歴をもっている女性である。彼女がCIG代議員に任命されても、誰も驚きはしなかった。というのも、彼女の背中に垂れている太い三つ編みと同じように、領域の防衛者としての彼女の経歴はとても長いものである。彼女はメスカラで生まれ、そこで暮らしてきた。

メスカラはメキシコで最大のチャパラ湖の湖岸に位置するコカ先住民の唯一の共同体である。コカという民族性も含めて、メスカラでは何もかも否定されてきた。6年前にロシオがポンシトランの大学〔ラ・シエネガ大学ポンシトラン校〕で教員として働いていた時、「メスカラ出身のインディオ女が授業をもつなんて」と数名の教師が嘆いていた。その時のように人種差別にさらされる時だけ、先住民族と認識されている。

ハリスコ州の法律はメスカラを先住民共同体と認定していない。「私たちは近隣の共同体と同じではない」と、ロシオは言う。彼女は10年前から共同体の歴史のワークショップを組織している。その目的は子どもたちが自分たちの過去を知り、誇りを持てるようにするためである。「先住民族であることは恥ずかしいことであると、私たちは信じ込まされてきた。私たちは進歩に逆行していると見なされ、頭が悪く、将来へのビジョンをもたず、祭りにお金を浪費する連中であると、私たちは言われている」。だからワークショップで、子どもたちは、「別の歴史、つまりスペイン人からメスカラの島を守り、けっして降伏しなかった反乱する先住民族の歴史を知ることになる」。

チャパラ湖畔に残っている共同体メスカラの人口は約5千人で、漁業と農業を生活の糧としてきた。二つの島があり、一つはコカの聖地で文化の中心となっている。この島でロシオの母親ロサ・モレノは生まれた。母親はロカディオ・モレノの娘で、トマス・モレノ〔1900年代、サンペドロ・イツィカンとエル・コマルの共同体の土地侵略を防止〕の孫にあたる。この二人は20世紀初頭の土地回復のための闘いに参加したことで人々の記憶に刻まれている。

ロシオの個人史は母親の個人史ぬきには説明できない。母親は、明るく闘志があり、看護師を天職としてきた女性である。あらゆることに反抗し、押しつけられた行動様式に従わなかった特異な女性の一人である。「彼女の世代は現在70代前後だが、男性も女性もほとんど学校に行かなかったが、彼女は学校に通っていた。シングルマザーの彼女は子ども全員の母であるとともに、父親でもあった」

祖父母、母、いとこ、叔父たちは、領域を守ることや共同体を維持する重要性について集まって話していた。そのような環境でロシオは育ってきた。「あなたたちが土地やこの家で手にしているものは過去に多くの人が闘ってきた成果である」と、いつも皆が集まっては語っていた。幼いロシオは、土地は代々受け継いできた財産であり、それぞれの人に備わっている権利であることを理解していた。

母ドニャ・ロサは、グアダラハラ市の東部にある社会保険庁の病院と旧市民

病院で33年にわたり看護師として働いた。娘のロシオはテトラン地区にあるコロニアで育ち、勉強した。週末や休暇になると、ロシオはメスカラの実家に戻っていた。家には共同体や家族のメンバーがいつも出入りしていたので、共同体から遠く離れているとは感じなかった。

ロシオの生活はチャパラ湖とともにあった。水道、電気、道路はなかった。グアダラハラ市からメスカラへ行くのはまるで別の国へ移動するようなものだった。会話や食べ物だけでなく、幼少期の遊びもチャパラ湖のまわりで繰り広げられていた。「人々は湖に入り、甕で水を汲み、飲み水や料理に使っていた。湖が汚染されていなかったからである。生活のすべてが湖一帯で展開していた。私たちはスモモの木に登っていた。それぐらいしか遊ぶ楽しみはなかった。甘いお菓子はなく果物しかなかった。とても自由な幼少時代で、家の扉が閉じていたという記憶はない」。

グアダラハラ市ではテトラン地区に住んでいた。そこは市の東部に位置するメスカラ出身の人が多く住む低所得者層のコロニアだった。電気や水道はあったが道路は未舗装だったので、私はメスカラにいるのとあまり違いを感じなかった。メスカラ共同体の出身者が多くいたので、共同体の出先にいるように暮らしていた。そこでは伝統的な祭礼役職組織も含め、メスカラと同じような共同体の生活が再生産されていた」。

ロシオは、小学校の数学年は祖父母と住んでいたメスカラで、残りの期間はテトラン地区で過ごした。家族は母親の勤め先によって移動していた。彼女が病院を代わると、勤め先の近くに住民のために引っ越していた。ロシオが高校を卒業した時、母親は社会保険庁の病院を定年退職し、完全にメスカラへ戻った。しかし、ロシオは歴史学を専攻しようとしていたので、グアダラハラ市に残ることにした。

歴史学を選択したのは、自分の共同体の起源についてよく知りたかったからである。「大学に行けば誰かが教えてくれると、思っていた」。共同体には歴史に対する強い思い入れがある。人々は過去について書かれた本や文書を保管している。権原証書を家に保管し、守護聖人のように代々受け渡している。だからロシオは歴史をさらに知りたかったのである。

グアダラハラ大学での5年間は、彼女の政治的な形成において決定的なものとなった。大学では、サパティスタ運動に関する集会やフォーラムで様々な意見に耳を傾けるようになった。チアパスの先住民共同体から届いた情報で、「自分の共同体について考えるようになった」ことを彼女はよく覚えている。より多くの情報を得るため、大学で雑誌や映像資料にもアクセスした。「私たちはコレクティブを組織し、一緒にサパティスタ運動に関して読んだり話したりビデオを見たりした」。それは2001年、ロシオが19歳の時だった。

幼少時のロシオは、ラジオ付きの小さな白黒テレビでサパティスタに関する番組を見たことがあった。なぜサパティスタは殺されているのと、母に尋ねると、ドニャ・ロサの答えは「あなたの祖父や曾祖父のように土地のために戦

っているからよ」というものだった。その言葉は彼女の心にずっと残っていた。大学でふたたびサパティスタに関する話を耳にしたとき、サパティスタに関する情報は彼女に浸み込むようになってきた。

サパティスタが呼びかけた「別のキャンペーン」が組織された2005年、ロシオはメスカラで結成したグループとともにチアパスまで出かけ、サパティスタと直接出会うことができた。「チアパスに出かけた時、最初に私たちが質問されたのは、私たちの会議、共同体成員、伝統的政府はどこにあるのかということだった。私たちの共同体にあるもの知るために、私たちはチアパスまで出かける必要があった。チアパスで私たちが知ることになったのは、自分たちの共同体を守るのはコレクティボや諸個人ではなく、伝統的政府が担う役目であるということだった。私たちのすべき仕事は自分の属する共同体にあり、闘ううえで最良の方法は本拠地で活動し、自分たちが持っていたものすべてを再認識することだった」。

ロシオたちの次のステップは共同体の集会に参加することだった。そして、共同体成員の決定で、メスカラ会議としてCNIとサパティスタの「別のキャンペーン」に参加することになった。「その段階で、運動はもはや集団ではなく、共同体のものとなった。これはとても大きな前進だった」。

歴史とアイデンティティの回復にむけた共同体ワークショップ

ロシオへのインタビューの前半は、母の死から1年後、母の実家の中庭で行われた。強い女性とされるロシオも、母のことを思い出すとどうしても心が折れてしまったようである。彼女の母に対する賞賛は、その記憶と同じように限りがないものである。

「学位取得後〔2008年グアダラハラ大学学士論文『メスカラのコカ先住民共同体、土地防衛の歴史的主体』〕、母と暮らすため、私はメスカラに戻り、特に子どもや若い人たちを対象にした歴史のワークショップを開始した。共同体に元々あったものに気づくのにはわざわざチアパス州まで行かなければならないとは思ってもしなかった。私たちの仕事は情報を提供することであると考え、9つのバリオの街角で共同体の歴史に関するワークショップを始めた。お互いの対話を増やしていった。私たちが共同体の長老のところまでかけると、昔何が起きたのか、なぜそれを知ることが重要なのか、いろいろ話してくれるようになった」。

共同体の歴史を知るため、故ドン・アガポ・バルタサル、サルバドール・デ・ラ・ロサ、マルティン・エンシソの話に耳を傾けた。そして「共同体成員ではない女性たちも、私たちが話を集めることを認めてくれた。その中の一人、マリア・デ・ロス・サントスは、いつも土地の回復の重要性を訴えていたので「マリア・マチューテ」と呼ばれていた。長老たちは、「地域の若者も同じことに関心を持っていることに気づき心を開いてくれ、私たちは彼らと一緒に仕事をすることができた」。自分の村にあったことを大学では見つけられなかった歴史家はこのように振り返っている。

メスカラ・コレクティボには、ハコボ・マヌエル、アデロ・ロブレス、マリオ・デ・ロス・サントス、シルベストル・クラロ、パウラ・ペレス、レオノールなどがいた。大半は17歳から20歳の若者で、最年長でも30・40代だった。

CNIに参加した時に、メスカラの共同体成員は、すでに40・50年も続いている島と共同体の領域を認知させる闘いはほかの先住民族の闘いと同じもので、自治や会議の組織化を進めている人たちがいることを知った。ほかの人々の闘いと自分たちの闘いは同じであると感じた。EZLN女性司令官2人のメスカラ訪問〔2006年11月17-19日、CNI主宰の土地防衛フォーラムに参加のガブリエラとミリア司令官〕は、大きな変化の瞬間だった。そのフォーラム以来、共同体成員は、正規メンバーでなかった女性、男性、若者にも共同体の集会所を提供するようになった。侵略された土地を取り戻すためには、闘争は共同体成員だけでなく、共同体全体が担うべきことが理解されるようになった。

「さあお入りなさい。でも皆さんはいったい何ができるの?」と、共同体成員はロシオたちに言った。歴史を勉強しているからメスカラの共同体の歴史のワークショップを開催できるが、「その具体的内容を作るのに皆さんの協力が必要となります」と、ロシオは答えた。こうして年長者との共同作業が始まった。皆が権原証書や反乱について話してくれた。

「チャヨーテ（ハヤトウリ）を収穫する人を見かけ、葉を取るのを手伝いながら、島でどんなことが起きたか知っているかと尋ねると、いろいろ教えてくれた。数ヶ月で多くの人のお話を録音し、すべてを記録に残す作業を行った。結局、最初のワークショップを始める時には、まず14頁の記録をみんなで読んでいくことになった。

その後、私たちは村の通りでワークショップを始めた。人々は家の外に出て座り、コーヒーやシナモン、パンを持参する人もいた。誰かが読んでいる間は、誰もが黙って聞いていた。私たちは木曜日と金曜日の夕方6時に集まりをもつことにした。朗読が終わると、人々は質問をするだけでなく、親たちが話したり覚えたりしていた話をしてくれた。それらの話のすべては1年かけて収集された。その後、私たちは折り畳みパネルを作成し共同体成員の集會に持参した。さらにメスカラにある9地区を巡回していった。

ワークショップの様子を再現する時、ロシオの満月のように丸い顔は輝いている。彼女の話はやむことがない。一番象徴的だったのはコカの人たちの話をしていく時である。「私たちの誰も知らなかったが、メスカラの元の言語は征服の過程で失われたことを知った。コカはもっとも大きな被害を受けたグループの一つである。フランシスコ会が書き残した記録によると、この地域には驚くべき言語的多様性があったという。それは一言語が領域を覆っているメキシコの中南部では見られない現象だった。

そこで私たちが最初にしたのは、いつ、どのように母語のコカの言語が失われたかについて、納得できる説明をすることだった。なぜなら、「言語の保存や伝達に興味なかったから、自分の言語を忘れた」ことと、「征服の過程で



2006年以降、共同体の組織は強化



ロシオが組織した歴史のワークショップの子どもたち



チャヨーテ畑への水やり



メスカラはチャヨーテの名産地



雨乞いの儀式が行われる岩ラ・ノラ



5月3日の「聖十字架」の雨乞いの祭での奉納踊り



連れ合いチェイ・ペレスと娘 (Facebook より)



メスカラの征服の踊り

文化の本質をなしている言語が奪われた」ことはまったく別問題だからである。コカに属していると確認することはとても不思議な瞬間だった。

共同体には降雨を祈る儀式があり、ラ・ビエハという岩の上で行われているが、史料ではラ・ノラと記されている。男と女、老爺と老婆とされる二つの巨岩である。5月末の種まきのための雨が降らないと、人々は集まってラ・ビエハに雨を降らすようお願いする。水と花が運ばれ、人々はラ・ビエハに向かって歌い、祈る。岩に登って水を撒き、守護聖人サンタ・マリア・デ・ソヤトランに「水をお恵みください！」と叫ぶ。最終的には雨が降りだし、旱魃は解決する。

「スペイン人たちはこの儀礼を記述していた。コカに言及する際、記録は様々な儀礼、交易、漁業のことに言及していた。私たちがその説明の下りを朗読していると、『それって私のことだ』と、言う人がいた。自分自身の説明が読まれているので、すぐに自分のことだと確信したという。まるで魔法のような瞬間だった」。人々は自分たちが先住民であることは知っていたが、コカに属することは知らなかった。「ワークショップは私たちがコカと自認する土台となった」。先住民としてはすでに存在していた。

こうしてロシオにとって多くのことが明らかになった。彼女の居場所は都会ではなく共同体にあった。「都会が悪いということではない。自分の村で少しでもできること、何か少しでも共同体に還元できないなら、大学で勉強する意味はないと、私は考えた」。サパティスタの闘いを通じて自分の村の歴史に深く踏み込んでいくようになり、「私の家族、叔母たち、母や友人たちを新たな視点から理解できるようになった。私が発見したのは、共同体には闘いの歴史があり、これから貢献することになる子ども、孫たちやほかの人々もその闘いを分かち合うことができることである。多くの人が目立ちたいと、村から去っていくが、それは何なのか、目立つとは何なのか。そういう発想は捨てた方がいいと思う」。

大学は「私が求めていたものと違っている」ことに気が付いたと、ロシオは語っている。大学には共同体で起きたことを正しく理解するうえで障害となる概念や言葉があふれている。私たちが民族の歴史を書き始める前、メスカラの反乱軍はスペインに負けたと、歴史家たちは主張していた。しかし、それは違う、私たちにとって勝利だったと、私たちは主張した。大学で習得するのは、まさに権力者の言説とビジョンである。大学が私の求めていたものでないことを理解するには、私自身が大学に入る必要があった。

ロシオは強い個性の持ち主である。本人はそう言っているが、実際にはそれほど外向的ではない。相手が誰でも彼女はとても生真面目に対応する。友達も家族も同列に対応する姿勢はよく知られている。中途半端な人間関係を保ち、誰とでもうまくやろうと考えない。その意味で彼女はタフなので、時に「恐れられる」こともあると彼女は自覚している。

7年前に結婚したチューイ・ペレスは、幼少期を米国のカリフォルニア州で

出稼ぎとして過ごした同郷の男性である。幸運なことに、彼は米国から強制送還された。「彼が米国から帰ってきてから2年もたたない頃、私たちは出会った」。2年間ほど付き合っけて市民結婚式をおこなった。結婚式などお芝居事だと考えていたロシオにとり、それは人生で「最悪の経験のひとつ」だったと記憶している。

ロシオの人柄、CNIや現在はCIGの会合に参加するために共同体を留守にすること、共同体内での政治活動、彼女の性格の堅さなどは、身体的に「とてもタフ」なチューイにとっては何ら障害とはならなかった。そのため、人々はチューイを非難したり、配偶者の生き方を批判したりはしない。しかし、こうした活動に参加するほかの女性の場合、「あれ、おまえの嫁さん、あちこち出かけているぞ」という陰口が夫にたたかれることがある。

その点で、ロシオは「恵まれている」。しかし、恵まれているとされるより、夫婦の「支え合い」がいつか当たり前となることをロシオ自身は願っている。「応援しなくていいから、そばにいてくれればそれでいいと、ロシオは言ってきた。実際、チューイはそうしてくれた。『娘の面倒を見てくれて、社会的にはとても良いけど、それだけでは十分とは言えないわ』と、私は冗談めかして言っている。私が言いたいのは、手助けではなく、私たち二人で担うべきものと思ってチューイがしてくれればいい」。

彼女とチューイは同じ歴史とアイデンティティを共有している。「私たちが同じ状況にいて、私が出歩くのは個人的な仕事ではなく、共同体の闘いのためと理解するうえで、とても役立っている」。

28 回もの戦闘に勝利した島、メスカラの中心地

チャパラ湖にあるメスカラ島は、コカの人々の心の支えであり、その面積は約20万m²である。共同体の土地としても歴史に充ちている。コカの人々は言語を失ったが、領土、伝統的権威者、踊り、祭礼や役職制度まで失ったわけではない。だからこそ、自分たちに残されているものを人々は大事にしている。

人々にとって聖なる共同体の空間である二つの島を抜きにメスカラを理解できないと、ロシオは言う。「この島では、植民地時代の末期にも先住民の抵抗があり、メスカラの人々は王党派軍と4年間〔1812~16年〕も戦った」。だから「島は私たちに誇りとアイデンティティを与える空間となっている」と、歴史家ロシオは語る。スペイン側が残した記録によると、その時期に島で抵抗した人々は、事実上メキシコ全域での反乱派の最後の砦でもあった。28回におよぶ戦闘で、反乱軍が一度も負けることはなかった。反乱派の武器は、当初は石と投石縄だったが、徐々に自前の大砲で武装するようになった。

最終段階で、王党派の島への進駐・占領と引き換えに反乱軍に恩赦を与えるという案を植民地政府は提示した。メスカラに疫病が流行したため、反乱軍はメスカラ領域返還と貢納免除を条件とする交渉に応じた。1816年11月25日に休戦協定が締結され、毎年この日にメスカラ反乱軍の偉業に対する祝賀事

業が行われる。公式の歴史では、このエピソードは敗北として語られ、先住民の参加も語られないが、実際はメスカラの民衆の勝利だった。

ロシオ・モレノははっきりと指摘する。「私たちは公式の歴史が隠しているものを可視化すべきである。公式の歴史は階級的、人種差別的で、支配者に都合よく記述される。だから、島を訪れる人や私たちの子どもや若者に、この地域、特にサンペドロ〔メスカラ東隣の集落〕やメスカラの人々が組織的に展開した抵抗について説明している。「土地は自分たちのもので、防衛し続けるべきことを知るため」、抵抗について語り継いでいると、彼女は語る。

現在のメスカラにも、領域を守る抵抗や闘争は存在している。メスカラの人にとって、この島は要塞や昔の建造物といった歴史の名残だけではない。この島にはいつも共同体があった。この島では51世帯の家族がハヤトウリを栽培したり、漁業をしたりしている。

1971年、メキシコ政府は共同体の3,600haを共同体の土地として認定したが、共同体財産の返還の対象に二つの島は含まれていなかった。共同体の伝統的政府は、自らの正当な権利を求めて、農地改革省と戦って、1997年に島の所有権を獲得した。

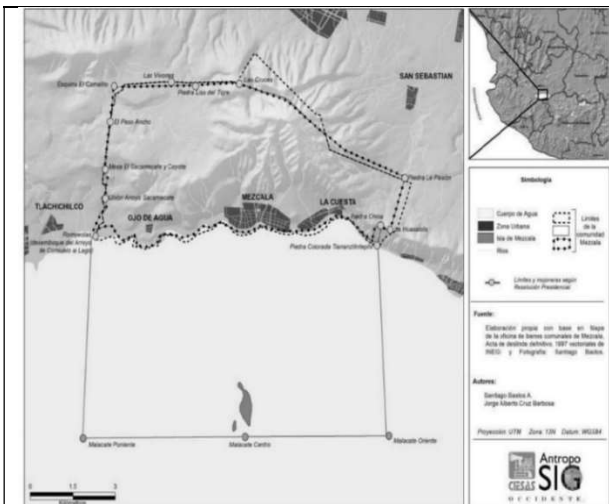
ロシオのインタビューの後半は島で行われた。メスカラ中心部にある栈橋から船で出発し、島に降りると、独立200周年記念関連で復元された歴史的建造物が目に入ってきた。独立200周年祝賀事業の背後には、「共同体地区を民営化するプロジェクトがあった。共同体地区に博物館と料金所を建設しようとしていた。訪問者が共同体の歴史にアクセスするには、入場料を払わなければならない仕組みになっていた」と、彼女は指摘する。しかし共同体は団結して料金所を壊し、民営化を阻止した。当時のフェリペ・カルデロン大統領訪問も実現しなかった。

実業家たちの侵略と攻撃

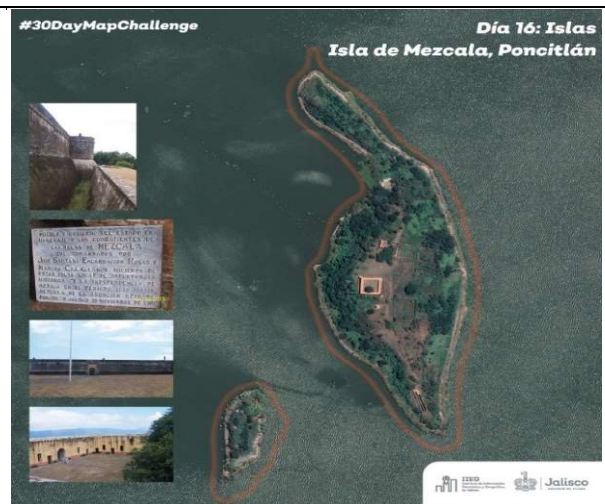
この共同体のもう一つの争いは、島ではなく湖岸の本土にある。それはカシケや実業家などが食指を伸ばしている共同体の土地3,600haを防衛する闘いである。メスカラは地域のへそともいえる観光地に位置している。島から数kmほど離れたチャパラ湖畔には、現代の侵略と植民地化の模範例とされるアヒヒック共同体がある。メキシコは米国を除くと世界で最も多くの米国人が住んでいるが、アヒヒックはメキシコの中でもかなり多くの米国人が居住している場所である。この町では第二言語は英語となっている。当然ながら、この30年間でアヒヒックの町の様子も文化もすっかり変わってしまった。

森林が保護されているメスカラも、もう一つのアヒヒックになりかねない。周辺にある丘陵地では、別荘を建てにやって来るメキシコやほかの国の人向けの住宅分譲地が建設されている。こうした不動産開発の進展を止めるブレーキ役をメスカラは担い続けている。

17年前、チャパラにある別の土地分譲地の共同所有者だった実業家ギジェ



1997年、農地改革省の裁定によるメスカラの領域



メスカラ島の航空写真



メスカラ島戦闘 200 周年の州議会で抗議声明を読む



島から眺めたメスカラ中心街



エル・パンディージョの不法占拠地に建設された別荘



2008年、エル・パンディージョでの集会で話すロシオ



2018年10月の行政労働裁判所の裁定を伝える地元紙



2022年10月4日、エル・パンディージョに集まる住民

ルモ・モレノ・イバラは、一人の名義貸し人〔クレセンシアノ・サンチェス〕とともに共同体に来て、共同体の森林がある土地約 10ha を不法に所有した。「不法占拠者はエル・パンディージョと呼ばれる区画を柵で囲ったので、共同体の会議は彼を共同体財産事務所に召喚した。彼が出頭しなかったので、共同体成員はこの実業家に対して共同体の土地の返還訴訟を起こした。くだんの共同体出身の名義貸し人は、何の法的根拠もないまま、森林のある区画を勝手に所有していた」と、ロシオは説明してくれた。

こうして、メスカラの共同体成員にとって象徴となる農地問題に関する裁判が始まった。「もし彼の侵入を許してしまったら、ほかの皆が侵入するようになる。彼を追放できれば、誰でも追い出せる」。裁判は 1999 年に始まり、2009 年に最後の専門鑑定が実施された。2014 年、共同体側に有利な一回目の判決が下されたが、実業家は再審の訴えを起こした。二回目の判決〔2016 年〕も共同体側を支持するものだった。「これは単純明快なことだった。共同体の土地に私有地ということはありませんものだから」。

しかし抵抗を継続することはたやすいことではない。脅迫、収監、嘲笑、分裂、対立が生まれてくる。今も、実業家の準軍事組織が占拠した土地区画を警備している。バンダナや目出し帽で顔を隠した重武装の 16 人前後の要員が、その土地に誰も近づかないようにするため警備している〔2018 年の行政労働裁判所の裁定を踏まえ、2021 年 10 月 28 日、農地裁判所は土地返却命令、2022 年 10 月 4 日、共同体成員は不法占拠地を解放〕。

「彼らは共同体を威嚇しようとしたが、私たちは連中の挑発に乗らないようにした。私たちが闘ってきた期間はとても長かった。この土地を取り戻すという望みを失くしてしまった人も多かった。金持ちには勝てっこないし、政府も彼らの味方をしていると、言われていたからである。17 年の時が流れ、疲れ切った人も少なくないが、共同体メンバーの会議、歴史のワークショップ、ウォーキング、キャンプなどに参加した多くの若者が、疲れ果てた人たちに代わって活動している」と、モレノは説明する。

モレノが強調するのは、問題なのは土地のことだけでなく、「共同体の生活や長年にわたって築かれた絆である。領域を保全するには、自律的であること以外に方法はない」。

自分の人生が終わったような気がした

実業家は準軍事組織を操るだけでなく、二度にわたって共同体成員を告発した。一回目の告発は 2002 年で、5 人の共同体成員が誘拐の嫌疑で告発された。「その時は、実業家が怒鳴って人々を脅しながら共同体の館に押しかけてきたので、彼を行政区の出張所に一時留置した」。この行為によって、共同体成員は 3 年も裁判にかけられることになったが、最終的に刑事裁判所は行政区の出張所への一時留置は誘拐とは言えないと判断した。

二回目の告発は 2011 年に起きた。実業家は、侵略された土地から約 3km の

場所に貯水ダムを作り、占拠した土地に水をくみ上げる目的で太陽光発電パネルも設置した。共同体会議はそこに出かけそのパネルを解体した。それが二回目の占拠にほかならなかった。数ヵ月後、共同体成員 3 名とメスカラの住民 8 名、計 11 名に対して逮捕状が発行された。

メスカラの女性たちの抵抗はすさまじかったと、ロシオは振り返る。「実業家は『エル・パンディージョの鷲たち』という女性の準軍事組織を組織した」と、ロシオは語る。その女性たちは私たちと対決するために武装していた。「実業家が人々に対して発したメッセージは、問題を起こして逮捕されたいなら、共同体成員と結託して組織をつくれというものだった」。組織化をすることはそれほど難しくはなかった。

逮捕された 11 人のうちの一人がロシオだった。2011 年 9 月、いくつもの逮捕状が出されていた。その時、彼女はグアダラハラ市で勉強していたが、捜査当局は地元紙〔日刊ミレニオ紙〕の記者を装って、彼女を電話で呼び出した。「ナンバー・プレートのないバンに乗った正体不明の男 2 人が、私を呼び止め、手錠をかけた」。すぐさま地元の新聞記者たちが到着し、その時に逮捕状を見せられた。彼女はグアダラハラ市の検察庁に連行され、翌朝にオコトランの刑務所に移送された。

その体験はひどいものだった。「私の人生は終わったと思った。なぜ私が収監されるのか分からなかった。誰も説明をしてくれなかった。国家権力は全能だと感じた。私は国家の掌中におかれ、私は彼らの意のままに扱われている。連中はどんな罪状でも捏造し、かつてに自白を捏造することができた。私はとるに足らない存在である。そんな気持ちになった」。

他の 10 人の逮捕者と同様、彼女は事前の取り調べもまったくないまま、器物損壊の罪で起訴された。その裁判は続いたが、証拠も集められず、彼女を釈放せざるを得なかった。7 年の裁判生活の後〔2017 年〕、11 人は釈放された。そして今日まで全員が戦い続けている。

映像資料

Rocío Moreno, Concejala coca. Comunidad de Mezcala, Jalisco (12:53)

<https://youtu.be/31Y1F12iScI>

Comunidad indígena coca de Mezcala (3:25)

https://fb.watch/ixtk_9Fy7a/

Rocío Moreno, Comunera de Mezcala, Jalisco (19:27)

<https://youtu.be/datsFGmMCSM>

Rocio Moreno の Facebook

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100021821211859>

2 子守歌ではなく、戦士の歌で寝かされた



ガブリエラ・モリーノ・モレナ
ソノラ州ピティキト行政区デセンボケ・デ・ロス・セリス
先住民族コムカク（セリ）
1990年生まれ

デセンボケ・デ・ロス・セリスに向かう近道は、サグアロ（弁慶柱）、セニタ（上帝閣）、ピタヤ（三角柱）など柱状サボテン類が群生する広大な庭園をめぐるように走っている。コムカクの若者はこの秘密の近道を隠して使い続けている。共同体の人間、共同体に招待された人以外は茂みを通過できない。ガブリエラ・モリーナは茂みを飛ぶように跳ねていく。

彼女は徹夜明けだった。私たちとの会見の前日、彼女は伝統的警備隊〔1981年創設〕のメンバーとともに、密漁していた犯罪者集団と対決していた。武装した伝統的警備隊は夜明け前まで犯罪者集団をボートで追跡し、逮捕者を行政区警察当局に引き渡した。全身全霊代議員であるこの女性は顔に彩色をほどこしている。伝統的警備隊の一員である彼女は黒色の防弾チョッキを着て、武器一丁を携帯し、コムカクの伝統衣装のリボンのついた稲妻模様の柄の赤色のスカートをはいている。

カリフォルニア湾の海を背景にガブリエラは木製の小さな椅子に座った。千年の昔からの先住民、メソアメリカに居住し始めた最初の人々が体験してきた不遇について、彼女はよどみなく語りだした。ほかの先住民族、ナシオン、

部族と同じように、コムカクは組織犯罪者集団から監視され、領域内に侵入する鉱山企業の脅威にも直面している。

4年前に「鉱山会社が来て武力で私たちに脅迫しだした」〔2010年開発権取得、2014年探査活動開始〕と、彼女は語る。「受け入れるのか、銃弾を食らわせようか」と言いながら、鉱山開発計画は共同体に来了。コムカクの民はどちらも拒否し、抵抗を継続している。2015年、ラ・ペイネタ鉱山〔グループ・メキシコ、カナダ資本シルバーコープ社など巨大企業の現地会社〕の労働者は、コムカクの聖なる領域から約300トンの鉱石を採掘し、先住民居留区を31kmも破壊した。人間の健康や環境が甚大な被害を受け、ミュージカやオオツノヒツジも脅かされた。「地域に豊富に埋蔵されている金、銀、銅の略奪」をソノラの鉱山企業が企てていると、多くの人がガビという愛称で呼んでいるガブリエラは警告する。

この若い女性が領域防衛に直接的に関わりだしたのは鉱山会社との闘いからだった。事前の合意や協議ぬきで鉱山開発権が認可されたのを知って、共同体の女性は組織化を始めた。ガビはこの時のことをよく覚えている。「最初、ラ・ペイネタ社だけと考えていたが、調査で露天掘りの鉱山開発権認可は8カ所あることが分かった」。デセンボケから約5kmの所にはラ・ロヒサという鉱山開発権が認可され、プンタ・チュエカの土地以外にもテポパの丘に鉱山開発権が認可されていた。

デセンボケとプンタ・チュエカはコムカク領域を構成している二つの共同体である。両方の共同体で砂漠と海の世界で生活する約2千人の先住民がいる。CIGメンバーとしてガブリエラを選んだのはデセンボケの伝統会議である。ガブリエラは現在のセリ伝統的統治者の娘で、かつて統治者になった唯一の女性の孫でもある。少ないとは言えない共同体の闘争の組織化を推進し、可視化する責任を彼女は担っている。

面積20万ha超、100km超の海岸線を有するコムカク領域〔12万haが共同体、9.1万haがエヒード〕に対する脅威は、鉱山会社との闘争以外にもたくさんある。砂漠や海岸地帯へのホテル建設計画、「ティブロン水と電力会社」が推進する潮力発電計画などがある。この会社は、エルモシージョ潮力エネルギーを通じて海水淡水化事業と発電を推進し、メキシコ北西部と米国の南西部で電力を販売しようとしている。

ティブロン島、コムカク民族の脅かされる心臓部

インタビュー用に急ごしらえしたセットの背後に、ティブロン島の美しい姿が聳えるように広がる。メキシコ最大の面積をもつこの島はコムカクの聖地であり、面積1,200km²はメキシコ市の面積にわずかに及ばない。セリ戦士の会合の場所だったこの島に今居住しているのはメキシコ海軍だけである。海軍は、プンタ・トルメンタという入江にコムカク部族の承認なしに施設を建設した〔1975年プンタ・チュエカの対岸、港湾と滑走路設置〕。「海軍当局は、セリ権威者との合意に基づいて島に進駐したと知っているが、それは嘘である。海軍は領

域を管理するどころか、組織犯罪集団の活動を護っている」と、ガブリエラは非難する。

「領域に暮らす人々の大半は海軍の島への駐留を認めていない。私たちは島への敬意の念を抱いている。海軍が島に駐留しているが、何一つ私たちの役に立っていない。イワシ漁船が禁漁海域〔ティブロン島岸と海峡部はコムカク以外の漁業禁止〕に侵入しても、海軍は漁船を警護するだけである。コムカクに対しては禁漁期〔5~8月〕を設定しながら、トロール漁船の操業を禁じるどころか、彼らを保護している」。

「太古からの揺籃の地であり、生き残ったセリの人々が避難してきた場所である」ティブロン島はコムカクの心臓部である。今、この島に元々の住人は居住していない。その理由は、聖地のティブロン島が汚されることを望まないからである。「それを理解していない人もいる」と、ガブリエラは嘆く。自然保護区に指定されているティブロン島だが〔1963年動植物保護区認定、1975年コムカク共同体土地認定〕、先祖の身体はこの島に眠っている。海軍の島への進駐を阻止しようと先住民が抗議の声を上げた時、国立自然保護区全国委員会は何もしなかったと、モリナは非難する。「島に進駐するチャンスを海軍に与える一方で、島の探査作業の名目で私たちに数多くの要求を押しつけてくる」。

動植物の天国であるこの島で危機にさらされているものは少なくない。オオツノヒツジ、ミュールジカ、コヨーテ、砂漠にすむ亀、固有種の蛇類、野生のフリホール豆、種子が食用となる植物類、球状のサボテン、アイアンウッド、薬草や数多くのサボテン類など、何百種類もの動植物が島にある。

こうした動植物は政府や多国籍企業にとって無視できない資源であるが、その所有者はコムカクである。人類学者のガブリエル・エルナンデス・ガルシアが主張するように、太古の昔から、島、湾、入江、洞窟、山などは、政府が仕かけた戦争でコムカクが生き残ることを可能にした避難場所になってきた。

海が奪われれば、命も奪われる

集落に到着する前、「皆さんは何でも食べますか？」と、ガビはデシンフォルメモノスのスタッフに尋ねた。彼女と家族が一行の料理の用意をするので、事前に確認しておきたかったという。「何でもOK」というスタッフの返事に、「ここで私たちが食べるのは海産物だけ」と、ガビは答えた。実際、出された料理は海産物だけだった。魚やエビが盛り付けられた大皿が食卓に並んだ。

遊動生活をしてきた海の民は、魚を追いかける生活をしなければならない。早朝からコルテス海（カリフォルニア湾）で網を広げ、小さな漁船に一日の獲物を積み込む。海産物の種類が豊富なので、この海域では密漁船や外部からの侵入が見られる。「彼らはあらゆる略奪を行い、コムカクに責任を転嫁しようとする」。

伝統的警備隊隊員でもあるガブリエラは、「領域の再調整」の活動に携わり、海域の監視も強化している。「共同体外から来て漁船を襲撃する」犯罪者を拿



柱サボテンの群生地



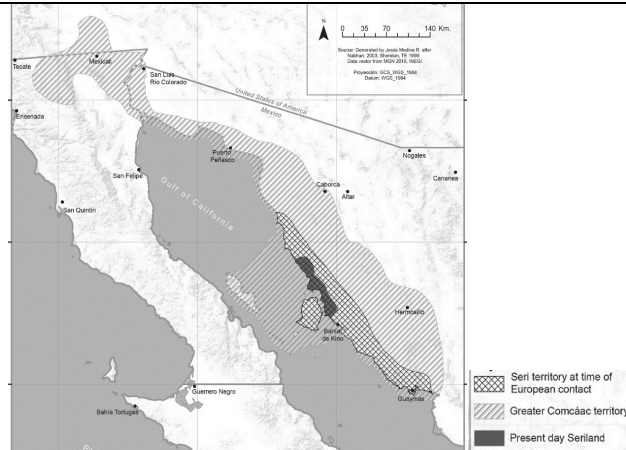
オオツノヒツジ、観光客の密猟対象



コムカクの領域は動植物の楽園



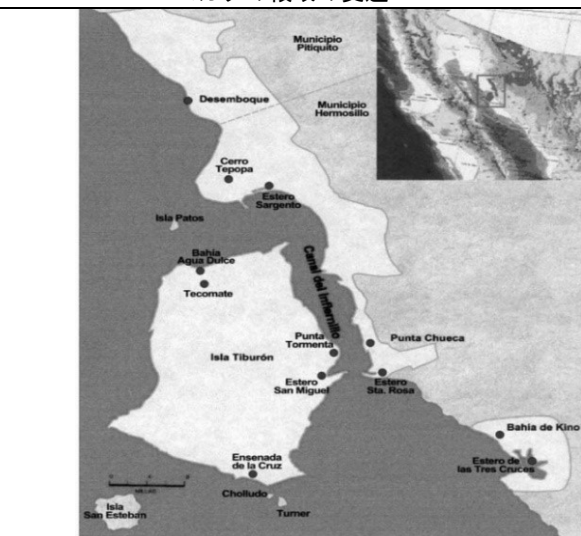
耕地が少なく生業は漁業と狩猟採集



コムカクの領域の変遷



プンタ・チュエカからティブロン島を望む



現在のコムカク領域



制服姿のコムカク国の伝統的警備官

捕したこともある。私たちはそのような人間ではない。私たちは悪いことは何もしない。しかし悪事はいつも私たちのせいにされる。だから私たちは犯罪者たちを捕まえ、行政区警察当局に引き渡している」と、ガビは説明する。

「私は海とともに育ってきた。海は私の人生そのものである。単なる水の集合体ではない。それ以上の何かである。私たちの先祖全員の血の賜物であり、私たちが生き延びている場所でもある。禁漁といった制度〔2012年以降、蟹、海亀、サメ、マンタエイの捕獲禁止〕だけでなく、海を大切に、尊重しなければならない。私たちは時期を限って禁漁するだけではない。この海域は私たちの食料が再生産される空間で、私たちはそれで生きてきている。海は私たちの精神性の一部を構成する。私たちから海を奪うことは命を奪うことである」。

耕地がとても少ないので、セリの人々は漁撈や狩猟を行ってきた。しかしシカ類やオオツノヒツジは激減している。というのも狩猟活動は極秘裏に行われているからである。

この領域の緊張状態は、国内のほかの地域と大差ない。メキシコ全土で問題となる以前から、この地域には麻薬犯罪団体のネットワークが広がっていた。「海軍や治安部隊がいる所では、どこも似たような状況になっている」と、ガブリエラは断言する。以前は、部族の人は告発などしなかったが、「今の若者は変わってきている。意識も高くすべてを明白にしようとする新しい世代がいる」と、彼女は指摘する。若い世代は社会的ネットワークを通じて告発し、そうした行為が許せないことを明らかにしてきている。

私は焚火の前に座り、祖父母の歌や物語を聴いて育った

バチャ山の麓にあるサグアロとピタヤの茂みで、妹のハネイディは「創生の歌（Hamat Cmaa tpaaxi）」を詠唱している。ガブリエラの妹は姉と同じように旧来の殻を打ち破り、伝統的な歌をヒップホップのリズムで歌っている〔プンタ・チュエカ出身の歌手サラ・モンロイと並ぶヒップホップ歌手、環境保護活動にも従事〕。部族の誰もがするようにガブリエラの兄が漁業に従事している間、2歳になったばかりの姪のニコレは片言のコムカク語とスペイン語を喋りながら、海岸の砂浜を駆けまわっている。

ガブリエラは祖母がおこした焚火のまわりで幼少期を過ごした。成り行きから、彼女は祖母によって育てられた。「同年代の女の子と遊ぶ時間はほとんどなかった。祖父母と焚火のまわりに座り、歌や物語を聴きながら育った。幼い時から引き継いだものはとてもインパクトの強いものだった。だから自分の文化、仲間、踊り、コムカクの間人として持っているものすべてに強くこだわっている気がする」。

一人になるとガビは山に入って祖母から借りたマッチで焚火を始め、メスキーテの莢でちょっとした料理をして遊んでいたことがある。「幼年期は一生を決定する」という定言が確かなら、ガブリエラにもその図式は適用できる。生まれて間もなく、母親は叔母にガビの世話を委託した。叔母はガビを祖母の

もとで育てることにした。叔母や祖母は、母娘が別れて暮らさないといけない背景をよく知っていた。

ガビは村にある小学校で学んだ後、中学校二年の時に村を出て、両親と一緒に生活するようになった。外部の人間との関係を築くべきだと判断した両親は、ガビをバイア・デ・キノに連れて行った。彼女はそこで残りの中学校と高校を過ごした。その後、デセンボケに戻ったガビは、「善良な反逆者なら誰もがするように」村を出て大学に進学した。

ガビの反逆の精神は祖父母に培われていた。伝統的な祝祭で彼女が葦の棒を使った男性のゲーム〔6月末の新年祭行事、女性は環状の踊り〕に参加したことを思い出しながら、「祖父母が私に反逆心を教えた」とガビは語っている。「男のすることだから、そんなことをしちゃダメ」と、祖父母に注意されることもなく、「自由な雰囲気」のなかで育った。

しかし、「外部の人」と生活することは彼女にとって不自然なことだった。勉強のために村から出た時、「私たちの実態と違うことで、人々が私たちを非難していることに気づいた。私たちをよく知らないのに、私たちの悪口を言い、差別してきた。バイア・デ・キノで生活しだした時、私の友人から聞くのは、セリ・インディオは野蛮で勉強せず、働くことが嫌いで、人殺しや強盗だという話ばかりだった」。当時、ガブリエラは自分を偽って、母語を使うことはなかった。

現在、CIG 代議員のガブリエラは二つの学士号を持っている。一つはバジエ・デル・メヒコ大学エルモシージョ校の食物学の学士号である。彼女の料理に関する論文は、彼女の民族の代表的な料理に新しい要素を取り入れるという提案だった。論文では、彼女の共同体の先住民の健康に多大な影響を与えている小麦粉の代わりに、メスキーテ〔乾燥地に生える樹高 10m 弱の灌木、莢に豆をつける〕から造った伝統的な粉末の活用を提案していた。その後、メキシコ市に行き、UNAM で政治学を学び始めた。

ガブリエラ・モリナの過去は、彼女が属する人生に深く跡を残している戦士の氏族まで溯る。だから彼女が領域の防衛の闘いに参加しても誰も驚かなかった。彼女が大学での勉強を終えてデセンボケに戻った時、ほぼ同年代の若い女性たちと出会った。誰もが鉱山会社がコムカク領域の半分あまりに進出しようとしていることに強い危機感を抱いていた。

鉱山開発の影響にさらされるもう一つの共同体プンタ・チュエカの仲間と連絡し合うため、彼女たちはフェイスブックのグループを立ち上げた。互いの顔は見えず、ほかの仲間は既婚者で責任役を担えなかったのも、唯一の未婚で子どものいない（現在も同じ）ガブリエラが、非公式だがグループの広報担当として鉱山会社の侵入を告発することになった。

その結果、「ヤキ、マクラウエ（グアリヒロ）、ララムリなどの先住民族の仲間」の闘争と出会うことができた。その後、メキシコ南部の先住民族の仲間とも連絡をとりだし、ショクアウトラ〔メキシコ州先住民族オトミ、聖地通過の高速道

路建設反対] やアテンコ [メキシコ州、国際空港建設計画反対]、ほかの民族などと支援提供のため連絡を取り合った。

最初は「たんなるフェスブックのグループ」だった。「財源も名前もなかった。自分たちが何者かも分かっていなかった」。プンタ・チュエカに移動するガソリン代を捻出するため、共同で出資することから始まった。「私たちはトラックでプンタ・チュエカに向かった。そこでエヒードの代表委員と話し合い、エヒードのメンバー全員が参加する総会を招集してほしいと要請した。人々には何も知らされていないので、鉱山会社に詳細な情報を求めることが目的だった。分かっている情報があれば、知りたいということだった」。

村に帰った女性たちが驚いたのは、自分たちが「マチスタの共同体にいる一握りの売春婦である」と、批判されていたことである。ガビは村の女性を扇動しているとして告発された。「笑うしかなかった。そのように私を後押ししてくれたのは村の女性だったから」。

ガビは書類を抱えてメキシコ市まで何度も行き来した。やがて鉱山会社との闘いで助言してくれる研究者グループに支援され、UNAM で政治学を勉強することになった。当時、鉱山会社は開発に反対している人を脅すために用心棒を雇っており、彼女に対しても死の脅迫が続いていた。

「反対運動を止めろとか、鉱山会社の活動を認めろと、連中は私たちに言っていた。バスケットボール・コートで行われた公開集会で、企業経営者の一人は、妨害されずに操業するにはいくら欲しいのかと、数百万ペソを提示したことがある。私たちの尊厳や生命は売り物ではなく、そんなものは欲しくないと言った」。

鉱山開発権認可の差止訴訟でラ・ペイネタ鉱山の操業は阻止ができた。しかし勝利は書類上のもので、ソノラ州政府は何もしなかった。だから「私たちは実力阻止する必要があった」。彼女によると、女性グループは鉱山に赴いて全器材をバラバラしたという。

UNAM 政治学部のコレクティブや活動家の仲間はけっして降伏しないという彼女の姿勢の拠り所である。「彼らはラテンアメリカ諸国の社会闘争の同志が書いた本を貸してくれた。当時、私は 25 歳だった。何度か国外に出かけ、先住民領域で自然保護グループと共同活動することもあった。海亀の保護活動に携わり、それが縁でパナマ、コロンビアやほかの国の先住民の人と一緒に調査する機会もできた。彼女はほかの先住民族の仲間と過ごすことが気に入っていた。メキシコの闘争のことはあまりよく知らなかったが、私も闘争に参加するようになった。今では誰も私を闘争から引き抜けない」。

「ティブロン島の共有財産防衛の活動のため、私は学業を中断することにした。多大な被害を与えてきた伝統的権威者がいたことが分かったからである」。共同体は若者に信頼をおくようになり、「私たちに法的な対応に関する支援を要請してきた。私たちのグループには、弁護士が一人、エコロジーの研究者が一人いる。現在も私たちはこの活動を続けている」。



6月の新年祭の女性の踊り



妹ハネイディはコムカク伝統歌の継承者



伝統的統治者のガブリエラの父



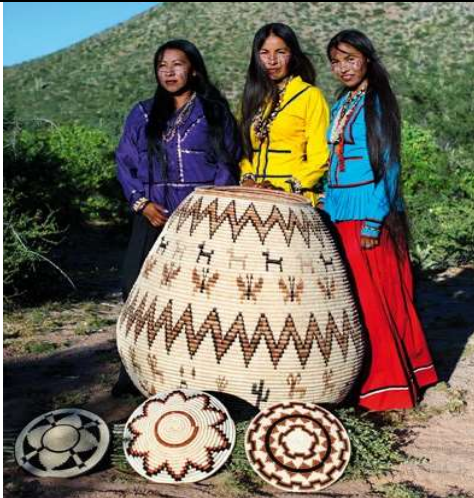
詠唱する古老ドン・アドルフォ



領域防衛グループの記者会見（2015年4月）



ガブリエラの系譜は戦士の氏族



女性は籠細工や石細工の名人



メスキーテの莢から豆を抜き取る

インタビューの翌日の 2017 年 11 月 4 日、女性たちは戦士の氏族の土地に集合した。力強くエネルギーな伝統的統治者のガブリエラの父は、集会の中心行事として皆で分かち合う食事会を開催した。食事会には長老審議会メンバーも臨席し、迷彩服姿の伝統的警備隊は武器を携帯したままで参加した。

最初に来たのは、スカーフで髪を覆った長いスカートの子の女性たちだった。彼女たちは食事の準備を始めた。臓物が煮込まれているかたわらで、取材活動を認可してくれた長老審議会の権威者ドン・ミゲル・エストレージャが発言している。コムカク語は独特な言語である。会議ではエヒードの問題が話題となった（クルミの木陰で女性が筆者のために訳してくれた）。中央には料理が盛られた鍋がおかれ、集会中は男性たちが配膳役を務めた。最後に古老の唄い手ドン・アドルフォが海に向かって詠唱した。ガブリエラは集会で発言した唯一の女性だった。彼女が何を話していたのか、よく分からない。その後、彼女は女性たちと一緒に会合は続いた。

「私は何度も危険な状況にさらされた」と、彼女は認めている。「しかし、この活動を始めた時から、それはみんなのために生きることだとわかっていた。祖父母はもういないが、はるか彼方で私を護ってくれる何かがある。だから怖いと思ったことはない。何かをしようとするたびに、祖父母が教えてくれたように、私は祈りの言葉、祈禱をするよう心がけてきた。私は怖くない。だからと言って、私が勇敢かどうかは分からない」。

トロテの木の皮で丸い籠〔コリタ、直径 20 cm 程度で制作 1 カ月、1.5m では制作 2 年〕を編む工芸品作家でもあるガブリエラの母親は、彼女を見つめながら微笑んでいる。子の女性たちは家族経済の重要な担い手である。現金収入の主要な稼ぎ手でもある。子どもの時から、籠の制作技術を習い、彼女たちが生産した籠は米国の市場でドルを稼ぐようになっている。

白人が到来するまで、コムカクは母権制社会だった。しかし白人がそれを転換してしまったので、ガブリエラのような女性たちは、社会内部の政治体制を元に戻そうとしている。「女性の役割を取り戻したのだが、こうした活動はとてもきつい。以前、特に私の家族では闘いの戦略を練るのは女性の役割だった。鹿を狩猟するのは女性で、戦士たちに仕留めた獲物を渡していた」。

ガブリエラの氏族は父方をたどればまさに戦士の氏族である。一方、母方の系譜は唄い手の氏族に属する。共同体内部の役割に応じて、コムカクには工芸品製作者、精神的指導者、伝統的医療者などの氏族がある。

「幼い時から、お前の氏族はお前に教えてきた。お前に昔からの歴史を語ってきた。お前が自分の民を裏切り、売り渡すことがないようにするためである。お前が共同体や領域の利益を分かるようにするためである。お前を育てながら、どのようにメスティソがやって来たかを語ってきた。彼らはグアイマス港からプエルト・ペニャスコまでのコムカク〔植民地初期のコムカク領域〕を根絶やしするために来た」。

長期にわたる殲滅戦争〔1760・70 年代、1850・60 年代、1930 年代〕を生き延びた 24

家族の子孫たちに、「私たちのもつものをすべて保全し、ここにあるすべてを
保証する」責任をガブリエラは担っている。彼女は揺りかごの子守歌でなく、
戦争の歌で寝つかされていた。

闘う女性もはや料理担当者ではなく男性に従属することもない

2006年10月、別のキャンペーンの一環として、当時の副司令官マルコスが
コムカクのもう一つの共同体プンタ・チュエカにやって来た。それはコムカク
部族がサパティスタやCNIの提起にはじめて接近する機会となった。その当
時、ガブリエラは小さな子どもだった。

彼女がメキシコ国内の先住民族、先住民国、先住部族のネットワークと接触
したのは2016年のことだった。その年にチアパスで開催された会議で、先住
民族の闘争を可視化し、2018年の総選挙に向けての組織化を呼びかける提案
に関する討論が行われた。その橋渡し役となったのはヤキ部族だった。

現在、CNIやCIGに参加しているのはコムカクの若者である。若者の後ろ
盾として彼らを護っている年配者たちは、領域外で開催される集会には若者
を派遣する。ガブリエラが言うように、政党は自分たちを利用・分断してきた
こと、「国内の諸勢力を結集し、すべての闘争を可視化するため、私たちの時
代が到来している」ことに関して、どちらの世代も意見は一致している。

政党と異なり、「私たちは何も約束しない。私たちは先住民族や市民社会を
可視化するものに変えている」と、若い世代の女性闘士ガブリエラは明言する。
「私たち先住民族の組織に関しては、私たちが共同体でどのように活動して
いるかについて外部からでも分かる」ように努めていると、彼女は説明する。
私たちが何も知らない人達で政党は構成され、彼らが勝手に選び、押しつけ、
排除する。一方、CIG代議員は、私たちとともに、それぞれの意思に基づいて
共同体の総会で指名されている。こういった点が政党とは異なっている。

CIGの様々な公的活動での発言者の多くは女性である。広報官マリア・デ・
ヘスス・パトリシオ、通称マリチュイの発言はいつも最後となる。女性の発言
は告発であり、組織化を呼びかけている。「私たちのようにこの活動に携わる
代議員の大半は女性同志である」と、ガブリエラ・モリナは誇りをもって言う。

どの女性同志も、「自分が属している共同体でも活動している。美人だから
という理由で、彼女たちは代議員に選ばれたわけではない。誰もが何らかの活
動の経歴をもっている。女性代議員の多くのは教師であり、医療関係の女性も
少なくない。さらに領域を防衛する社会的闘争にも私たちは携わっている。私
たちは自分の家から一步も出なかった昔風の女性ではない。だからこそ、共同
体あるいは自分が属する先住民族によって、私たちは指名されたのである」。

闘う女性とは、料理をするだけ、男たちに付き従うだけの女性ではない。ア
デリータの慣習〔1910年代メキシコ革命で、料理、看護、助手として従軍した女性の総称〕
に忠実に従うことはない。今では女性は発言し、男性を従えることもある。も
う男性に付き従うことはない。



2016年4月、テポストランへの連帯表明



共同体集会で発言するガブリエラ



女性たちもエヒードの問題を母語で討論



2022年5月大統領訪問にレヒドーラとして意見表明



2022年7月のコムカク聴聞会で



2022年9月デセンボケ30家族の太陽光発電装置供与



2006年、別のキャンペーンのプンタ・チュエカ訪問



2016年1月、2共同体の代表らと水・電力問題を告発

ガブリエラは村にマチスモがあることを否定しない。しかし発言する女性が徐々に多くなっていると確信している。「それは目新しいものではない」と、彼女は明言する。「私たち女性は声を上げ、領域を護るため前進しようと、男性を激励してきた」。昔のコムカクの社会は母権制社会で、重要な決定をする場合、まず女性たちで話し合い、決定していたと、ガビは保証する。

マチスモが「到来したのはそんなに昔のことではない。セリの女性が白人の男性、コシャ (coxa, coksar)、つまりメキシコ人と結婚しだしたことと関係している」と、彼女は説明する。この変化は小さなものは言えない。コシャはコムカクでない人、つまり外部の人を意味する。

砂の民の国を構成している人口は2千人を少し超えている。セリの伝統的統治政府は、1920年の人口はわずか200人だったとしている〔1925年196名、1952年統計で215人〕。セリの人々の抵抗の規模に比例して、セリの人口も増加していった〔5歳以上の母語話者の数は、センサスでは1970年の561名から2020年の776名に増加。先住民自認者は2015年には1,263人とされる〕。つまりセリとしての存在を止めるつもりはまったくない。

「この地で流れに抗しながら、私たちはかつてないほどの活力で生きている。それこそ私たちが望んでいることである。私たちとの事前協議もないまま推進される構造改革に私たちは同意しない。そのことを理解してほしい。私たちは押し付けの開発計画など必要としていない。それを知ってほしい。ここに留まり、参加することを私たちは望んでいる。それを理解してほしい」。

「先住民族の私たちはほかの人たちの声に耳を傾けることに慣れている」と、ガビは説明する。だから、メキシコ国内を巡回する目的で今やっているCIGの取り組みはとても正当なものである。私たちが何もしなければ、何もやって来ない。「私たちは座して何かを待つことはない」と、彼女は断言する。

映像資料

Gabriela Molina Moreno, Concejala comca'ac. Comunidad Desemboque de los Seris, Sonora (7:59)

https://youtu.be/TtX2G1JKx_I

Jóvenes Comca'ac por la defensa de sus territorios (4:55)

https://youtu.be/_4GfKMn4ksM

Janeidy Molina en Estruendo multilingüe 2017 (2:39)

<https://youtu.be/ji-7ugPGa5w>

3 これがあるのままの私、今まで生きてきた私



グアダルーペ・バスケス・ルナ
チアパス州チェナロオ行政区アクテアル
先住民族ツォツィル
1987 年生まれ

10歳のルピータは、小さな体を母親にピッタリと付けながら、母親の命を奪った銃弾の音を聞いた。同じ日に、父、10人兄弟のうち5人、そして祖母と叔父を亡くした。合計9人の家族がアクテアルの虐殺で殺害された。この虐殺を実行したのは、国家が支援していると人権組織が告発している準軍事組織である。その虐殺から20年後、30歳となったルピータは、ラス・アベーハスの指揮杖を受け取った先住民族ツォツィルで最初の女性である。ラス・アベーハスはチアパス州南東部で25年の歴史をもつカトリック系の組織である〔1992年12月、ツァハルチェン・コーヒー生産者組合の呼び掛けで、チェナロオの22共同体とパンテロオ、シモホベル行政区の共同体などで結成〕。

グアダルーペ・バスケス・ルナは、CIGのチアパス州中央・高地部の代議員として、大統領選挙の過程に参加している。人々の正義を実現し、死のプロジェクトに対抗できるように組織化していくことが、この小柄なツォツィル女性が担っている課題のひとつである。教師で二人息子の母親である彼女は、人種差別に満ちたサンクリストバルの街を紫色のウィピルと黒い羊毛のスカートをまとい、チアパス高地の女性の伝統的履物を履き、息子たちとよく出歩く。山々、集落、人の顔などを覆い隠している雲が町に充満する不正や差別の傷痕

までが覆い隠すことはない、ルピータは嘆いている。

「アクテアル虐殺の前から、私には反骨精神があった」と、ルピータは語る。虐殺やその加害者が処罰されないことで、生まれつきの反骨精神はさらに燃え盛った。姉妹の誰もが農作業に携わっていたが、彼女は父に学校に行かせて欲しいと言った。「父は私にダメだと言った。ほかの姉妹は誰も学校に行っていない。だから、私が学校に行くようになれば、姉妹たちは怒るだろう。だから誰も学校に行かない方がいい」。「父さん、私の成績が語っている。私に学校を続けさせて」と、彼女は言い張った。この時から、「私は頭を下げるようなことはしたくなかった」と、彼女は言っている。よくないと思っていることに「それでいいわ」という言葉は、彼女の辞書にはないのである。

10歳の時、家族の大半を失うとともに、学校で勉強する機会も失った。虐殺後の3年間、アクテアルに学校はなかった。その後、ラス・アベーハスが自前で学校を建設した時、ルピータは妹たちを学校に通わせたが、彼女は行かなかった。数年後、兄に勉強を続けたいかと尋ねられ、「もちろん続けたい」と答えた。そうして小学校を卒業できた。中学校で勉強したいと思っていた時、共同体のマチスモが障害となった。「兄はダメと言った。進学しても学校で男を見つけ、結婚するだけだ」。「私の人生だから、間違っても私の責任よ」と、彼女は兄に言い返した。こうして中学校を卒業し、高校に進学できた。

「反骨精神だけでなく自尊心もある」と、ルピータは言う。「誰にも、何も頼らず」、サンクリストバル市で暮らした。奨学金は学費と彼女が住む小さな部屋の家賃の支払しか賄えなかった。何日も食事抜きで、交通費がないので1時間以上も歩く日もあった。一生懸命やったが、力不足とこうした状況が彼女の成績に反映した。「最初の学期の成績は平均より下だった。自信を失って学業を続けられず、泣く泣く退学した。どうしようもなかった」。

チアパス高地の娘

グアダルルーペがインタビューを受けた場所は、虐殺事件後に聖地として記憶を継承する場所となったアクテアル低地地区である。高い建物を取り囲むように、「アクテアルの殉教者」として知られる犠牲者を讃える色とりどりの45本の十字架が建っている。女性19人、男性8人、少女14人、少年4人、母親の胎内にいた4人が、チェナロォ行政区のPRI派の準軍事組織グループによって殺害されたのである。その準軍事組織グループは「メキシコ政府機関の同意や容認のもとで活動していた。それは明らかに『チアパス94キャンペーン計画』で練り上げられた国家の反乱鎮圧作戦が適用されたものだった」と、フライ・バルトロメ・デ・ラス・カサス人権センター（フライバ）は報告している。

ルピータは虐殺以前の幸せだった時代をよく覚えている。今ではこの共同体に虐殺に対する正義の裁きを要求する壁画が描かれている教会が建ち、ラス・アベーハスの執行部事務所、女性協同組合の集会所などもある。しかし20年前には何もなかった。

「その一帯は樹々に覆われた山だった。山に入れば鳥やたくさんの動物を見ることができた。私は木にぶら下がって遊んでいた。靴も履かず、お下がりの服だったけれど、そこら中を駆けまわり、とても幸せだった」。夜になると、集落のカテキスタで道徳的指導者として知られていたルピータの父親が、「焚き火のまわりに私たち全員が座るのを待って、詠唱をはじめ、どのように惨めな生活になったか、語ってくれていた」。

チアパス高地女性の機織りの伝統を受け継いでいるルピータは、木の葉を布に、棘を針に見立てて、刺繍のまねごとをしながら遊んでいた。その女の子が今は CIG の一員になっている。広報官マリチュイを大統領候補として登録するためのキャンペーンを担う彼女の役割は、「共同体のメンバーや住民と話をすること、問題を顕在化し、経験を話し、ほかの人々の経験を共有することである」。村々を訪問し、「今、経験していることを話し、ある人から聞いたことを別の人に話し、皆の力を結集しようと努めている」。

ルピータは次のように説明する。「体験を分かち合い、生活を共有し、いろいろな村々の間で、家族のような結びつきを作りだそうとしている。キャンペーンに加わっているすべての代議員は、自分の場所、それぞれの地域で同じ役割を担うことになる。人里離れた最果ての地、とりわけ別の言語を話す地域に行くなど、多くの課題を抱えている」。

CIG は共和国の大統領の座を目指してはいない。そのことをルピータは強調する。「私たちは政治権力の掌握を求めない。紛争、死者、行方不明者、不正義、日々積み重ねられる凄まじい状況の諸問題について焦点を当てるため、大統領選挙という場を活用するのである」。大統領の椅子は「私たちにとっては死と崩壊を意味する」。だから「私たちの理念とは、私たち自身が自分たちの土地、生命、人権を守るために組織化することである」と、ルピータは語ってくれた。

死のプロジェクト、領域への脅威

チアパス高地の代議員グアダルーペの任務は、40 年以上も前から続いている土地紛争など「地域が抱えてきた数多くの問題」を可視化させることである。

「こうした問題に関して、政府は紛争を解決することや終了させることに関心がない」。デシンフォルメモノスとのインタビューがあった日も、チャルチウィタンとチェナロオ行政区の住民が空に向けて撃つ銃声が近くから聞こえてきた。昔からの農地紛争にともなう境界線をめぐり二つの行政区の住民は争ってきた [1970 年代の大統領裁定による土地区画 887ha をめぐり、チェナロオ行政区サンタ・マルタとチャルチウィタン行政区の紛争]。この数ヶ月で紛争は再び激化し、現在では 5 千人以上の住民が暴力から逃れるため、村を離れ山中での生活を余儀なくされている。

「境界線を確定しなかった歴代の統治者たちは大いに責任がある。現場の村に足を運ぼうとせず、事務所だけで文書を作成するという安易なやり方で対応してきた。行政区間にこうした紛争があつて状況が悪化していることに、政府は関心を持つべきだった」と、チアパス州の共通問題についてルピータは指摘

する。チアパス州では、まさに「命はそれを奪う銃弾よりも価値が低い」と、エドワード・ガレーノ〔ウルグアイ出身の作家・文筆家（1940～2015年）の詩「Los nadies」（1989年）の一節〕が指摘する状態が続いている。

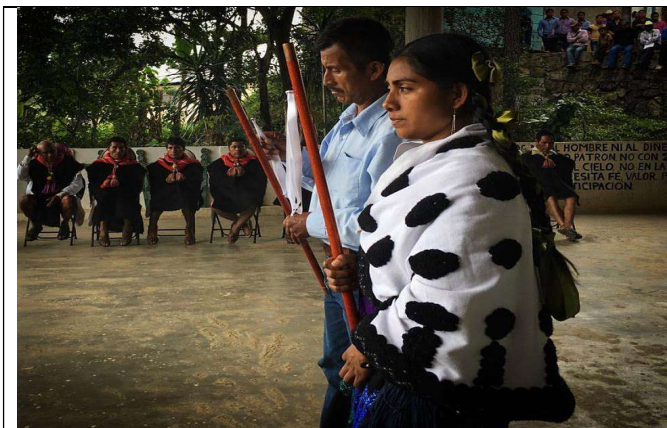
20年前と同じように今も、「多くの暴力、銃弾での負傷者、死者、放火、盗みなど、あらゆることが起きている」。「この聖なる場所、20年前にアクテアルの虐殺が起きた場所でも、いまだに解決の道も正義の裁きも見えてこない」と、ルピータは言う。ルピータなどツォツィルの人々が主要な敵と見なしているのは、加害者が処罰されない帝国の存在である。「上から正義がもたらされることはない。私たちが平穏に暮らせる方法を模索しながら、下からの正義を構築していくように訴えている」と、ルピータは指摘する。

ルピータは正義を目指して闘っている。「いつの日か、アクテアル虐殺事件は共同体内部の紛争ではなく、国家が計画・組織したものであることが認知される」ことを願って、ルピータは闘っている。サパティスタを殺す訓練のために軍隊が派遣されたと、準軍事組織が言っていた。しかし、彼らが殺したのはサパティスタではなかった。対話、習慣と話し合いでの解決を模索していた平和的組織ラス・アベーハスのメンバーだった」。

ほかの地域と同じようにチアパスの先住民領域でも、事前の住民協議抜きで、一連の巨大開発が押し付けられている。「ダムや鉱山を作り、私たちの領域の資源を略奪しようとしている。私たちの領域の一部、特に金や石油、水資源や豊かな動物相などの資源がある領域が売り払われてきた。政府はそれらの資源をすべて売却しようとしていて。すでに売却されたものもある。

サンクリストバルとパレンケを結ぶ高速道路計画〔2009年計画公表〕について、グアダルーペは語る。サン・セバスチャン・バチャホン・エヒードの住民のように、この計画に反対している人々は殺害・投獄されている〔2013・14年に2名の指導者殺害〕。「水や樹木が豊かな聖なる山々を破壊し、私たちを絶滅しようとしている」と、彼女は指摘する。さらにシモホベルの琥珀、チコムセロのバリウムなど、少なくとも州内の29行政区において金、銀、銅、亜鉛、チタンなどの鉱物を略奪しようとしている。環境組織「もう一つの世界（Otros Mundos）」〔2007年創設のチアパスを本拠とするNGO組織〕は、州内には2015年に99件の鉱山開発権が認められ、従来と合わせ総面積100万ha以上であると報告している。

インタビューのため私たちが座っている所からは、青々とした山並みが見える。チアパス高地の山々は、メキシコで8番目に大きなチアパス州の面積750万haのごく一部である。チアパス州の領域は、多国籍企業、政治家、地元企業、犯罪組織、宗教組織などによる争奪合戦の場となっている。その理由は簡単で、熱帯雨林、針葉樹・檜林、雲霧林、耕作・牧草地は州の面積の39%を占め、106もの自然保護区がある。天然資源の豊かなこの地域は、文化面での多様性とも比例している。メキシコ国内の62の先住民のうち12の先住民〔ツォツィル、ツェルタル、 Chol, トホラバル、マム、ラカンドン、カンホバル、チュフ、アカテコなどマヤ系先住民やソケなど〕が、チアパス州で共生し生き延びている。



ラス・アベーハスの指揮杖を受け取った最初の女性



アクテアル低地区に建つ集会所



アクテアルの殉教者の碑



死者は女性 19、男性 8、少女 14、少年 4、胎児 4



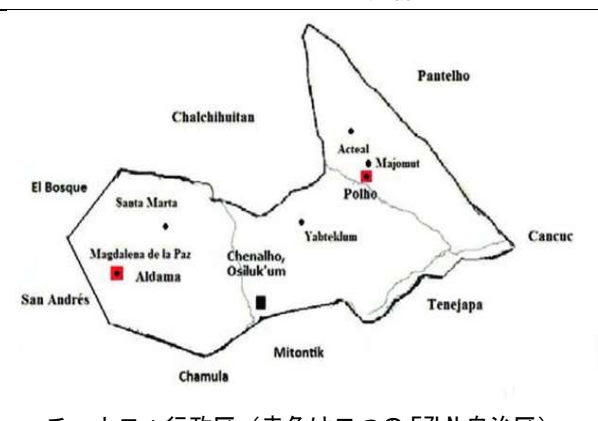
並べられた棺の前でミサをするサムエル・ルイス司教



チェナロオとチャルチウィタン境界紛争



紛争を逃れ山中に避難した住民（死者累計 26 名）



チェナロオ行政区（赤色は二つの EZLN 自治区）

ラモナ司令官のように刺繍をする人

伝説的な女性司令官ラモナと同じように、ルピータも刺繍をする女性である。「ここでは刺繍をしない女性はいない」ので、彼女もアクテアルの女性協同組合の一員となっている。彼女たちの民芸品は、共同体にある店やサンクリストバルの寒々とした通りで売られている。そこでは、地元や外国人の客が商品を値切り、1週間かけて作ったブラウス1枚が5ドルで買い叩かれる。値切り交渉はまさに差別行為の一つである。「よく言われる。『お金が欲しいなら、私の言い値で売ってよ』と。だけど、労力や献身的な愛情までを注いだ品物が、どうしてそんな屈辱的な扱いを受けねばならないの」。

こうした状況に対応するため、ラス・アベーハスは女性グループと民芸品生産の協同組合を作った。ラス・アベーハスの女性たちは、ブラウス、バッグ、ショールなどの作品に、トウモロコシ、太陽、道や山の模様などを木綿糸で刺繍している。「私たちは母なる大地を大事にしながら、伝統を分かち合い、組織や各家族と協同組合組織の家族的な経済を助けている」と、ルピータは語る。

コミタンの著名な作家ロサリオ・カステジャーノスが書いたように〔自伝的小説『バルン・カナン』(2002年、行路社)、値切り交渉は人種差別と繋がる。ルピータはその小説を読んでいないが、差別について次のように語る。

「民族衣装で町を歩いていると、インディオと侮辱され、罵られる。特定の行政区の衣装を着ていても、チャムーラの人だと言われる。チャムーラという言葉は私たちが侮辱するために使われる。彼らは私たちの伝統を知らないし、私たちの豊かさも評価できていない。そして、勉強したいと言うと、汚い、垢だらけのくせに、という言葉が返されてくる。先住民の言葉を話すのを止め、伝統衣装を着るなどという要求が返ってくる。そうした形で私たちが攻撃してくる」。だから、都市部の人たちが私たち先住民の土地に来たら、「私は彼らに私の言語で話しかけるようにしている。理解されれば素晴らしいが、理解されなくてもしょうがない」。

アクテアル、虐殺と記憶

ルピータにとって、アクテアルの記憶は生き続け、正義を要求し続けることを意味している。彼女の証言は、ラス・アベーハスがフライバの支援によって米州人権裁判所(CIDH)に提出した報告書の一部となっている。しかし米州裁判所の判決はまだ出ていない〔2015年10月CIDH公聴会、2020年8月早期裁定要請〕。

今年11月、若き代議員ルピータは国連先住民人権特別報告者のビクトリア・ルシア・タウリ・コルプス〔フィリピンの先住民イゴロット、2014~20年特別報告者〕に次のように証言した。「アクテアル虐殺の責任者は政府の最上位の役職者である。とりわけ共和国大統領〔エルネスト・セディージョ〕、国防大臣、内務大臣〔エミリオ・チュファイエット〕、チアパス州知事〔フリオ・セサル・ルイス・フェロ〕、州警察や地元警察、チェナロオ行政区首長などである。彼らはチェナロオ行政区の暴力が非武装の市民社会、とくにラス・アベーハスに向けられたことを知っていた」。メキ

シコ国家は「虐殺の手助けをした。メキシコ国家は人道に対する罪に関して有罪である」と、ルピータは国連先住民人権特別報告者に述べた。

インタビューで、虐殺当日、準軍事組織が近くに迫っていた時、視線を上げて彼らを見たことをルピータは思い出した。「お母さん！と言おうとした時、母が撃たれた。私は立ち上がって泣き叫んだ。私の中で何かが終わったと思ったから。父は私が泣き叫ぶのを聞きつけ、父に母さんが殺されたと言った。父は降りてきて私を救い出した。…私が少し脇によけた後、連中は全員を撃ち殺しだした。…今日もその場にいた男性、女性、赤ん坊や子どもの泣き声、呻き声が頭の中で響いている。それは私の人生でとても過酷な変化の一つだった」。

ルピータの記憶によると、あの12月22日の以前から「すでに避難民が押し寄せていた。いつものように断食と祈りを行い、神を信賴しているし、神は起きていることをご存知で私たちを気にかけていると言おうと、父は決めていた。12月21日から始まる3日間の断食と祈りの準備をしていた。初日は、全員が集会所に入れなかったので野外の広場に集まり祈りを行った。

翌日、準軍事組織から襲撃するという脅迫が届いたので、父が挫けないようにと人々を励ました。午前9時から祈りが始まり、午前10時頃、遠くで発砲する音がした。私たち全員が神を信じていた。彼らが近づいたので、父は共同墓地の下に場所を見つけ、全員を連れて行った。そこにいれば私たちは助かると思っていた。準軍事組織の連中が私たちを殺すために間近に迫っているとは思いませんでした」。

ルピータは言っている。「連中が母を傷つけた後、背後で照準を合わせているのが分かっていたが、私の恐怖心はどこかへ行ってしまった。…倒れて横たっている母の姿を見る苦痛が私自身の恐怖よりもはるかに大きく、逃げようという気持はまったくなかった。だが、そこから逃げ出すようにと父が私を説得してくれた」。だから、こうして私は生き残った。逃げる途中で、兄と出会い、「みんな死んだ。兄と私しか生き残っていないと伝えた」。私は兄の手を握りしめ、その場から逃げた。

銃撃が終わり夜になり、「姉妹の誰かが生きているかも知れないと、情報を探した。一人でも生きていれば、私も生きている実感がもてる。だが全員が死んだと言われた。私たちは見知らぬ人たちとポロオ避難民キャンプに行った。翌日、姉妹二人が入院しているのを知った。埋葬に行くか、姉妹に会いに行くか、私の頭は完全に混乱していた。私以外にも生きているのを知って少しばかり嬉しかった。しかし、これからどうやって生きていいのか、何が起きるのか、私自身どうなるのかという恐怖で一杯だった」。

1997年12月25日の朝、「チェナロオ行政区のアクテアルには、レポーターやカメラマン、テレビクルー、全国人権委員会、様々な治安警察、教会関係者、近隣住民、犠牲者家族、司法関係者、墓堀作業のグループ、食事提供する『すべてをすべての人のため』キャラバンなどが集まっていた。そこは虐殺のあった場所である。そこでは、人々が祈り、話し合っていた。そこに迷彩服と頭に



チアパス高地のコーヒーは共同で生産流通



コーヒー協同組合マヤ・ビニックの試験場



高速道路計画反対のサンセバスティアン・パチャホン



司令官ラモナの作成の刺繍を掲げる副司令マルコス



刺繍で伝統共有、家族や組織の経済を支える



木綿糸でトウモロコシ、太陽、道、山の模様を刺繍



女性グループと民芸品生産協同組合結成



アクテアルにある自治診療所

赤いバンダナを巻いた準軍事組織が突然姿を見せた。AK43、猟銃で武装した準軍事組織はマチェテを振りかざし、まるで死刑執行の音のような淫らな雄叫びの声を発していた。そこには PRI 派に追放されアクテアルに住んでいた先住民ツォツィルの 325 人がいた。谷間は脱出者の苦悩が満ちあふれていた。敵の消耗を引き起こすための長期持久戦という PRI 派の戦略は、アクテアルでは完全に失敗していた」。20 年前、カルロス・モンシバイス [1938-2010 年、評論家] はこのように記していた。

その日、ルピータは見知らぬ人に付き添われて自分の家に戻った。「家に両親がいないのを知ることは辛かった。兄は死者を墓地に埋葬するため山を降りる必要があった。私は埋葬に際して死者の服を入れる習慣のため、家に立ち寄る必要があった。25 日早朝、叔母と会えた。叔母は私を抱きしめ、私は叔母に『皆、死んだ』と言った。『知っている。でも私が一緒にいるわ』と、叔母は言ってくれた。まさにこの時、人生に一筋の光明を見出せた」。

埋葬の翌日、10 歳のルピータは病院に向かい、二人の妹と会った。「面会した妹たちは、泣き叫び、両親に会わせて欲しいと、言ってきた。どうして幼い妹二人に死んと言えるだろうか。病院に入った時、妹たちはそのことを知らなかったし、ずっと後まで、私はそのことを言えなかった。どうすれば、両親が銃弾で負傷した以上のことを妹たちは理解できただろうか」。

その時からグアダルルーペは小さな母親となった。「幼い少女であることをやめ、一人前の女性である少女にならねばならなかった。兄弟姉妹の世話をする女性にならなければならなかった」。さらに病院では、叔母とともに妹たちの養育権をめぐる争いを展開しなければならなかった。というのは、「妹たちを養子にしたい人が、私の叔母が親族であると信じてくれなかったからである」。養子の件は調停裁判で解決し、ルピータが妹二人の養育をすることになった。

間違いなく、虐殺事件は「私の人生で最も強烈で大きな変化だった。今も、昨日のここのように覚えている。けれども、そのことはアクテアルのような虐殺事件を再び引き起こさないために闘い続け、真実を伝え続ける力を与えてくれた。私たちが体験したことを誰も味わってほしくはない。というのも、虐殺の責任者がここにいて、何もなかったように、何かスポーツを楽しむかのように話しているのを私は知っているから。それどころか、政府は責任者を釈放、表彰している。この国では人を殺しても表彰されることがある。私たちがそうしたことを実際に目撃し、体験してきた」。

ルピータにとって、「記憶することはとても重要である。私たちが記憶しなければ、誰がするのだろうか。それは簡単ではない。私たちのまわりで起きたことに関して抱いている不満や苦痛は、とても大きなものである。正義の裁きがなく、私たちに忘れ難い記憶を忘れるように強いている。生きて記憶することは私にとって難しいことである。だが、記憶をより大きなものにし、世界中の人がアクテアルの虐殺を知ることが私たちに願っている。虐殺の殉死者は忘れ去られてはならない」。

アクテアルが抱える問題は多い。フライバ人権委員会代表のペドロ・ファロは次のように語っている。「現在、チアパス高地では軍隊だけに使用が許されている強力な武器が出回り、チャルチウィタンとチェナロオ行政区の境界紛争で見られるように多くの死者が出ていることも確かである」。さらに「チアパス高地では武器があふれ、準軍事組織の軍事訓練が行われている。この地域でまたも強制排除や殺害が起きようとしている」。

女性は従順で淑やかという伝統

ルピータには独特の美しさがある。大きな瞳と小さな鼻、キリッとした口元をしている。彼女は19歳の時に一人の若者と知り合い、好きになり、家族や共同体の昔からの規則を無視して一緒になった。「誰かがお前を嫁に欲しいと頼んできたら、慣習通りに許可してやると、兄は言っていた。『どうぞ勝手に。誰かが結婚の許しを求めてきたら、兄さんが許可を出していいわ。だけど、私の代わりに兄さんが結婚してね』と私は言ってやった。結婚の許しを請うために、誰も来なかったわ」。

ルピータはアクテアル村の慣習について説明してくれた。「女性は従順で淑やかにすべきとされてきた。家事、洗濯、家族の世話をすべきである。けれども従順にしたくないと、私は自分に言い聞かせてきた。私が外で農作業しているのに、男性は家事をしないなど、私は理解できなかった」。連れ合いとの間に息子が二人できた。数年後、ルピータは再び慣習に挑戦することになった。「私にあるもっとも美しいもの、二人の息子を引取って夫と別れた。前夫は嫉妬深くて酒飲みだったので、これ以上は一緒にいられないと、ある日私は決断した」。

ルピータは語る。マチスモは「共同体ではとても根強く、女性の所有者と考える男性たちがいる。『もう自分の妻だから他の男とは話すな』などと言っている。アルコール依存症がはびこり、酒を飲んで女性を殴打する男性はとても多い。とても悲しいことだが、女性には価値がないという思い込みが刷り込まれている。女性は一人で外出できないし、男性抜きでは価値もないとされる。それが間違っていることを共同体の女性に理解してもらうのはとても難しい」。

連れ合いと一緒にいた時も、グアダルーペは組織化の活動を休まなかった。多くの人には、「女性が夫と離れて一人で何日も遠出することは考えられなかった。『夫はどうしたの?』と聞かれると、『夫は家よ。家で仕事をしているので無理よ』と私は答えた。『どうして一人で来られたの?』と聞かれると、『私が一緒になったのは配偶者で、監視人なんかじゃないわ』と、私は答えていた」。

組織化活動を通じ、グアダルーペやほかの女性たちは村の伝統と異なる考え方に行き着いた。「それはとても複雑で難しかったが、到達できた」。現在、アクテアルには二つの女性グループがある。一つは貯金のグループで共同体銀行のようなものである。もうひとつは民芸品生産グループで、保健衛生プロモーターも養成している段階である〔2022年時点で、合唱隊、演劇班、メディア班も組織〕。どれも簡単なことではなかった。



2017年11月4日タウリ・コルプスと会見



上からではなく下からの正義を追求



2020年8月、CIDHの早期裁定を要求



ラス・アベハスの事務所



兄と二人の妹とその子どもと叔母(右端)



2017年の虐殺20周年の集会での犠牲者の遺族たち



2022年の虐殺25周年で挨拶するルピータ



土地紛争対立で帰る家を失ったチェナロオの女性たち

「お互いに議論し、いろいろ相手に要求し、やりたいことを家族に伝える勇気を備えていく日々が続いた。何事もプロセスを踏む必要がある。自分たちが必要とするものを確実にしていかなければならない。それができた女性は何人もいる。…民芸品生産に携わる女性は仕事が現金収入を得る手立てになることに気づいた。男性だけでなく女性にもできることが分かってきた。同時に、男性に依存すべきでないと意識するようになった」。それは競争ではなく、「ともに歩むことを学ぶことである」と、ルピータは言った。

夜になると寒さが募ってくる。突然、ピンと張っていた静けさが壊されることになった。11月中旬のこの日は一日中、チェナロオとチャルチウイタン行政区の境界線紛争のため、銃声が鳴り響いていた。高性能の銃器で武装した市民による検問所が道中にあり、通行者から協力金を徴収していた。ここは誰の土地でもない。だからこそ、「CIGの理念は組織化すること、力を合わせることであり。とりわけ、人々の存在を可視化し、意識化するため、私たちが全員で支え合うことである」と、ルピータは強調する。

虐殺を生き延びた一人である彼女の祖母は、道中気をつけるようにと、ルピータに向かって言った。彼女は二人の息子に服を着せながら、最後にこう言った。「もともと、これがありのままの私、このように私は今まで生きてきた」。

映像資料

Guadalupe Vázquez Luna, Concejala tsotsil. Comunidad de Acteal, Chiapas (10:51)

<https://youtu.be/867u-WT4Yfc>

LUPITA | Documentales (20:50)

<https://youtu.be/JcDr5pjH5Z4>

De las Abejas que no olvidan: Acteal, Chiapas (27:40)

<https://youtu.be/KEPHDrjaISE>

Guadalupe Vázquez Luna の Facebook

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100063643205299>

4 私たちがすべきことを誰かが言ってくれはしない



オスベリア・キロス・ゴンサレス
モレロス州テポストラン行政区
先住民族ナワ（トラウィカ）
1937年生まれ 2023年3月没

80歳のオスベリア・キロス・ゴンサレスはCIGで最年長の女性である。機敏な人間でも彼女について行くのは一苦労である。誰もが身軽に丘を登り下りする彼女の姿に驚く。彼女は自分たちの領域から丘を削り取ろうとする重機の前に身体を投げ出し、諸要求を広めるため料金所を無料通過できるようにしている。皆は若い時には陸上競技大会に出ていたオスベリア先生を「ガゼル」と呼んでいた。それは納得できる。生粋のテポストラン女性である彼女を知らない人は、テポストラン行政区の役場町にいない。数百人もの教え子たちは、今では人生を積み重ね、親、さらには祖父母になっている。

11月のある日曜日、オスベリアは役場の前で行われている反対運動の座り込みの現場に向かった。それは町を分断し、人々の意向を無視して行われている高速道路の拡張工事〔2車線を4車線に拡張〕に反対するものである。彼女は祭壇を整え、掃除した。彼女の割当分のポスターを受け取って袋に入れると、仲間と合流するために料金所まで向かった。仲間は料金所をシンボリックに占拠し、無料通過できるようにした。通信運輸省（SCT）職員には料金所から退去するか、道を開けるように要請した。運転手には一定の協力金を瓶に入れてもらい、料

金を払わずに通過できるようにした。オスベリアは厚紙のプラカードを広げ脇に置いた。警察が彼女を監視していたが、彼女は見向きもしなかった。

「弾圧など怖くないわ」と、彼女は断言する。「捕まったとしても、連行される所に行くだけのことよ。刑務所なんか大したことじゃない。監獄でも平気よ。本を読めるなら、私たちの祖先がしてきたことに関する本を読みたい。私たちに権利としてあるもの、私たちの領域に関する本を読みたいわ」。

戦士の血を受け継いだ彼女は、モレロス州知事グラコ・ラミレス〔2012~18年、PRD 派州知事〕にも、領域を奪い取ろうとしている多国籍企業の作業員にも同じように対決している。ゆっくりする暇はないし、「時間も足りないわ」と、彼女は言っている。

悲劇の町

近年、テポストラ行政区の役場町にはいろんな観光産業サービスが流れ込んでいる。ホテル、レストラン、アドベンチャー・スポーツなどさまざまな金の使い道が提供されている。週末になると中心街を横切れず、多くの車両が大通りや狭い路地にあふれる。利益を受けるのはテポストラの住民ではない。テポストラは国内に111か所あるプエブロ・マヒコ〔魅惑的な町という制度、2015年111か所、2021年132か所〕の一つに1999年に宣言された〔実際は2001年指定、2009年露店・酒類販売などで指定解除、2010年復活〕。

その指定で「私たちは貧しくなった」と、オスベリアは指摘する。通りに面した家の正面は肝炎患者のような黄色がかった色で画一的に塗られ、テポストラの資源は過剰に開発されている。「下水施設、舗装、街灯も整備されていないのに、観光客を寄せるため外見をきれいに取りつくろう事業しか行われぬ。儲かるのはホテル経営者だけ」。

「ちっとも魅惑的な町ではない。悲劇の町になりつつある」と、彼女は指摘する。「私たちテポストラの住民は町中を歩くこともできないわ。何もかも高いので、必要なものを買うため、ヤウテペックやクアウトラまで出かけている。そこの方が安いからよ」。しかも、「プエブロ・マヒコ割当ての予算の配当は協会関係者が独占している」。テポストラの責任者は「教職員組合運動を裏切った人物」が就任していると、彼女は告発するが、「教職員組合運動に誠実な人がいる」ことは彼女も知っている。

想定されていることと違って、かつてのビジャ・デ・テポストラの昔からの住民は観光業で生計を立てているわけではない。むしろ観光業からは離れている。テポストラの溪谷や山並みの雄大な姿は、ホテルやレストランの経営者を引き付けてきた。しかし「その大多数は外部の人間である」。地元の住民は、荷物運び、給仕係、駐車担当係などのサービス提供者である。地元住民は、畑でとれた農産物を販売し、屋台でチャルーパ、ケサディージャ、エンチラーダスなどを売って小商人である。町の中心にあるトウモロコシや野菜を売っている伝統的な市の消滅を望んでいる連中によって、地元テポストラの人間

は町から追い出されようとしている」。

今では、家の中庭（パティオ）には、昔のように荷物運搬用の牛馬ではなく、駐車する車の列が並んでいる。町の中心部だけでも 100 カ所以上が駐車場になっている。丘陵はもはや主要な観光の場ではなく、投機目的の売買の空間となった。20 年前は 1m²当たり 200 ペソだったが、今は中心部では 3~4 千ペソと 10 倍も上昇している。

週末や祝日になると、レボルシオン通りにはテポストランの住民や外部の人がやっている民芸品やヒッピー風の服の露店、ワラチェリア〔ワラチェの形をした大型のソペス〕や食事の屋台が立ち並ぶ。観光客は通りをぶらぶら散策し、「欲しい物を買って、ある程度は地域経済に貢献している」。

しかし、「別種の観光客」たちは、ヘリコプターやセスナでやって来て、SPA に行きグルメを楽しんでいる。この種の観光はテポストランの人々から略奪するだけであると、オスベリア先生は説明する。この種の観光では、「ミチェラーダ」〔ビールとライムジュースにスパイス、トウガラシ等を加えたカクテル〕を飲み、アイスクリームを食べ、散策し、丘に登り、街で疲れを癒やすということも行われない。テポストランの住民は観光そのものには反対していないと、彼女は明言する。しかしテポストランを世界最大の飲食街に変え、アドベンチャー・ツーリズムで丘を破壊する観光に対しては、テポストランの住民は断固として反対している。

オスベリア先生は次のように語っている。「かつて岩壁画があった丘の一部が最近になって壊された。一攫千金を企んでいる連中がテポストランにやって来て丘を破壊している。連中はテポストランの住民ではない。一時的に儲け仕事に参加しているテポストランの住民もいるが、最終的には切り捨てられてしまうことになる」。

「抵抗する民族、戦士の民族」とされるトラウイカ〔現モレロス州一帯の先住民族、14 世紀半ばからアステカ支配下でナワトル語話者に〕の子孫であるオスベリアは、自分たちに属するものを守るため、テポストランの人々と組織化を進めている。彼女は語る。「テポステコ〔テポストランの山頂にあるピラミッド〕の神は私たちに大切な言葉を残している。自分たちで領域を守りなさい。星ではなく月の光で私たちに騙そうとする連中を信用するな」。

今、資源はまだ十分に残っている。「すべて持っていかれたわけではない」。だが多国籍企業は「領域の奥深くまで入り込み、鉱山、ガスパイプラインや発電所建設〔モレロス統合開発計画の一環事業でのウエスカ発電所〕、さらには高速道路のセメントの塊で私たちの母なる大地を破壊し、事業を完成しようとする」。

作物の代わりにセメント

2017 年 5 月 20 日の朝、テポストランでは、ラ・ペラ＝テポストラン高速道路に 3 千本の伐採された木が放置されていることが判明した。「無許可の立木伐採という環境犯罪」と、オスベリアは断言する。高速道路の拡張工事に関連



高速道路拡張計画反対で役場前座り込み



料金所を占拠し、無料通過できるようにした



近年、テポストランには観光産業資本が流れ込む



経済的な収益は住民に向かわず



地元住民の大半は観光業で生計を立ててはいない



ヨウアリチャンの丘



ヨウリチャン岩壁絵



ヨウリチャンのピラミッド跡

した立木の伐採は、「完全に違法行為だ。私たちの村を分断し、聖なる場所を横断し、環境を破壊する」と、彼女は語る。

オスベリアの説明によると、道路拡張工事に際して、エヒードのメンバーが17kmから20,7kmの土地を「1m²あたり43ペソという廉価」で売却していたという。だから事前占有の協定を結んでいるSCTは、「その区間に限って立木を伐採できる。だが道路拡張計画の0kmから20,7kmの区間にある立木のすべてが破壊されている」と、彼女は話した。

「夜の見回り人」を意味するヨワリチャンの丘の麓にあるヨワリチャン・ピラミッドから少し離れた場所で、オスベリアのインタビューは行われた。ピラミッドにあったいくつもの先祖伝来の石が切り取られ、政府高官の屋敷の壁を飾っている。「とても不当な行為よ」と、彼女は締めくくった。彼女は丘に登り、領域防衛の伝統行事に参加した。

テポストランの住民によって、工事用の重機は何度も操業停止に追い込まれた。住民は裁判闘争を展開し、何度も座り込みをしてきた。高速道路の利権を得ていたトラデコ社〔1992年創業、PAN政権期急成長の建設会社〕に対する最初の事業差し止め訴訟では、3年間の工事中止という措置を勝ち取った。しかし、アングル社をはじめとする会社の工事用重機が再び来て、3年間の「失われた時間」を取り戻そうとしている。

「被害は甚大で、環境を根こそぎ破壊してしまう」と、オスベリアは説明する。「高速道路と料金所の儲けはすべて彼らの懐に入っている。同時に巨大スーパーマーケットや住宅開発が一体でやって来ている。永久保護地区を破壊する許可が与えられている。一方でテポストランの住民はトレーラーの騒音や環境汚染にさらされてしまう」。つまり高速道路は金持ちのためのもので、商品を運搬するためのものである。プエブラ・パナマ計画〔2001年発足のメキシコ南部9州および中米7カ国の広域開発計画〕から派生したモレロス州統合計画〔カルデロン大統領が始めたエネルギー開発計画〕のプロジェクトである。

「政府はとても腹立たしい」と、オスベリアは語る。巨大スーパーマーケットには水が十分に供給されているが、「村の住民は週に一回の断水を甘受しなければならない」。さらに、地域にある500種類以上の薬草などが含まれる植物相や動物相が破壊される。例えば料金所から8km地点に鹿がいたが、拡張工事どこかに消えた。「その山に少し土地があるので、鹿が姿を消したのをよく知っている」と、彼女は話してくれた。

高速道路拡張工事で共同体が分断される恐れがある。この地域は、1937年に当時の大統領ラサロ・カルデナスによってテポステコ国立公園と宣言された。1988年には、アフスコ・チチナウティン生物回廊として宣言され、2000年には、地域の資源は領域環境整備計画によって守られることになった。

オスベリアにとって、高速道路反対闘争は生命をめぐる闘いそのものである。そのため、彼女は村のテポストランの住民とともに半世紀以上にわたって闘ってきた。住民にとって領域防衛の闘いはとりたてて新しいことではない。抵抗

は彼らの生き様にほかならない。住民は、エミリアノ・サパタやルベン・ハラミージョ〔1900～62年、モレロス州の農民運動の指導者〕が人々を率いて闘ったメキシコ革命期の象徴的抵抗についてよく語る。その後1979年には、共同体住民は刑務所建設を拒むことになった。その後も、チャルチの丘からテポツテコの丘までのロープウェイ建設、チャルチの丘の麓への周回道路建設など様々な観光開発計画に対する反対運動を住民は展開してきた。その後、反対運動における象徴的な抵抗とされるゴルフ場建設反対運動でも彼女は先頭に立っていた。その運動は住民が自主管理を实践する場となったものである。

1994年のゴルフ場建設反対運動はテポストランの人々の記憶に残っている。

「人々は立ち上がり計画を食い止めた。重要なのは行政区首長を徒党とともに辞任させたことである。行政区議会の執行部はテポストランから逃亡した。人々の闘いがとても強力だったので、居直れず裏切り者として退去することになった」と、オスベリアは回想する。

私たちは恐怖を制御できる

テポストランで展開したすべての闘いと同じように、ゴルフ場反対闘争における女性の参加は決定的なものであった。「女性は自分で道を開き、闘いの先頭に立った。けれども男性の立場を奪い取るものではない」と、オスベリア先生は語る。「私たちの若者、子どもなど、男性はともに歩んでいる。なぜならもう闘いは全員のものだから」と、オスベリアは確信する。さらに、「男性は昔から権力の座についていたが、上手に仕事ができず、権力を悪用してきた。今こそ、女性が参加する時である。私たちの母なる大地を愛する時である。それを学び、考える時である」。

オスベリアは自らの経験を踏まえ次のように語っている。「私たち女性は何が恐怖であるかを知っている。恐れを制御できる。だから、私たちも積極的に参加する時だ。政治闘争において私たち女性は鍵となる存在である。なぜなら私たちは騙されないし、誠意をもって行動しているから。すでに私たちは、同志や息子、兄弟に対して、女性が参加することについて納得させている。今こそ、私たちは団結し、マチスモや父権主義を終わらせる時である。女性が闘いの前線に立っているとき、男性は食事の準備など家事を助けるべきである。私たちは時間をうまく調整し配分しなければならない」。

今の時代は「知識と力を強める必要がある」と、80歳の彼女は考える。男性を無視することも、「女性を無視することもないようにすべきである」。彼女は幼少期から強い女性で、何ごとに対しても努力を重ね、それを勝ち取ってきた。言葉こそ彼女の武器だった。テクミルコ〔テポストラン東北アマトランに隣接する集落〕にあった祖父母の農場を裸足で歩きまわっていた時から、彼女はおしゃべりだった。ワラチェを初めて履いたのは7歳で、小学校に入った時だった。

アマトランやサンティアゴ・テペトラパ、イシュカテペクといった村〔いずれもテポストラン役場町の東部にある集落〕にある市場に、牛乳やカッテージチーズ、チ

ーズや練乳を売りに行っていたことで、彼女にはおしゃべりが身についた。それらの村には小道を歩いてゆき、祖父がミサに同行する時には馬やロバに乗って出かけていた。7歳の頃から、父親が作ったヒカマ、トマト、ほおずきトマト、フリホール豆、サヤインゲンなどを市場で売る手伝いをしていた。

彼女は市場では耳を傾けながらあらゆることを習得した。「女性たちがヒカマを試食し、私にツォペリ、ツォペリと言っていた。それはナワトル語で甘いという意味だった。それから私にナワトル語で挨拶した。意味がわからず、家に帰って尋ねた。昔は売ったらおまけを付けるのが習わしだったので、彼女らにもおまけをつけていた。だから、私にナワトル語で「ありがとう」を意味するトラソカマティと言っていたのである」。

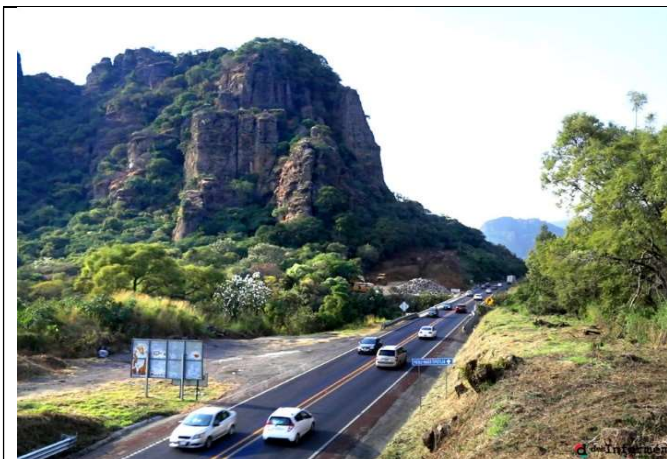
祖父母と一緒に暮らすため、オスベリアはテポストラランからイシュカテペクへ引っ越した。そこの小学校「航空遠征部隊 201」〔第二次世界大戦でフィリピン爆撃に携わったメキシコ空軍部隊に因む〕を卒業し、テポストラランの中学校を卒業し、州都クエルナバカにある師範養成学校を卒業した。彼女が提出した論文は生まれた村の健康に関するものだった。彼女の人生は、「長くてとても素敵だった」と語っている。

「勉強した女性は使いものにならない」とされていた時代に、彼女は勉強した。兄弟の中で学校に行ったのは彼女だけである。ほかの兄弟は学校に行くことを望んでいなかった。1951年、ちょうどオスベリアが小学校6年の時、村に最初の中学校ができた。オスベリアが「私は進学したい」と希望したので、家族は彼女を中学校に行かせることにした。その当時、女性が勉強をしなかったのは、人々がよく言わなかったというだけではなく、交通費がないためだった。この二つの障害は彼女にはなかった。

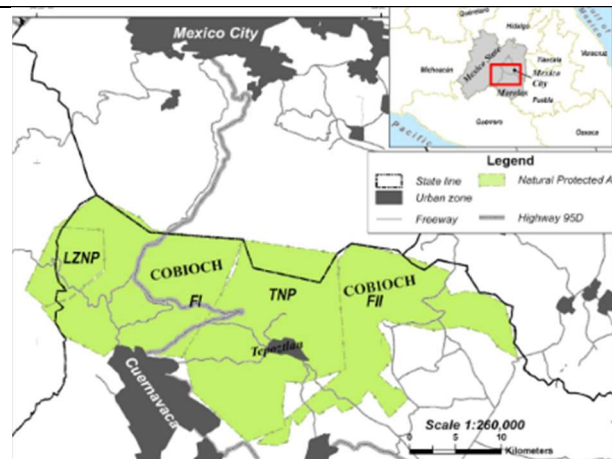
「あの女たちを見ろ」「どうして家にいないのか」「あそこをゴシップ好きの騒々しい女たちがうろついている」「どうして家で洗濯をしないのか」。実際には家事をしているが、こういった悪口が村の女性たちに向けられていた。「女性は自分の家事をちゃんとしている。大急ぎで片付け、鬩いの場に出かける。鬩いに参加しない人たちはそのことがわかってない。そのことに無関心ないせいでもある」と、オスベリアは言う。

中学校の終了時、彼女はその後の進路について考えた。勉強を続けたいのは明白だった。教育かそれとも医療関係につくかで、彼女は葛藤していた。同時に裁縫の仕事にも興味があった。ある日、テホレーテ〔石のすり鉢〕が落ちて、何枚かの皿が割れた。彼女は何とか早くお金を稼ぎ、新しい皿を買わなければと思った。母親は大した皿ではないと言ったが、「新しい皿を買うためお金を稼ぎたい」と考え、裁縫コースだったら手取り早い、つまり「お金をより早く貯められる」と考えたのである。誰も彼女に止めなさいと言わなかった。こうして彼女は裁縫の勉強を始めることになり、彼女は裁縫がとても気に入った。

その後は、教師養成学校へ行った。パルミラ〔州都クエルナバカ南郊の町〕にある師範養成学校で勉強していたが、卒業前にパルパン〔モレロス州北西部ミアカトラン



高速道路は商品を輸送する金持ちのためのもの



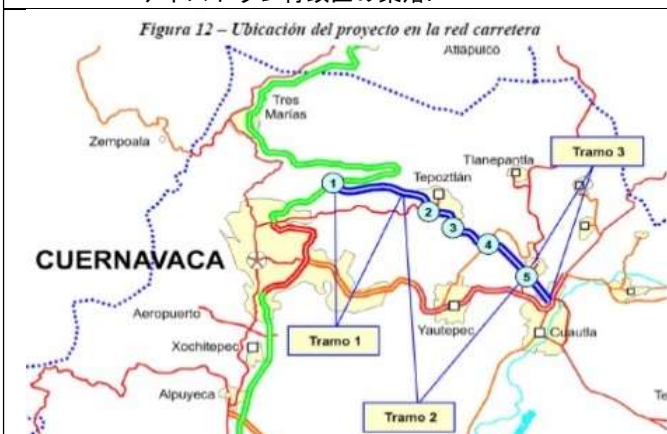
チチナウティン生物回廊 (TNP: テポステコ国立公園)



テポストラン行政区の集落.



道路拡張での無差別樹木伐採は環境破壊



高速道路拡張計画、第1区は5車線



突然伐採された樹々が散らばる高速道路予定線脇



道路拡張の重機を住民は何度も阻止



山は人々を引き付ける場所ではなく投資対象の商品に

行政区の集落]でインターンコースを履修するチャンスを得た。その後、1年間留年せずに卒業するために集中コースを取った。彼女は州の教員免許を取得し、その後には国の教員免許も認められた。15歳になる直前に、彼女は師範養成学校を卒業した。

17歳で教員になるための学位を取得してからは、各地で教鞭をとった。彼女は徒歩や馬に乗って教える場所まで行った。もっと多くのことを知りたかったので、プエブラ市に赴き、師範養成上級学校〔1952年創設〕でも勉強した。そこで授業を受けながら、恋をし結婚し、さらに勉強を続けた。

やったわ

「26歳のときにテポストランで知り合った青年と結婚することになった。私の村とは違う外部の多くの人から、私は求婚されていた。しかし、私はテポストランに帰りたかった。なぜなら村の丘がとても気に入っていたから。好みのテポストラン男性と出会うのはかなり大変だった。村の中心部に住んでいる青年が私を待っていて、恋人になりたいと申し込んできた。

彼がちゃんと学問していないことを私は知っていた。彼は中学校を終了すると、工芸の勉強のためにメキシコ市へ行っていた。『私を好きなの。あなたが学業に励んでいる証明書を見せてくれれば、恋人になってもいい』と、私は彼に言った。さほど時間がたたないうち、彼はエスメラルダにある国立絵画学校〔当時はメキシコ市中心部のコロニア・ゲレロ地区〕の入学証明書を示してくれた。私には選択肢がなくなり、許婚となり、まもなく結婚した。そう結婚したのよ。それは私が28歳の時だった」

当時は空気がとても澄みわたっていたメキシコ市で、私は恋人と一緒に博物館や劇場を見て回った。モディリアニやエル・グレコの作品展や、『シッ、鳴くな。毛をむしられた鶏ども、とうもろこしを播いてやるから』という劇〔エミリオ・カルバリド原作のベラクルスを舞台とした政治風刺劇、1963年初上演〕を観たりした。結婚してから30年後、彼は肺炎で亡くなった。6人の子どもは、「うまく計画し、男女3人ずつできた。長男は少し大きくなった時に市民登録をした。彼が自分で名前を選べるようにした。村の決まりに縛られることなく、子どもたちは誰も洗礼を受けなかった。結婚後も32年間、いくつかの寄宿小学校などで教鞭をとり続けた。

ゴルフ場建設に反対する闘争が始まった1994年に、彼女の夫は亡くなった。これまで彼女はロープウェイの建設、観光列車の敷設、外周道路の建設に反対するいろんな闘いに参加してきた。反抗心にみちた彼女はいろんな場所に姿を現した。いちばん最初は長男を背負ってロープウェイ建設の反対集会へ参加した。「夫はとても驚いた様子だったが、何も言わなかった。集会が終ると、夫は『さあ、家へ帰ろうか』と言った。『やった』と、心の中で私は叫んだ。このように、私はあらゆる闘いに参加してきた。私たちテポストランの女性はとても活動的なよ」。

ドニャ・オスベリアは現在の高速道路拡張工事に反対する闘いにフルタイムで参加している。「自分の仕事を急いで片付けて、出かける」。子どもの何人かは、「もう年なので、危ないから」と意見するが、彼女は80歳という年齢以外、何の問題もないと返答する。「若い人たちが始めた闘いの中で、戦線の同志はとても私によくしてくれる」。今では闘いの同志は家族の一員のようなものと、彼女は言う。

今は人々が主人公の時

テポストラン領域防衛戦線〔Frentes Unidos en Defensa de Tepoztlan, FUDT〕は、CNIとCIG創設に参加することを決めた。CIGは人々の闘いを組織、可視化することを目的としている。テポストラン住民の何名かは、チアパス州のサパティスタ共同体を訪問し、EZLNの土地で何度か開催された新自由主義に反対する集会にも参加したことがある。「そこで、サパティスタの生活のあり方を知った。それは健康的な生き方で、私たちすべての人々が、自由と平等とともに分かち合いたいと願っているものである。その生活ではすべてに偽りが無い。そこでは愛や安心感に満ちている」と、彼女は語る。

オスベリアはCIG広報官マリチュイに同行しサパティスタの5か所のカラコルを巡った。「サパティスタの人たちは私たちの仲間であり、サパティスタの考えに私たちは同意する。けっして容易とはいえないこの道を一緒に踏み出すことを私たちは決断した」。

ドニャ・オスベリアの主張はきわめて明快である。「私たちを根絶やしにし、私たちの母なる大地を売り渡しているこの腐敗しきった体制に、もう私たちは我慢できない。農民やそうでない人たちから、直接、母なる大地を奪っている。私たち先住民を絶滅させようとする。私たちが存在していることを忘れている。けれども、私たちはメキシコに生命を与えている先住民である。なぜならメキシコを支える基盤は大地であり、農民たちはその大地を耕している。それはわかりきったことである」。

私たちを代表していると言う連中が、「自分勝手に何でもやってしまう時代は終わった」と、オスベリアは説明する。「連中は自分たちが手にしていたものをうまく利用できず、バラバラになり腐敗の道をたどっていった。私たちには悲しく不安定で悲惨な生活が残された抵抗の段階から「私たちはさらに前進すべき段階にいる。私たちを代表しているという連中に染み付いている悪癖を一掃するため、私たちは少しずつだが着実に前進している」と、彼女は説明する。それには多くの努力が必要であり、「たやすいことではない」ことを認めている。だから「私たちは思慮深く、知性を備えなければならない。私たちへの待ち伏せが仕掛けられているかもしれない。どれだけの仕掛けがあるか私には分からないが、明晰さ、確信、信念と不屈の精神をもって、私たちは前進していく」

広報官マリア・デ・ヘスス・パトリシオの大統領選挙候補者登録に向けた署名の成立〔メキシコ登録選挙人総数の1%、約86万強が必要、締切り時に約23万筆に留まる〕

の有無にかかわらず、大統領選挙に参加することに関して、CIG 代議員のオスベリアは明確に説明してくれる。「すべては、私たちが参加し、可視化し、組織するためである。財源とか特定の資金援助がなくても、前進し続けるために支援をしてくれる人々の援助が私たちにはある」

先住民女性、治療者、CIG 広報官マリチュイのことを母なる大地を体現する存在であると、オスベリアは指摘する。「彼女は痛みがわかる。なぜなら治療者だから。私たちの子どもたちのことをよく知っている。何しろ母だから」。彼女が CIG 代議員の代表として選ばれたのは、「満場一致だった。偶然ではない。とても潔白な活動履歴の持ち主だったからである。とても知的な女性だったからである」。

オスベリア自身も満場一致で選出された。なぜなら、「そのことを FUDT が決定したからだ」。その決定について、数日間、彼女は考えたという。なぜなら、「決心するのは容易ではなかったが、引き受けて責任を取ることにした」。自分の仕事に関して、オスベリアは次のように説明する。「勧誘活動などをするのではない。私たちは何かを約束し、提供することなどしない。そうではなく、人々に諦めるなと呼びかけ、闘いについて説明していく。恐怖を統制すべきである。分別をもつべきである。弾圧されても沈黙したはならない。沈黙することは絶対にしてはいけない」と、オスベリアは人々を説得する。

インタビューの数日前、行政区警察は活動家が高速道路に反対して継続していた役場前での座り込みを弾圧した。重機を止めようとした仲間も弾圧された。連邦警察、州警察、市警察がきて全員を殴打した。この弾圧の現場に最後まで残っていたのはオスベリアだった。「私は弾圧など怖くはない。恐怖を統制する術を体得してきたから」と語る。

この 6 年間の道路拡張計画反対運動の闘い〔連邦・州政府は差止請求無視、2022 年 10 月大統領 AMLO 出席で拡張工事の再開式〕の中で、活動家たちを直接弾圧したのは警察だけとは限らなかった。行政区当局の役人や建設会社によって雇われた衝突部隊もいた。衝突部隊の要員はテポストラン行政区のサンファン・トラコテンコ〔テポストラン役場町の北の標高 2300m の高地集落、共同体財産管理委員会の役職を 2010 年代に独占〕からきていると、テポストランの共同体成員は説明する。しかし別の時は、彼らは行政区当局側に立つ活動をしてきた。それはテポストラン共同体の土地の半分を自分たちのものとして専有したいからだった。20 年前、テポストランがゴルフ場の計画を差し止めたとき、このグループは個人的な利益と引き換えに行政区政府の側に立って行動していた。

オスベリア先生は指摘する。「彼らはお金が必要なので、衝突部隊として雇われた。250 ペソをもらって、私たちを攻撃するようになった。しかし私は彼らと話し合う必要があるし、自分たちの行動をよく考えるように促さなければならないと思う。私たちの闘いは生命をめぐる闘いであること、いくばくかのお金のためにやっている闘いではない。そのことを彼らに説明する必要がある。彼らに分かってほしいのは、私たちが望むのは環境を救うことである。私たち



料金所でカンパを訴える



父の農産物を市場で売る手助けをしていた



セイバの木の前に立つオスベリア



CIG 総会で承認されたオスベリア (左端)



再燃したゴルフ場計画の反対運動の壁画



支持拡張ではなく闘いの継続を訴える任務



2017年4月、最高裁前での抗議集会の告知



2021年、FUDTの抗議行動

の今いる場所、呼吸している空気、私たちが聞き、私たちに勇気づけ、新しい1日を迎えさせてくれる鳥のさえずりを私たちは救おうとしているのである」。

黒いショールをまとい、丈の長いスカートをはき、多彩色の花の刺繍が施されたブラウスを着たオスベリア・キロス、テポストランと同じように自分も抵抗していると、はっきりと宣言する。

「誰も私たちが何をすべきか言ってはくれない。私たちは何が良いことなのか知っている。私たちの存在かけ、尊厳をもって抵抗することに託していきたい。私たち自身が組織化を進め、メキシコと呼ばれるこの国の先住民族の人々とともに、一歩ずつ前進していきたい」と、彼女は締めくくった。

映像資料

Osbelia Quiroz González, Concejala nahua. Tepoztlán, Morelos (9:09)

<https://youtu.be/GUwPUdthxmM>

INAH Destruye el Patrimonio Cultural de Tepoztlán (4:32)

<https://youtu.be/y-Mb5-wdq9o>

5 水、大地、風力、山林を独占し、私たちがペオン扱いする



ベッティナ・ルシラ・クルス・ベラスケス
オアハカ州フチタン行政区
先住民族ビニサー（サポテカ）
1960 年生まれ

テワンテペク地峡部では多国籍企業が商品として売る目的で風を盗んでいる。このように言いながら、鮮やかな花柄のウィピルと薄手のスカートでベッティナ・ルシラ・クルス・ベラスケスはさっそうと歩く。フチタン・デ・サラゴサを取り囲む広大な平原には数千もの風力発電塔が屹立している。フチタンはオアハカ州の 570 行政区のひとつである。そこで生まれ、育ち、結婚したベッティナは、CIG の代議員として闘い続けている。

インタビューをした 11 月は、テワンテペク地峡を揺るがし、フチタン中心部の家や建物の 8 割強が倒壊した大地震〔チアパス州海岸沖震源、オアハカ州内死者 80 名強〕から 2 ヶ月後だった。フチタンの通りはまるで戦場のような光景だった。重機が瓦礫を集めているかたわらで、テントには強い日差しが降り注いでいた。悪いことに雨は止みそうもなかった。9 月 7 日のマグニチュード 8.2 の地震は地域の歴史を一変させた。150 万人の被災者の日常生活と同じように、フチタン市庁舎の時計は止まっていた。「私は市場に行ってみた。文化会館や教会、学校、市庁舎、約 2 万の家屋が崩れていた。フチタンのほぼすべての住民が家を失し、路上に投げ出された状態だった」と、ベッティナは述懐する。

人々は道路に寝るための部屋や台所を急ごしらえした。装飾品も飾り付けられていた。ある所では花瓶、別の所では机の上にランプがおかれていた。揺りかご、ベッド、書きもの机、ミシンなどが、何もない場所、かつては家だった

瓦礫の山の脇におかれていた。

このような状態から人々は生活を再開した。設営されたばかりの市場には、イグアナのスープ、ウミガメの卵、女性用ショール、色とりどりのウィピル、買い物袋などが並び、人で賑わっている。地震が起きた9月7日から、余震がなかった日は1日もない。しかしこの街の住民は諦めない。女性たちはなおさら諦めはしない。

近代化は大地を汚染、鳥類を殺し、地域の植生や動物相を破壊

ベッティナは土地領域防衛テワンテペク地峡部先住民族会議（APIITDTT）の創設メンバーの一人である。天然ガスフェノサ・ユニオン、エンデサ、イベルドロラなどスペイン系企業が着手した風力発電基地計画に対抗するため、この会議は10年前に設立された。すでにテワンテペク地峡には25の風力発電基地が建設されている〔2019年時点で28基地〕。「どの風力発電基地も住民に何も良いことをもたらしていない」と、彼女は指摘する。「エネルギーを作るための風力利用を望むかどうか、誰も事前に聞かれることはなかった。この土地で風力を発見した企業は風力発電基地を無理やり押しつけてきた」と、彼女は告発する。

地球温暖化や気候変動といった世界の緊急事態の現実から、政治家や企業は風力発電基地を推進するという議論をでっち上げた。再生エネルギーは企業主導で導入されていると、ベッティナは指摘する。人々の雇用や地域の発展を約束したが、「雇用も発展もけっしてもたらさなかった。行政区への税金納付もなされず、税金納付に関する特別免除があったとされる〔2015年フチタン市長は税金納付を請求したが、企業側無視〕。フチタンに立地する風力発電企業は30億ペソ以上の税金を支払うべきで、テワンテペク地峡全域では60億ペソ以上に達する」と、彼女は指摘する。ベッティナは知らないことは語らない。

彼女は、先住民学生向けの奨学金を授与され、「地域発展計画、テワンテペク地峡の地域開発—領域の視点から」という論文で、バルセロナ大学で博士号を取得した〔先住民研究者向け奨学金で2002-07年在学〕。企業家や政府が展開している論理は単純きわまりないと、ベッティナは指摘する。「開発と雇用のセットを持ちだし、地域や州を近代化すべきであると言ってくる。開発という名目で風力発電基地と再生エネルギーがやってくる」。

しかしテワンテペク地峡に住む人にとり、「この近代化は私たちから物を奪うことを意味している。日常の生活、文化、経済、社会生活にマイナスのインパクトしかない」と、ベッティナは語る。この地に到来した近代化は大地を汚染し、鳥類を殺し、地域の植生や動物相を破壊してきた。近代化によって地域の経済活動は息の根を止めようとしている。特に影響が大きいのは、農業、牧畜、そして女性たちの小商いである。

とうもろこしや、狩猟した動物や採集した植物に基づくサポテカの人々の食事体系は大きく変わった。「土地を占拠する風力発電基地ができてから、何もかも変わった。土地は囲い込まれ、以前の生活はできなくなった。社会的紐帯が

壊された。それは先住民族として私たちが持つ最も重要なものだった」と、ルシラ・ベッティナは告発する。

先住民族サポテカ（ビニサー）に関して、ベッティナは次のように断言する。「私たちは今まで集団で生活しながら互いに助け合い、緊密な関係を持って生きてきた。私たちの祭り〔ベラ vela とよばれる祝祭は有名〕はとても大規模で集団的なものだ。誰もがお互いを助けるやり方をもっている。それが崩壊しつつある。なぜなら、企業が特定の人に肩入れし、私たちは分断されている。特定の人に多くを支払うことで、反対意見の人と敵対させようとする。すでに私たちは祭りでも一緒に楽しめなくなった。私たちは分断されている。同じ地域に住む人が殺し合うようになった」。要するに、「私たちは先住民族である私たちの習慣や社会関係の在り方までを失ってえしまった」と、ベッティナは言う。

土地買収のマニュアルに厳密に従って、フチタンの土地取得は進められた。企業は一軒ごとに土地取得の金額を交渉した。初めは支払金額をできるだけ低く抑えた。当初、風力発電塔1基を設置する土地の賃貸に関しては、契約金1,000ペソと12,500ペソの年間借地料が提示されていた。反対運動が組織されると、企業は金額を引き上げた。つまり、契約金は1万ペソ、風力発電塔設置個所の年間借地料は2万ペソに上昇した。風力発電塔がない土地区画にも、1㎡当たり7ペソの補償金が支払われるようになった。

企業が住民の窮乏状態にどうつけ込んでいるかについて、ベッティナは次のように説明する。「影響が大きい風力発電塔2基の設置に必要な土地区画（約5ha）を貸す場合、農家は約10万ペソの年間借地料を受け取ることになる。これだけの金額を農家に支払う企業は、風力発電基地以外には存在しない。しかし、土地や住民の生活への悪影響はまったく考慮されていない」。意味のある収入を得たいなら、最低でも複数の風力発電塔が設置できる50ha程度の土地を貸し出さなければならない。しかし、窮乏状態にある住民の誰一人としてその規模の土地など持っていない。

困窮する農民と違って、企業は1メガワットの発電で年間300万ペソの収益を得る。風力発電塔一基で、1~3メガワットが生産できる。スペイン系企業は電力を生産しているが、他のガメサ〔スペイン風力発電塔製造企業〕のように風力発電技術を売っている企業もある。スペイン系企業はメキシコ企業と提携し、「個別企業向け電力供給」のための合弁企業を創設した。これらの企業が生産するのは、ウォルマート〔米国資本のスーパーマーケット〕、ビンボ〔スペイン資本のパン製造会社〕、オクソ〔メキシコ資本のコンビニチェーン〕、パパローテ子ども博物館〔メキシコ市チャプルテペックにある遊園地〕などの電力である。そのほかにも地峡部にはメキシコ国防省が建設した風力発電基地がある。さらにペニョレスのような鉱山会社〔グループ・メヒコと並ぶ鉱山企業〕も自前の風力発電基地を持っている。

風力発電で利益を享受しているのは、地域に住んでいる住民以外は誰かである。住民は実際の消費電力よりも多い電気代を支払っている。例えば、ベッティナは1,500ペソ〔約8千円強〕の電気料金の請求書を受け取ったという。「どう

してこんな高い金額になるのか。地震から2ヵ月しか経たず、住む家もないというのに」。何もかもがこのような状態である。

地峡部の大部分は25の風力発電基地によって占有されている。2・3台もコンテナを連結した重たいトレーラーが強風から身を守るために2列縦隊で進んでいる。トレーラーを横倒しするほどの強烈な風が吹いているからである。ベッティナと一緒に小高い丘に登ると、巨大な白いプロペラがついた風力発電塔が巨大なダーツのように一面に突き刺さっている光景を見渡すことができる。

その丘から、グリーン・エネルギーと呼ばれるものが浸透している様子が見て取れる。「それは再生エネルギーではない。グリーン・エネルギーが良いものだとしても」と、ベッティナは断言する。どうしてエコロジー的プロジェクトなどと言えるのか。「プロジェクトが来る時に、最初に行なわれるのは森林の破壊や伐採、動物の生息地の破壊である」。当然、ベッティナは風力発電に関して何から何までよく知っている。

「私には緑の森林を失くそうとしているものが、グリーン・エネルギーがかどうかは分からないわ」と、皮肉を込めて言う。「ここで行われているのは、生命を根絶やしにすることである」として次のように説明する。「開発、略奪、先住民族の自然の財産を奪うことに依拠するエネルギーはグリーンとは言えない。住民自身が自主管理し、必要に応じて利用しているなら、グリーン・エネルギーと言える。この意味で、住民が実際に危惧を抱いているなら、多大な被害を与えている水力発電や地熱発電で電力を生産することはやめなければならない。けれども政府はその気はなく、環境を無視し、売るためだけに電力を生産している」。

ベッティナはさらに指摘する。風力発電に「グリーンというラベルをつけて電力を売りつけ、環境汚染が続くことは野放しにされている」。何もかも嘘っぴちである。「再生エネルギーは化石燃料の比率を下げ、代替するものではない。住民にとっての環境の正義は存在しない」。

運動の高揚と法的な対抗という戦略を駆使しながら、マレーナ・レノバブレ社のサンタ・テレサ砂州への風力発電基地の建設計画を阻止することはできた〔2013年10月8日サリナクルス裁判所裁定〕。しかし脅威は第2段階に入っている。風力発電計画は名前を変更して、エオリカ・デル・スルという名前でふたたびフチタンに戻って来た〔2013年4月名称変更、2015年1月エネルギー省認可〕。

「ウアーベ地域の組織化された先住民との間で生じた問題と同じことが起きるのを避けるため、政府は自由で十分に情報が提供された事前協議という方式がフチタンでは導入されることになった。しかし実際はまったく違っていた。事前協議と言える代物ではなかった。なぜなら、彼らは事前協議の前に計画実施の許可のを与えていたからである。また自由な協議でもなかった。すでに住民の中に、企業と借地契約し計画に深く関与する協力者が少なからず存在していたのである。共同体に入るには協力者が必要なことを企業経営者たちはよく理解していた。今では当局の意向を受けた行動部隊までもっている」。



2014 年風力発電反対シンポジウム



共同体集会で男性たちに説明するベッティナ



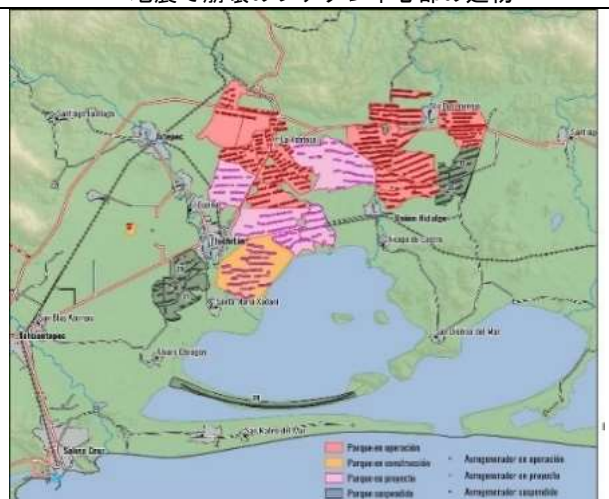
地震で崩壊したフチタン市庁舎



地震で崩壊のフチタン中心部の建物



住宅のすぐそばに立つ風力発電塔



地峡部の風力発電基地の分布



マレーナ・レノバブレ風力発電基地計画



2015 年のエオリカ・デル・スルのフチタン住民協議

2015年12月、領域防衛運動は工事差止めという形で全面停止を勝ち取った。「しかし、政府はオアハカ第7管轄の担当判事を交替させた。先住民の考え方を考慮していた判事は、非常に危険なタマウリパス州管区へ異動させられた。別の判事が第7管区に異動し、私たちが勝ち取った工事差し止め判決を覆したのである。協議が実施されるのが、企業の風力発電基地の建設・操業より前なら〔エオリカ・デル・スルは2019年5月操業〕、協議は事前協議と見なせるという論拠だった〔2017年4月19日、アナスタシオ・オチョア判事の裁定〕。

しかし、実態はまったく異なり、協議は不誠実で既設の風力発電基地を合法的に承認しようとしていると、私たちは反論した。企業家や政府はエオリカ・デル・スルの事前協議を「モデル協議」として宣伝しようとしている。しかし、2015年の差止め請求554号事案は、差止却下の取消を求め、最高裁第一法廷で引き続き審議されている〔2018年11月、最高裁第一法廷は、2016年の差止請求却下の裁定を支持し、事前協議成立と認定。2019年建設完了・操業開始〕。

現在も、地域の海や風は脅威にされされ続けている。つまりサンディオニシオ・デル・マールの地区役員と取り交わした当初計画の契約はまだ有効とされている。だから、状況が変わることを期待する企業側は、当初の契約を破棄しない。一方、政府は、「じっとしているわけではない。何かを画策している。毒薬を注射し、汚染し、住民や闘いの同志や、地域の当局者たちを買収している。あらゆる場所で見られるように、金の力で人々をコントロールしている」と、ベッティナは強調する。

個別に闘うのでは何もできない

テワンテペク地峡はメソアメリカ生物回廊の一部である。世界で最も重要な回廊の一つだが、風力発電はこの回廊の連結性を崩している。その戦略的な位置から特別経済特区〔2016年ペニャ・ニエト政権発表〕の一部を形成している。サリナクルスとコアツァコアルコスを結ぶ両洋横断通路の建設構想によって、地峡の自然環境は絶えず脅かされてきた。パナマ経由よりもずっと安く環太平洋経済圏に近づくため、地峡横断高速鉄道の軌道復旧と高速道路の建設は構想されたばかりの計画の一つである。

エルナン・コルテスが到来してから、地峡横断鉄道は着想されていた計画だ。ベラクルス州コアツァコアルコスから太平洋側地峡に至るルートはヨーロッパへ商品を運ぶ理想的な最短ルートとわかっていた。後に、独裁者ポルフィリオ・ディアス〔1870年代から1911年大統領〕がこの計画を再検討したが、テワンテペク地峡を譲渡するマクレイン・オカンポ条約を締結したのはベニート・ファレス〔オアハカの先住民出身、1861~72年大統領〕だった。幸いにも、「地峡部はメキシコに返還された。もしそうならなかったら、私たちは米国に附属する地域になっていた」と、ベッティナは指摘する。

メキシコ全土と同じようにオアハカ州各地に鉱山がある。地峡部では、サンディオニシオ・デル・マールに三つの鉱山開発権が認められている。サナテペ

クには二つの開発権が認められ、イシュテペクではすでに一つの鉱山が操業している。金、鉄、銀、リチウムなどが地下から掘り起こす資源となっている。岩塩やセメントを生産する鉱山もある。鉱山の被害はとても破壊的である。

人々の意思を買収するのが鉱山会社の常套手段である。イシュテペクでは、共同体財産管理委員が買収されて反対運動は潰された。その結果、風力発電基地や送電線の建設に必要な開発権認可が進んでしまった。政府側の戦略は「共同体のメンバー数人を買収し、総会でその中の一人を共同体財産管理委員会委員長に選出する」と、ベッティナは説明する。一方で、サナテペクでは抵抗運動が勝利しつつある。住民は鉱山会社のために活動していたコンサルタント会社を閉鎖し、鉱山を拒否する共同体と宣言し、首長も支持した〔2016年11月、領域として宣言、2018年と2022年に行政区として宣言〕。「この宣言だけでは実効性がないのが問題である」と、彼女は指摘する。「だが組織化は進んでいる。鉱山操業まで待てない。鉱山会社はいったん入ると出ようとしない」。

政府発表の経済特区によって、地峡部特区は、太平洋側のプエルト・チアパスやミチョアカン州ラサロ・カルデナス経済特区とともに略奪や破壊が進展している。政府開発戦略の分析専門家は、経済特区が極めて特別なものと説明する。経済特区では、企業は税金を免除され、企業が支払う給料、ゴミ回収や道路建設など企業が必要とするサービス提供のために行政が負担すべき財源も決めることができる。当然ながら、行政区の財源は限られ、それを管理する行政区首長や議会は一握りの者に委ねられている。こうしてわずかばかりの予算も企業に持っていかれると、ベッティナ・クルスは警告する。

「企業は水、大地、風、山林を占有し、私たちをペオン扱いする。私たちを根絶やしにしようとする。先住民族としての生き方、私たちのあり方、文化を軽蔑しているからである」と、彼女は主張する。だから「私たちは民族や組織され人々と一つの会議として、CNIやCIGに参加する。なぜなら個々に闘うのでは何もできないから」。

弾圧と投獄、迫害と脅迫

テワロンテペク地峡の人々が掲げた要求に対する答えは、弾圧と投獄だった。ベッティナは迫害され、殴打されてきた。ピストルをこめかみに突きつけられたことや、拷問されたこともある。また、彼女は投獄され、何度かは、嫌がらせや監視から逃れるため、共同体から避難しなければならなかった。

2012年のある日、警察が彼女の家に来て、彼女を連行した。国の資源に損害を与え、他人の自由を侵害したとして、彼女は告発されていた。3日間の拘留後、釈放されたが、2015年に無罪になるまでの4年間、裁判に対応しなければならなかった。

「あなたは人権擁護活動家と言われているが、収監されているこの場所では人権などない。ここは俺たちが仕切っている」と言い放ったのは、5時間におわたって彼女を不当拘束した連中だった。その5時間の間、恐怖心を与える目的

で、彼女は別の護送車に乗り換えさせられた。テワンテペクの刑務所に彼女が生きた状態で収容された時、彼女はやっときちんと対応されていると思った。刑務所の外では、同志たちが徹夜して待っていた。

ラ・ベンタ〔フチタン市北部地区〕にある橋で風力発電反対のデモをしていると、銃を手にしたアクシオナ社の労働者のグループが来て、彼女たちを足蹴にした。死の脅迫を受けたベッティナは、3 ヶ月間もフチタンから姿を消さなければならなかった。彼女が逮捕された1年後にも、彼女は身を隠すことになった。なぜならマレーナ・レノバブレ社の工事差し止め請求が承認されたため〔2012年12月7日第7管区サリナクルス裁判所〕、企業側は彼女と夫の殺害を画策していた。武装した殺し屋たちが彼女の家を監視していたので、夫妻は6 ヶ月以上〔2013年2～9月〕も共同体を離れることになった。

テワンテペクの女性

テワンテペク地峡では、男性も女性も闘いや共同体や家庭での重要な決定には同じように参加する。フチタンの女性たちは「運動に参加し、意見を表明し、意思決定する」と、ベッティナは確認する。だが次のようなことがあることも知っている。「それができない女性もいる。女性が強い力をもつ家族でありながら、結局は男の言うことに従うことになっている。ここでは家父長制の問題は解決済みとはまだ言えない」

女性写真家グラシエラ・イトゥルビデが頭にイグアナを載せた姿で紹介したテワンテペク地峡の女性たちは〔Juchitan de las mujeres, 1979年〕、男性と漁に出かけ、畑を耕している。「女性の手には生産物があれば、それを使える形に変え、商品として交換することができる。女性は刺繍、裁縫、料理など、何でもできる」と、ベッティナは誇らしげに言う。

組織や闘いの先頭に女性が立つのは普通のことである。デモで警察と対峙する時も同じである。身の回りにある道具で身を守ることもやぶさかではない。「デモでは女性が先頭にいるのが常だった。先頭に立てば、警察が女性に触れないというのが昔の考えだった。だがその考えは終わってしまった」。警察は女性も無差別に殴っている。それでも女性たちは前進し続ける。マレーナ・レノバブレ社の警備隊員70人が砂州に侵入した時、女性たちは投石、放水で対抗し、こん棒をもって正面から警備隊に立ち向かった。

また、女性はいろんな会議に参加し、発言し、議論し、決定する。「けれども、彼女たちは代表やそれに相当する役職の座などを望むことはない。時間の無駄と考え、彼女たちに情報をしっかり伝達する人物を代表として派遣することを考えてきた」。

だからCIG広報官が「共同体出身で先住民語を話す」先住民女性であることは重要であると、ベッティナは言う。そのことに驚いた地峡部の女性は、「深く考え始めた。先住民であること、先住民言語を話すことは何ら制約でなく、まったく逆であることは明らかである。このように考えをめぐらすことで、私た



最高裁に差止判決支持を要請



テワンテペック地峡部と経済特区



林立する風力発電塔



木陰でくつろぐ伝統衣装姿のフチタンの女性



G・イトゥビデ写真集の表紙



アルバロ・オブレゴンの共同体集会所



共同体集会で意見表明する女性たち



1981年、フチタン市長選で勝利した COCEI

ち女性はみんな強くなる」。とはいうものの、「テワンテペク地峡は牧歌的でも辺鄙な所でもない」と、ベッティナは言う。マチスモが存在しているし、今でも男性が妻を殴ることがある。妻を外出させず、妻に対する支配権を維持しようとする。だがベッティナはそのような女性ではない。

インタビューは日曜日に行われた。CIG 広報官マリチュイとサンティアゴ・ホコテペク・チョアパンを巡回・訪問しての帰りだった。11月12日、テワンテペク地峡の共同体でもっとも強力に風力発電に反対しているアルバロ・オレゴンに出かけることになっていた。アルバロ・オブレゴンの集会では、誰もがマリチュイの到着を待っていた。彼女が到着すると、ベッティナが挨拶し、ビニサー語で話した。

共同体の集会では政党についての議論があった。「政党はただ提案し、約束し、分断するだけで、公約は何も実行してはいない」。同時に領域の脅威、組織化、CNI や CIG の提案についても話し合った。ベッティナは7つの原則〔CNI が掲げた行動基本原則〕について説明した。「説得し、論破しようとしなさい」。また「人々の意見に従い命令しない」。これから到来するかもしれない厳しい時代についても語った。

街を歩いていると、寝るにはいくらだと叫ばれた

思春期のベッティナ・ルシアは政治に参加し始める。彼女の言では、当時は今ほど雄弁ではなかったが、政治に参加した。13歳の時、彼女は地域の中学校で組織されていた農村部の学生運動に参加した。バス賃値下げを求め、学生はストに参加した。学生が呼びかけたのは人民支援学生審議会の結成だった。1977年のことで、地峡部労働者農民学生連合〔COCEI、フチタン本拠に1973年結成〕が大規模な組織化の活動を始めた年だった。

母親の影響がベッティナの自己形成に大きく関わっているのは疑いない。当時は離婚などが考えられる時代でなかったが、母親はひどい扱いをしていた連れ合いと別れることにした。母親は15歳で結婚したが、16歳で離婚し実母のところに戻った。それから亡くなるまで、ベッティナの母は働きづめだった。ベッティナと姉妹は祖父母のもとで育てられた。祖父母が亡くなった後、彼女たちを養育したのは叔母たちだった。商売に携わっていた母親は、メリダ〔ユカタン州都〕やチェトウマル〔キンタナロー州都〕で仕入れた布地、玩具、腸詰、大きなチーズ、青缶入りバターなどを売っていたのである。

テワンテペク地峡社会での女性の主体的役割は神話になるぐらい有名である。知性や力、喜びなど、女性は多くに抜きんでている。お話し好きの女性は組織をまとめることに長けている。以前から COCEI のような社会運動でも女性は重要な役割を担ってきた。1981年、COCEI は当時不敗を誇った PRI を打ち破り、フチタン市長の座を勝ち取った。

このような女性社会の枠組みの中で、ベッティナや先祖や子孫は育まれた。ベッティナは5人兄弟の4番目だった。母親が商売に出かける時は、子どもた

ちが豚の世話や餌やりをしていた。これから、「雌豚が落ち着いているか、見ておいで」という言い回しがうまれた。子どもは家畜を世話し、大人の会話に口を挟まないのは当たり前とされた。

大半の女性は伝統的ペチコートを着ていたが、ベッティナは幼少時から普通の服を着ていた。学校では女性は制服の着用が義務付けられていた。しかし大きくなると、「抵抗と反乱」という闘いの一環として、彼女はビニサー（サポテカ）の伝統衣装を再び着ることにした。それは、色とりどりの花やチェーン・ステッチの刺繍が施されたウィピルと丈の長いフリルがついたペチコートの組合せになっている。

多くの先住民共同体では女性は伝統的衣装を着なくなっていたが、テワンテペック地峡では大多数の女性が自らの伝統衣装を着てサポテカ語を話す、何も差別されない。地峡部地域では外部の人が祭りに参加するには、先住民衣裳を纏わなければならないことが、頻繁に見られる。テワンテペック地峡から出て、自分たちの言語を話し、本来の衣装を着ようとすると、人種差別を体験することになる。

ベッティナはバルセロナに住んだ体験がある。彼女は博士号取得のために国際色豊かな都市バルセロナに来た。バルセロナでは、先住民でメキシコ人女性ということで差別された。「街を歩いていると、『寝るにはいくらか』と大声で言われた。あの国で単独で行動する女性は性労働（売春）のたぐいの仕事をしていると考えたのだろう」と回想する。

メキシコ市でもバルセロナとあまり変わらない差別を受けてきた。ウィピルで街を歩きホテルやレストランに入ると、「他の人と同じようにあなたに対応できない」と言われる。だからこそと彼女は言う。「これも闘いの一部で、あらゆる場所に誇りを持って入るべきである。自分の言葉を話し、食物を食べ、祭りを催し、踊りを踊ることも闘いだ。これらすべてを取り戻す必要がある。何か問題があっても、それを抱えて生きねばならない」

中学校を卒業した彼女は、進学のためにメキシコ市に行った。まず UNAM 付属の南部文理高校、次に UNAM クアウティラン校高等教育学部に入った。大学では農学コースを専攻した。「自分の町に帰り、農業をやりたいと思っていた」。メキシコ市に住みながら、同時に COCEI の活動にも参加した。当時は、全国アヤラ計画調整委員会〔CNPA、1979 年創設の独立系農民組織〕、反弾圧国民戦線〔FNCR、行方不明者の母親の呼び掛けで 1979 年創設〕、全国教育労働者調整委員会〔CNTE、政府系組合 SNTE に対抗する独立系組合〕など 1980 年代の重要な運動が高揚していた時期だった。ベッティナは COCEI の一員として FNCR や CNPA の活動にも積極的に参加し、多くの農民リーダーと知り合った。

やがてメンバーの多くは体制側に寝返りだした。だが当時は誰もが戦闘的だった。1981 年には複数の大使館を占拠し、ベッティナは初めて刑務所に収監された。「フチタンの問題や不正選挙を暴露するために組織された行動で、私は 3 日間留置された」。ハンストなど様々な行動を組織し、新たな市長選挙を実現



女性用上着ウィピルの刺繍



草原を民族衣装で颯爽と歩くベッティナ



2019年再生可能エネルギーの講演（メリダ）



風力発電基地の前で話す夫ロドリゴ



パレンケ遺跡での母と二人の娘



APIITDIT のエンブレム



2021年9月風力発電グナー・シカル建設差止記者会見



2018年1月、CIGのニューヨークでのキャンペーン

させた。「COCEI が土地と共同体財産管理委員会の民主化を求める闘いから人民市議会の再構築をめざす闘いへ進化していった輝かしい時代だった」。

しかし何年か経つと、「運動は一握りのリーダーに牛耳られ、人民議会は体制化していった。今では彼らは私たちが闘うべき敵になってしまった。彼らは私の昔の同志だった」と、ベッティナは嘆く。COCEI の運動が体制化していくと〔1988~2001 年は COCEI と PRD 共同候補が市長就任〕、昔の同志は「ほかのことをするようになった」。彼女は COCEI の活動から離れ、学問の世界に入ることにした。1986 年に UNAM を卒業、農学士の称号を取得した。同時に、大学や運動で知り合ったオアハカ州の海岸部出身の同志ロドリゴ〔オアハカ州西部海岸コスタチカのアフロ系〕と結婚した。その後、彼女はフチタンに戻った。その時の彼女は 26 歳だったが、現在まで二人は一緒である。

その後、前向きで強い性格のベッティナは国立チャピngo自治大学〔メキシコ州テスココの農学中心の大学〕の農村地域開発の修士課程に入学した。修士課程修了後（2000 年）は、奨学金を取得しバルセロナ大学の地域発展計画に関する博士過程に進学した。大学のあるチャピngoの街では、娘たちと歩いている彼女の姿がよく見かけられた。一時期ではあるが、彼女は夫ではなく娘たちをヨーロッパに連れていった。彼女は母親そして研究者として生きてきた。

彼女は『テワンテペク地峡の地域開発一領域の視点から』という論文で博士号を取った。論文を執筆している過程で、政府が計画する地域開発の情報を見つけ、昔の闘争の同志に情報を提供しようと考えた。その情報は企業の事業内容と収益率に関するものだった。憤った人々は組織化に着手し、2007 年にフチタン領域防衛会議が生まれ、2009 年に APIITDTT に改組された。

APIITDTT には、サンフランシスコ・デル・マール、サンディオニシオ・デル・マール、チャウイテス、サナテペク、タパナテペック、ウニオン・イダルゴ、アルバロ・オブレゴン、サンアタ・マリア・シャダニの人々なども結集し、マレーナ・レノバブレ社に対する闘いを開始することになった。

彼女によると、地峡地帯に起きていることは「メキシコのどこでも起きている。すべての闘いが互いに連帯すれば、それぞれは小さくても大きな力になる。それが CNI のプロジェクトである。選挙のためではなく、生活のために、私たちは組織化する」。どんな闘いでも「それを続ける意味がある」と、彼女は断言する。地峡部においては風力発電の問題を顕在化させることができた。「グリーン・エネルギーの問題点を暴露し、それがもたらす影響について議論を提起し、抵抗運動の中で活動してきた。組織化が推進され、領域防衛の新しい組織 APIITDTT も生まれた」。

「一握りの金持ちが一部の外国人と結託して私たちの国を独り占めすることはできないし、不当なことである。状況を変革し、尊厳ある生活を手にすることを私は夢見ている。私が強い人間かどうかは分からない。だけど私はとても強いと確信している。私たちは力を振り絞らなければならない。私たちには自由と生活の権利がある」と、ベッティナは締めくくった。

映像資料

Bettina Lucila Cruz Velázquez, Concejala binnizá. Juchitán, Oaxaca (8:35)

https://youtu.be/HrIa3tX_378

Bettina Cruz Vazquez del pueblo Binizaa del Istmo de Tehuentepec, Oaxaca (14:50)

<https://youtu.be/0M90jh29Y3E>

Vientos de discordia

<https://youtu.be/Y2MvuGVqEAQ> (3:43)

6 女性は今以上のものを求めない。私たちの声に耳を傾けて



サラ・ロペス・ゴンサレス
カンペチェ州カンデラリア行政区
先住民民族マヤ
1965 年生まれ

監獄の騒音、扉をたたく音、打撃音を忘れるのに、サラはずいぶん時間を要した。それらは高額電気料金に反対する闘争で収監されていた 11 カ月間、彼女をギクッとして飛び上がらせてきた悪夢である。監獄の鉄格子が閉まる音を最初に聞いたとき、不当な収監であることが分かっているため、彼女は負けるものかという勇気や憤りとともに、無力感も感じた。国内外の世論の圧力によって釈放されると、サラはすぐに闘いに復帰したが、今度は不当な電気料金に反対する闘いだけでなく、マヤの土地を守る闘いに携わるようになった。現在、彼女はカンペチェ州の CIG 代議員でもある。

52 年前、サラ・ロペス・ゴンサレスはカンデラリアで生まれた。咲き誇っている花に囲まれた自宅の前庭に座ったサラは、彼女のグループとともに CNI の呼びかけに加わることを決意し、「人々を組織」しようという提案の一翼を担うことになった時のことを振り返る。2006 年、EZLN が呼びかけた「別のキャンペーン」に彼女は参加した。このキャンペーンは、政党や選挙の枠組みから離れ、下のメキシコを巡り歩き、資本主義がもたらした掠奪、搾取、侮蔑や抑圧に立ち向かうため組織化を進めようと呼びかけていた。

CIG についてサラは次のように説明してくれた。「CIG は大統領の椅子を目

的にしてはいない。人々の手による自己統治と組織化をめざしている。私たちが一つの共同体で進めてきた組織化を、州、ユカタン、全国レベルでも進めていきたい」。CIG 代議員である彼女の仕事は、「地域を駆けめぐって、提案の説明をすることである」と、サラは説明する。「私たちは大統領の座や政党になることを目指していない。私たちは政党のようにならない。他人を利用して生きる腐敗した存在などになりたくない」。そして、彼女はその違いについて説明してくれる。

カンペチェ州にはサラ以外に 8 人の代議員がいる〔先住民族 Chol 3 名、マヤ 2 名、ツェルタル・ナワ・メスティソ各 1 名〕。「そのうちグアテマラ国境に隣接する地域の 2 人の同志は、土地を守る闘いに従事している」。マヤの人々は、地域が抱えている諸問題に関してどんな解決法を CIG は提供してくれるのか、サラを含めた 3 人に質問した。期待外れの答えとなるが、CIG の答えは解決法を示すというものではない。

「それは人々と一緒につくりあげるもので、どう統治すればよいというマニュアルはない」。その例のひとつはサパティスタの「よき統治議会 (JBG) である。JBG はマニュアルを提示することはしない。しかし JBG は一つの現実的な可能性を提示している。「広報官マリチュイも CIG も、あなたの抱える諸問題の解決のため、あれこれプロジェクトを提供するなどとは言わない。そんなことをしたら、既存の政府や政党と同じ陥穽に陥ってしまう」

サラが組織化の難しさについて語っているとき、孫たちがトランシーバーごっこをしながら小学校から帰ってきた。家に入ったとき、孫の一人が突然立ち止まった。「こちらから呼びかける。おばあちゃんはインタビュー中。了解、どうぞ」。一方、小さな妹はすぐさまサラに近づき飛びついた。サラに抱きキスを浴びせた。孫たちは遊び続け、サラと同居している家を駆けまわりつづけた。

「彼ら、子どもや孫のために、私たちは闘っている」とサラは言って、政党に関する意見を表明し、「政党は私たちが分裂させてきた」と指摘する。政党の宣伝は「村々や共同体に浸透している。私たちはそれに逆らった動きを展開している。私たちは人々の思想を変革する手段をもっていない。活動はとても大変だし、人々がものごとを違った目で見るとするには、大変な労力が必要となる」。

マヤの代議員であるサラは、CIG の提案は選挙で終わるものではないと強調し、「これはとても長期にわたる抵抗の闘いのプロセスである。それは、選挙で勝とうと負けようと、投票しようとするまいと、2018 年以後も続く。その目的は、先住民族もそうでない人も、農村の人も都市の人も、この国を組織化していくことである。少なくとも、私たちはその作業をすでに開始している。私たちが新しい生活に到達できた時に、初めてこのプロセスは終わる」

CIG は広報官として一人の女性を任命した。マリチュイの名で知られるマリア・デ・ヘスス・パトリシオが下のメキシコを巡歴する目的で実施したキャラバンの参加者の多くは女性だった。先住民広報官の一女性とともに、「私たちは

ここにいると世界に伝えたい。私たちが望むのは、すべての人のための生活である。すべての人々と女性たちの言葉を一人の先住民女性を通して伝える。私たちはここに生きており、もう、たくさんだと、この資本主義システムに宣告するためである」と、サラは説明する。

私たち女性はすごい存在である

サラの考えでは、自由に闘いに赴き、人々と信頼関係を築いている女性はまだまだ少ない。あるいは人数が少なくないとしても、その女性の姿が見えていないのが現状であると、サラは考えている。「これもまた、女性に向けられるいろんな意味での暴力のせいと考えられる。食事が熱すぎる、冷えている、コーヒーがまずいだなど、女性に対してあれこれと文句をいう。そうしたことも暴力である」

世界のほかの文化と同様、マヤ文化にもマチスモや女性に対する暴力が存在している。「私たち全員、世界中の男女は搾取されている。でも、女性に対する搾取はとくにひどく、女性は社会の周縁に追いやられている。女性が役に立つのは家の中だけ、トルティーヤをつくり、洗濯し、アイロンをかけるなど家事労働だけと言われる」。だけど、「私たち女性はそれだけの存在ではない」と、彼女は断言する。

「私たち女性はいろんな役にたっている。多くをこなす能力がある。私たち女性は、闘いだけでなくあらゆる分野で、地方レベルでも国レベルでも、私たちに相応しい活動の場がほしい。社会体制、家、闘いの場でも、私たちは隅に追いやられたくない。今以上のものを求めているのではなく、私たちの言葉に耳を傾けてほしい。男性より前に出ようと思っているわけではない。男性同志とともに歩むことで、この国を再建したい。男性同志に言っておきたいのは、私たちは男性より女性が上だと思いたいのではない。闘いだけでなくほかの場でも、私たち女性の存在を認め、尊重してほしい」

「たとえばシュプヒルでワークショップを開いた際、参加者は男性だけだった。シュプヒル先住民地域議会〔1995年創設〕の代表者会議に女性は2、3人しかいない。女性は共同体レベルでは参加するが、共同体の代表にはならない。状況は複雑である。正直なところ、男性同志の社会活動家たち、彼らは、記者のあなたの目に映る。ところが女性の姿は見えない。女性は子どもの世話をするために家にいるからである。サパティスタの男性同志と違うのはその点である。彼らは家で子どもの世話や料理をしている」。

さらにサラは言った。「共同体や集落での日常生活では、男性同志、あるいは男性が通ったとき微笑んではいけない。こびを売っていることになる。でも、男性は女性に笑いかけても問題はない。国内外では暴力は女性に向けられている。女性が暴行され、殺される。男性は殺されないと言いたいのではない。そうした危険に会うのは、少女、既婚、高齢の女性である。家だけでなく外に出た場合も、社会や路上でも暴力にさらされる」



エル・ティグレ遺跡の前に立つサラ



CIGの仲間と



トランシーバーごっこをする孫娘



闘うのは子どもや孫のためである



2017年12月、マリチュイとキンタナロー州都で（右端）



闘いに赴き共同体とコミットする女性は少ない



闘いだけでなくすべての活動で女性にふさわしい場を



共同体にはマチスモがはびこるが、女性は組織化を推進

サラは獄中でサパティスタ女性に関する本を読んだことがある。「サパティスタの状況を知って、思わず笑ってしまったので、とてもよく覚えている。『男性同志に組織をうまくまとめるように呼びかけた。彼らのせいで、私たちは前に進めないのだから。女性はいつも前進しているが、うまく前進できないのは、それは男性同志のせい』と、あるサパティスタ女性が言っていた」。こんなうまい表現はないと、サラは言う。「私たち女性は、ものごとを素早く、てきぱきとこなす。私たちは力強くて、役に立ち、多くの能力をもっている。同時に多くことをこなすことができる。私たちは、母、姉妹、娘、祖母であり、闘う女であり、組織活動家でもある。私たちはすばらしい人間である」。

闘いに赴くことを自由に決め、人々と信頼関係を結べる女性はまだまだ少数とサラは考える。少なくないとしても、その姿が表立って見えることは少ないと説明する。「これもまた広い意味では女性への暴力が原因である。料理が熱いとか冷たいとか、このコーヒーはまずいと、叫ぶこともすでに暴力である」

マヤ人は今も生きて抵抗している。博物館の展示品ではない

マヤは、世界中でよく知られたメソアメリカの文化である。同時に、観光産業や文化産業にもっとも搾取されている文化でもある。「超自然」のミステリーを研究するペテン師、自然資源やマヤの考古遺跡をむしりとる企業の商品にされているが、この千年を超える文化は、今も活力を失うことなく生きて、抵抗し続けている。歴史の教科書では、栄光の過去と現在が区別されている。だが、マヤの人々は、今も存在を消されることに対して抵抗し、政府や企業が今はやりのコンサート会場〔2008年ブラシッド・ドミンゴがチチェン・イツァーで実施。2018年ユカタン出身のアルマンド・マンサネロも〕としか見なししていない聖なる場所を取り戻そうとしている。

数字のゼロを発明した文化、天文学や狩猟に長け、壮大な建築物を造営した男女の末裔だが、サラは自宅からわずか数キロの場所にあるティグレ考古遺跡に入場するために入場料を払わなければならない。アカラン人の都とされるこの壮大な遺跡の場所で、エルナン・コルテスがアステカ最後の王クアテモックを殺害した〔1525年2月、アカトランの都イツァムカナクでクアウテモックを絞首刑〕。サラは遺跡の建物を堂々と歩く。この地域の人々はカンデラリア川流域で栄えたチョンタル人の末裔とされる〔チョンタルの多くは西のタバスコ州居住〕。サラの母はタバスコ州の出身だが、この地に生まれたサラは先住民族マヤと自認している。

幼少期からサラは野山を駆けまわり、トウモロコシを挽いてトルティーヤをつくってきた。少し大きくなると、ビー玉やコマ回し、ケンケンポン、サッカーなど男の子とばかり遊んでいた。ままごとや人形遊び道具は与えてもらえなかった。サラの父は「男の子がほしかった」と言っていたからだ。

イエズス会を介して彼女は政治にかかわりだした。14歳になったばかりの時、解放の神学との出会いで新しい世界を知った。信仰と政治のワークショップに通いながら、サラは成長していった。「当時は、思想を理解することに努め、

後にそこで習ったことを若者の集まりで広めていった。それがその後何につながるのか、何も理解しないままだった」。教会では、ホセ・マルティン・デルカンポ神父が彼女に祈祷の仕方を教えるとともに、「キリスト者の本当の仕事は教会の外にある」とも語っていた。

その後、サラはシュプヒルに移住し〔1983～1995年〕、キリスト教基礎共同体の仕事に没頭し、若い女性たちと協同組合運動のワークショップを組織した。遺伝子組み換えではない大豆の栽培を手がけ、大豆の加工、養蜂業、さらには店舗の経営も始めた。若かったサラは、共同体的活動を実践するため、カンペチェ州外にも赴くようになった。サンディニスタのニカラグアにコーヒー収穫に出かけたこともあった〔1991年の3か月、ニカラグア中部マタガルパで活動〕。カンペチェやキンタナロー州に来たグアテマラ難民〔1984-97年、両州に4つの難民キャンプ〕の支援も行い、薬草や歯科のワークショップを開いた。

粘り強いという言葉ほど、この女性代議員を表現するのにぴったりの言葉はない。子ども時代に小学校に通っただけだったが、国立成人教育機関で中学校課程を修了した。その後、メキシコメトロポリタン大学ショチミルコ校の学生や職業訓練提供のためにカンペチェに来た外国の医師による歯科と一般医療のワークショップなどを受講した。それは、彼女や仲間の女性たちが医療サービスの届かない共同体に入っていくためだった。

父親が押しつける束縛から逃れるため、根っからの「出たがり屋」のサラは母と共謀してきた。伝統的には、女性が実家から出られるのは結婚した後からだった。サラと母親はそうならないように手配していたのである。サラは「恋多き」女性ではない。最初の恋愛では、16年間の結婚生活が続いた。最初の夫とのあいだに4人の息子ができ、全員30歳を超えている。その後再婚することになり、20年前に5番目の息子が生まれた。最初の結婚生活でも二回目の結婚生活でも、サラは闘うことを止めはしなかった。子どもたちに乳をあげながら、共同体の人権や土地を守る活動に携わっていた。

共同体では、離婚することは難しく、当たり前なことでもない。離婚に際して、サラは4人の子どもを連れて家を出ることになった。当時、逮捕状が出されていたので、二重の意味での逃亡劇になってしまった。前夫はサラを当局に「引き渡す」と脅していた。シュプヒルの水不足問題をめぐって行われた2週間の道路封鎖に参加したため、サラに逮捕状が出された。闘争の同志たちは彼女を山に匿ってくれたが、前夫は彼女を探しに来て「引き渡す」と脅した。そのため、すべての持ち物を共同体に遺したまま、サラは共同体を去らざるを得なくなった〔1996年〕。サラは4人の子どもを連れ、着の身着のまま故郷カンデラリアに帰り、再出発することになった〔1999年〕。

当時、カンデラリアの人々は法外な電気料金請求に激怒していた。サラは町の中心に薬局を開いていたが、1,000ペソ〔2006年の換算で約1万円〕の電気代を請求された。やがて料金は3倍にもなり、サラは払えなくなった。その後、家族と協力して浄水器を設置したが、電気代を払うために働くようなものだった。

「高額電気料金請求に悩むカンデラリアの人に呼びかけ、80人が結集した〔2006年8月〕。こうして闘いが始まった」。組織化を呼びかけたのは、彼女と新しい夫とその兄弟だった。その後、彼らとともに「別のキャンペーン」というサパティスタ運動に参加することになった。

鉄格子のなかの11カ月

数千人もの人が抵抗運動に参加し、高額な電気料金の支払いを拒絶する闘いと組織活動は数年に及ぶものでした。2009年、連邦電力委員会（CFE）は、職員の不法な身柄拘束という罪をでっちあげサラを告発した。彼女と今の夫〔ホアキン・アギラル〕は出頭を求められたが、当時上院議員のロサリオ・イバラ・デ・ピエドラ〔政治的失踪者の真相究明を求める運動エウレカ創始者、1982年革命的労働党（PRT）大統領候補、2006年労働党（PT）選出上院議員〕は、彼らのために二人の弁護士をつけた。こうして電力料金値上げ反対全国市民ネットワークのダビド・ペニャが率いる活動に合流することになった。

連邦検察庁はサラを起訴したため、対話折衝の場が設けられたが、合意は成立しなかった。CFE側が告訴を撤回することと引き換えに、カンペチェ州の行政区と州知事・議会選挙のための投票所を設けるという案に反対運動は同意した。「協定書が交わされ、私たちは投票所の設置を認めた。しかし、その前に大規模な停電があった。それは政府との合意を裏切るものだった。私たち反対運動のメンバーを逮捕せず、電力供給を怠らないという約束に背く行為だった。私たちは大挙してCFEの責任者のもとに向かい、電力供給を復活するように強く要請した。責任者は我々に同行すると言っていたが、実際は誰が参加しているかを監視するだけだった」。

CFE代表は同行する車がないので、サラに乗せてほしいと言ってきた。サラは素直にその申し入れを受け入れた。「私が車を運転し、CFE代表は助手席に座った。すると彼の自由を不当に奪ったとして、私は告発されることになった」。政府は入念に計画していた。選挙が終わると、当局はサラと四人の仲間を逮捕した。2009年7月9日のことだった。

午前5時、家の扉を激しくたたく音で、彼女は起こされた。息子たちの叫び声を聞いたサラは、「何が起きているのか理解できないまま」、起き上がった。連絡先リストを保存するため、携帯電話を手にとった。男たちが入って来た。「恐怖はなかったけど、憎しみと怒りと無力感が沸き上がった」。当局は彼女と夫を車に乗せると、頭を足の間に挟んだ状態のまま、3時間半近くかけて移送された。

「カンペチェ市にある連邦検察庁に着いたとき、体の節々が痛く、目は腫れ、熱もあった。車から降りたとき、ほかに3人の同志も捕まっていることが分かった。私たちが逮捕された場合、動員をかける役割を頼んだ人もいた。一人の女性同志は泣きじゃくっていた。私は責任を感じていた。私たちが抵抗運動に誘ったので彼らは参加したからである。私は気を強くもとうとした。いろんな



サラと現在の夫ホアキン・アギラール



共同体の人々はカンデラリア川流域のチョンタル



高額電気料金に抗議し抵抗運動が組織された



浄水器設置も、実際は電気代支払いのため



釈放を求めるキャンペーン展開



ロサリオ・イバラ創設のエウレカ



釈放を呼びかけるポスター



2010年6月、2名の同志とともに釈放

角度で撮影された後、サンフランシスコ・コベン刑務所に入れられた」。刑務所では男と女に分けられるので、活動家の5人は抱きあって別れた。5人は公務員の不法な身体拘束と公共サービス妨害の容疑で告発された。

監獄でサラは本領を発揮することになった。恐怖にもかかわらず、不当な扱いに抵抗し、刑務所の看守たちや女性刑務所長にも立ち向かった。まちががなく、彼女の人生でもっとも困難な11カ月だった。弁護士団の要求で、彼らの身の安全を守るため、安全な場所に5人でいっしょにすることができた。「ここに安全な場所などはない。だから、診療所に送り、五人が一緒になれるように努力する」と、女性所長は約束した。

収監されている間に、サラは100枚以上のテーブルセンターを縫い、読める本はすべて読んだ。同時に彼女の人生に関する覚書を書きだした。刑務所での日々の出来事、活動家で人権擁護に携わる友人ベアトリス・カリーニョ・トゥルヒーヨの殺害〔オアハカ州共同体支援活動組織代表、2010年4月27日、先住民族トゥリキ自治区で活動中に準軍事組織殺害〕を知らされたときに感じた怒りと痛み、息子が転んで記憶喪失になったことなど、書くことで軽減できる様々な苦しみを書き残すようにした。

刑務所の外では状況が好転する気配はなかった。警察は彼女の息子たちを追いまわし、家の上をヘリコプターが旋回することもあった。「まるで、ひどい捕り物劇が展開していた。闘争の同志に対して36件もの逮捕状が出されていた」。こうした状況のため、彼女に悲しんでいる時間はほとんどなかった。刑務所からも、運動の仲間と会合をもち、戦略を考えた。彼女が逮捕された日、刑務所で彼女は逮捕令状が出ている仲間のリストを見ることができた。サラはそれができるだけ記憶し、機会を見つけて彼らに連絡し、身を隠すように伝えた。

彼女の拘束については、釈放を求めるキャンペーンが国内外で組織された。五人は15日間に及ぶハンストを実行し、アムネスティ・インターナショナルもこの事案をとりあげた。そうした圧力が強まった結果、保釈金支払いで彼らは釈放された〔サラら3名は2010年6月、各人3,300ペソの保釈金〕。監獄でもやめなかった組織活動を続けた時間よりも、釈放されるために要した時間の方が長かった。

CFEの電力供給と料金に抵抗する運動が始まって、ほぼ11年が経過している。抵抗運動の要求は、電気は人権であることの確認、そして2カ月単位の支払い可能な電気料金を設定することだった。高額な電気料金支払い拒否は、平和的な抵抗運動の最初の行動だった。80人から組織を開始したが、2、3カ月の間に、カンペチェ州内の30共同体から3,000人もが参加するようになった。もっとも代表的な抵抗運動のひとつは、CFEが新たな電気メーターを設置しようとしたときのものだ。人々はそれをすべて取り外した。「それは私たちから多くを盗み取るためのものでしかない。CFEは勝手に電気メーターを操作できるから」

正当な電気料金の要求への回答は弾圧であった。インタビューをした数日前、一人の仲間が逮捕された。サラは刑務所に行って面会し、家族とともに釈放の

手続きをした。「CFE はデジタル式の電気メーター設置を強制的に推進している。私たちはメーター設置に反対しているが、迫害や弾圧にさらされている。木曜日には同志のホセ・アルベルト・ビジャフェルテ・ガルシアが令状なしで逮捕された〔電気メーター設置反対で2015年10月に家宅捜査、2017年11月9日逮捕〕。裁判所で尋問があると言って連行し、フランシスコ・コベン刑務所に収監し、25万ペソの保釈金を私たちに要求してきた」。内務省と国レベルのCFE代表が調印した合意にもかかわらず、ビジャフェルテは、電気を盗んだ容疑で告発された。「これが運動の現状なのよ」と、サラはまとめた。

破壊的なアフリカ椰子、掠奪と搾取

カンデラリアに至る道の両脇にはアフリカ椰子農園が広がっている。アフリカ椰子は環境や文化的多様性を破壊する作物である。アグスチン・アビラ・ロメロとレオン・エンリケ・アビラ・ロメロという兄弟研究者は、巨大な資本と広大な土地を保有する新しい担い手が、アフリカや南米、アジアと同じやり方で、カンペチェでもこの植物を栽培していることを報告している。

アビラ兄弟の研究によると、そのモデルは契約栽培の形をとり、「アフリカ椰子を植えるため、農民たちは森林伐採に駆り立てられていく。農民経済は商業化し、外部エージェントの参入とともに農民や先住民グループの固有の文化的実践は損なれる」。兄弟の説明によると、多国籍企業はアフリカ椰子を「ニッチ」の作物ととらえて、食品加工業や化粧産業に椰子油を供給し、副産物のペーストをバイオディーゼル燃料に転用しようとする。

カンペチェ州政府がカンデラリア、パリサーダ、エスカルセガ行政区の12万haにアフリカ椰子を栽培するという計画を発表したことをサラ・ロペスは指摘している。「多くの共同体はその計画に反発している。しかし、一部の共同体では、その計画を生存戦略の手立てと考えている。それは、大地の荒廃、土壌や大気汚染の問題があることをそれらの共同体がよく知らないからである」。

サラは次のように説明を続ける。「アフリカ椰子の単一栽培は大量の水を使うので、少しずつ川や泉が干上がる。共同体にある湧き水は干上がってしまう」。実際のところ、「かなり前からアフリカ椰子を栽培していたペドロ・バランダ共同体では、湧き水が枯渇してしまった」と、サラは言っている。

アフリカ椰子栽培はそれ以外にも多くの被害をもたらす。「アフリカ椰子を植えた場所は土地が痩せてしまい、ほかの作物を栽培できない。大量に使用する農薬で土壌、水、大気も汚染されてしまうからである」。サラはこれを悪循環ととらえ、水質の汚染によって魚の大量死が増えていると指摘する。その例として、カンデラリア川沿いのアフリカ椰子の製油施設があり、今年の洪水の際には、製油施設が大量の油を直接川に放流して、海洋生物が大量死したことをあげている〔2017年6月、下流のテルミノス潟に流入・汚染〕。

アフリカ椰子の大農園への土地の売却や貸し出しによって、土地はやせてしまい、インゲン豆やトウモロコシ、香辛料も栽培できなくなっていく。そこ

に農民に畜産に従事させるための政府の融資プログラムがもちこまれ、「借金まみれになり、破産し、二度と立ち上がれなくなってしまった」。

それによって、多くの農民が米国やユカタン半島の観光地に移住を決意し、そこで左官やウェイターとして働くようになった。米国のテキサス州のサンアントニオとフロリダ州は、カンペチェ州の人々が多く働く二大中心地となっていて、サラの息子の一人も2年間の予定で働いている。

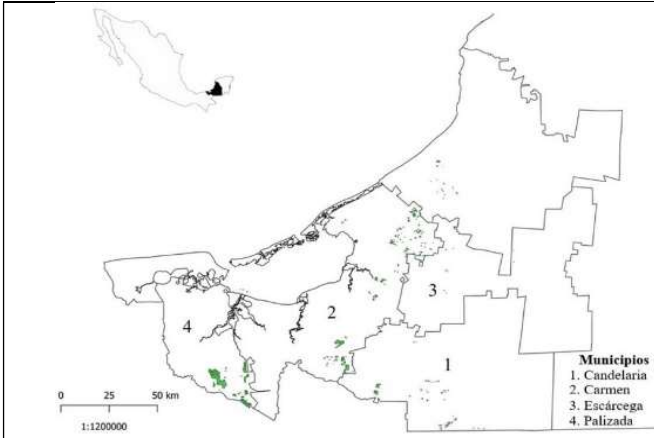
カンペチェ州は、メノナイト派の人々〔1920年代カナダ経由でチワワ州移住のドイツ系メノナイトが1980年代に移住、現在約3万人〕が導入した遺伝子組み換えの作物の問題にも悩まされている。チェトウマル〔キンタナロー州南部の都市〕に通じる道路のカンデラリア行政区に近いチェネスの名で知られる丘陵地帯〔ユカタン半島内陸の丘陵地帯〕がもっともその影響を受けている地域である。「メノナイト派の人々が遺伝子組み換え大豆などを栽培しているのを見ることができる」。カンペチェ州都の東に位置するオペルチェン地区では、遺伝子組み換えの飼料用ソルガムや大豆の栽培が拡大している。そこから、諸悪の根源である多国籍企業モンサントの遺伝子組み換えの種子が企業家たちによって拡散していつている。

サラがかつて暮らしていた先住民 Chol の住む村 シュプヒルにおいて、マヤの人々に対する差し迫った権利侵害の例が観察できる。領域へのアクセスを制限するカラクムル生物圏保護区の布告〔1989年宣言、72万ha〕によって、地区住民は立退きを余儀なくされてしまった。サラの説明によると、「保護区設立の発表で、多くの共同体が立ち退きし、保護区の中核にあった多くの共同体は耕作もできなくなった。家を建てるために椰子の木を1本だけ伐採したくても、保護区内ではできない。そんなことをすれば、投獄される可能性もある」。つい先日、保護区内で薪を集めていた一女性が軍に捕まった。「軍に捕まるから保護区では薪も伐採できない。でも企業家たちは拘束されることもなく、保護区に出入りできるし、やりたい放題である」

シウダー・デル・カルメンやチャンポトンなど楽園のような海岸に観光プロジェクトが次々と持ち込まれていることも、不正が横行しているリストとしてあげられる。これらの場所では政府が推進する詐欺まがいの不正によって土地が奪われている。まさに天然資源の私物化にほかならないと、サラは説明する。土地の防衛に携わるサラは人々にそうした情報を知らせている。カンデラリア川流域の開発権を認めれば、「住民は自分の土地で暮らしているのに、荷物運搬のポーターになってしまう」と、サラは警告する。結論は明白であると、彼女は言う。「私たちが組織しなければ、私たちのものは奪われてしまう」。

何も無駄ではなかった

「何も無駄ではなかった」と、52歳のサラはまじめな口調で断言する。ニカラグアにコーヒー収穫にでかけた際に、長期間にわたり母親なしにしたことに関する子どもたちの不満も含めて、そうだという。「子どもたちは、刑務所に入る前も、収監中も、出所後も、私とともにいた。そうやって助けてくれたの



カンペチェ州のアフリカ椰子の大農園



アフリカ椰子栽培は大量水消費、川や湧泉は枯れる



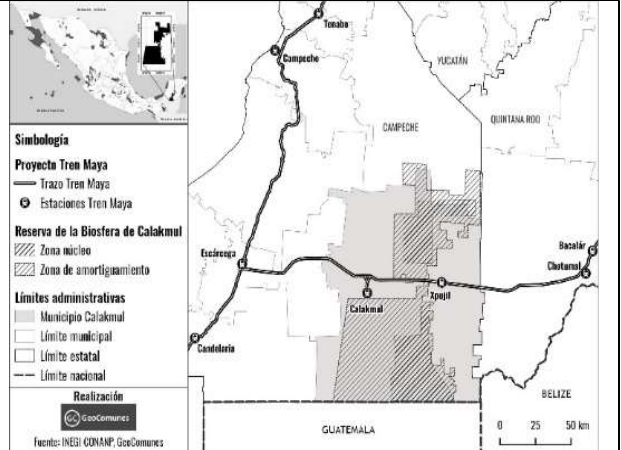
地域問題の一つは観光産業推進計画である



カンデラリア流域開発権を認めると、土地も商品化



2020年1月、CRIPXのマヤ鉄道建設差止請求採択の会見



カラクム生物圏保護区とマヤ鉄道路線



オベルチェンのメノナイト派農民経営の大豆農場



カンペチェ州海岸部の開発権

だから、子どもたちも私の闘いには賛成している。現在では、子どもたちも大きくなり、働かねばならない。今も動きまわっている私は、家族のなかで唯一の変人である」

長い黒髪の巻き毛で、大柄で穏やかな笑顔をたたえるサラ・ロペスは、新しい連れ合いとともに、人生をやり直している。人生と闘いを楽しみ、踊りに情熱を傾けている。「機会があれば、毎日でも踊りあかしていた」とサラは言う。クンビアやサルサ、ロックでも踊れるという。シルビオ・ロドリゲス〔キューバのヌエバ・トロバを代表する歌手、1968年デビュー〕や1980年代の音楽、ロスアンヘルス・ネグロス〔1968年結成のチリのバラード・バンド〕、あるいはトリオも聴きつづけている。インタビューの前、その最中、その後も、鳴りやむことのない電話をサラはチェックし続ける。SNSを活用し、ほかの代議員たちとコンタクトをとりつづけている。

サラはCIGの広報委員会に所属しているため、情報提供をせかす報道関係者と対立することもあった。「CIGには、何かでき上がったというものはない。私たちは自分たちで学びながら、創り出している。他人を頼りにすることなく、私たちは実践と理論を繰り返しながら生きている」

現在の連れ合いは、一緒に過ごす時間が欲しいと、サラに言っているという。しかし、「運動、闘争こそ私の人生である。そのなかで彼は私と出会った。だけど闘争から離れることは私には難しい」。時おりふれ合いや付き添いが足りないと感じることもある。とりわけ、今日のように同志が拘留され、悲しみがサラを包む時に、そう感じるという。「人間として、女性として、あなたも人の助けは必要でしょ？」と、彼女は記者に笑いかけた。

映像資料

Sara López González, Concejala maya. Candelaria, Campeche (11:32)

<https://youtu.be/mJFBYqKIuYI>

Resistencia civil contra las altas tarifas de energía en Campeche, México (10:42)

<https://youtu.be/xdNZvIDAd-M>

Sara López, Campeche. Concejo Indígena de Xpujil (1:51)

<https://youtu.be/w7KCven-jVM>

Video CRIPX (5:44)

<https://youtu.be/6OFhHbcQz4c>

7 30代になり否定された世界を評価できた



ミルナ・ドロレス・バレンシア・バンダ
ソノラ州ナボホア行政区コウィリンポ
先住民族ヨレメ（マヨ）
1976年生まれ

先住民族ヨレメ領域には小麦や油菜などが植えられた広大な平野が広がっている。畑を耕作しているのは何百人もの日雇い労働者である。彼らは、最近まで自分のものだった土地を新しい所有者のために耕している。彼らは、詐欺的あるいは承知の上で、とても不平等な条件で、食料や文化の基盤である土地を売ったり、貸したりしたのである。今では、元は自分のものだった土地で働く労働者になっている。道中には、柳、メキシコ落羽杉、メキシカン・ポプラなど、工業的農業に耐えて生き残っている木々が散見される。ソノラ州南東部の今では砂漠化した土地は、数十年前まではヨレメの肥沃な大地だった。

コウィリンポはソノラ州南部のマヨとも呼ばれる先住民族ヨレメの8集落〔サンイグナシオ・コウィリンポのほか、フパレ、エチオホア、サンペドロ、ナボホア、テシア、カモア、コニカリト〕の一つである。この集落の代議員ミルナ・ドロレス・バレンシア・バンダはこの地域で生まれた。彼女は、ヨレメの伝統的政府の評議会メンバー、中学校教師、そして領域の防衛者でもある。41歳の女性は、「私はミルナ、やる気満々よ」と、インタビューの冒頭で自己紹介する。2017年5月、彼女はCIGの先住民族ヨレメの代議員に任命された。

ミルナとの会話は、昔から続くコウイリンポの中心であるエル・レコード共同体に近いマヨ川の川辺で行われた。そこには古い時代の人々の墓地がある。私たちがいる場所から、汚染され水量が減った聖なる流れが見える。「私たちヨレメの民は、川を兄弟のようにして生きてきた。川と同じように、私たちの民族はアイデンティティを失い、分散している」と、ミルナは説明する。多くの伝統や習慣がもう見られないことは、悲しいことである。なぜなら、それは私たちの現在の生産や組織のシステムによって作りだされたもので、養豚場や他の企業によって水質は汚染してしまった。

代議員で領域の防衛者であるミルナは、彼女の民族が直面している最大の問題は、領域の略奪であると、説明する。「人が領域を売却することは、合理的で合法的な行為だと言われるが、そんなことはない。私たちにとっての真実なのは、対等な間柄での売買だけが合理的で合法的ということである。先に来た者が領域の権利を保有し、後から来た者は、生命の基盤である領域を奪い、収用する論拠も権利も持たない。土地は、つまるところ私たちの存在そのものを意味する」。

エヒードの民営化への道を開いた20年以上前の憲法27条改正の結果が、ここにはっきりと表れている。「エヒードのメンバーは、自らの必要性和外部からの圧力、現代の大土地所有者の策略や欺瞞によって、土地の賃貸や売却を余儀なくされる。大土地所有者は、私たちの仲間たちの生活を無視し、自己資産を増やすこと、生産すること、土地をつねに緑色の作物で覆うこと、銀行にドル札を預金することだけを考えている。私たちの手元には何も残っていない」。

1973年、エヒードのメンバーは、520haの土地の確保を申請したが、認められたのは別の場所の90haだった。だが危機が到来すると、誰もその土地では生活できなくなり、少しずつ土地を貸したり売ったりするようになった。1ha当たり5~7千ペソ、つまり5haあれば年間2.5万~3万ペソ、月平均2,500ペソの収入が得られるとされてた。しかし政府が加担していたので、賃貸料が支払われないことも頻繁に起きた。

ミルナは、講師を務める通信制中学校に自転車か徒歩で通っている。彼女の生徒にはメスティソと先住民がいるが、後者は伝統的な服を着ておらず、先住民の言葉も話さない。ソノラ州の先住民の中でもっともひどく失われている言語はヨレメの言葉である。土地や習慣の略奪は体制が支えていると、ミルナは告発する。「これが私たちの現実です」と、彼女は断言する。

ミルナが子どもだった時代は農業の最盛期で、「どの家族も土地を耕し、収穫を済ませて、銀行へ入金しても手元にまだ少しお金が残っていた」。土地をもっていない人は、エヒード所有者の家に行って、生産物を少し分けてもらっていた。自分勝手な人はいなかった。収穫した穀物が山積みされていたのを覚えている。袋を持った人たちがやってきて、何か売れるものや消費できるものをもらっていた。とても豊かな時代だった」。

この領域には前世紀の夢物語はない。企業や政府が「すべてを欲しがる」ようになり、ミルナが語る「幸せな時代」は終わった。かつて、ここでは小麦やトウモロコシを植え、補う形で畑にカボチャや豆を植えていた。現在は、小麦の単一栽培で土地が食いつぶされている。「一品種しか使わないので、単一栽培で土地が地味を失うと祖父母から聞かされた」と、代議員ミルナは説明する。地平線には小麦畑が広がっている。

ヨレメ代議員との会話は、彼女が CIG の同志や広報官マリチュイとともにサパティスタの 5 地域を視察したチアパス訪問の数日後に行われた。彼女が見たもの、話しあったものに関して、エチョア行政区のブアイシアコベ共同体で夜の集会が企画された。一軒の家の前庭に集まった男女の集団がミルナを待っている。鶏や居眠りをしている犬、福音教会の聖歌が響いている薄明りのなか、ミルナはメキシコ南東部の反乱する共同体で見たこと、聞いたこと、感じたことを集まった聴衆たちに語っている。しかし、最初に話すのは彼女以外の出席者たちで、自分たちが民族として直面している諸問題、ヨレメのいくつもの共同体を取り囲んでいる様々な脅威についてである。

「私たちの祖先の真実を取り戻さなければならない。私たちは祖先が持っていた自律性を再生し取り戻したい」。「多くの土地を所有し、いつもピックアップトラックで走り回り、エヒードのメンバーから土地を買ったり、奪ったりする人は一目でわかる。私たちはそのような人間をヨリ、つまり金持ちと呼ぶが、彼らは何も気にせず略奪しにくる」。「怖かったのはモンサントのトラックを何台も見た時である。モンサントやほかの農薬会社は定期的に人を雇って試験し、説明もなく首を切る」。「私たちは絶滅の危機に瀕している。なぜなら、これからの世代は母語を話せないから」。

このような意見があったと彼女は指摘する。さらに「私たちは民族として再生し、自らを取り戻したい」。「私たちが生き残れるように、何よりも自分たちの生命を防衛するため、貢献することが私たち全員に求められている」。「サパティスタの軍隊について語ることは奇異なことではない」「すべての民族にその種の防衛組織がある」。「先住民族の領域には独自の政府や習慣がある。それらが一体として統合された世界を構成する。私たちは自らの空間を取り戻したい。私たちは別世界から来たわけではない」「私たちの闘いは自分たちを組織化し、働き続けることである」

薄暗い電球に照らされた集会が終わると、人々はこれまで座っていた椅子やバケツを集める。こ家の女主人は、ほうきや農具、物干し竿の衣類、フック、植木鉢、ショール、ティリチェ〔ぼろ切れ人形〕など、中庭にあるすべての物を回収する。泥棒は毎日のようにきて、あるものを持っていく。こうした泥棒たちは「チョロ」と呼ばれ、地域のカシケから派遣されていると言われる。

大きくなっても、誰も手を差し伸べてくれはしない

ミルナは女性だらけの家族の中で育った。5 人姉妹で男の子のいない環境

で、母を彼女たちの人格を形成した。「あなたたちが大きくなっても、誰かが手を差し伸べてはくれないよ」と、母親は姉妹に言っていた。「食い扶持は自分が働いて手に入れる」というのが、モットーだった。幼少期のミルナは人形遊びをしていたが、「ずっとこの種の母性の中にいる」ことに甘んじなかった。「子どもは大好き」と言いながらも、子どもは「女性の人生の一段階に過ぎない」と強調する。子どもが好きだったので、ミルナは教師になるために勉強し、教育に一生を捧げることにした。

もともと、領域の縮小と人口減少で未来が脅かされている村の出身のミルナは、「産むことで村を救う」という習慣に従ってきた。とても若い年齢で2人の子どもを産み、子どもをあやしなながら、学業を続けることを決意した。そのため、彼女は両親と当時のパートナーの支援を頼りにしていた。

幼少期のミルナは小さな村で育った。「半径 100m を超えても、隣の家や柵はなく、メスキートの樹々と少し離れたところにある畑、運河、さらに 200m ほど離れたかなたに別の建造物が見えた」。最初に遭遇したこの柵のせいで、彼女はメスキートの茂みに遊びに行けなくなった。「小鳥が有刺鉄線に刺さった時、私はとても悲しくなった。鳥がどうして柵を越えたかったのかは知らないが、私は鳥を埋葬した。鳥は私を象徴しているようだったので、私は大泣きした。私と同じように鳥は柵を越えられなかった。この場所で、自由がある共同体、誰が生んだ子どもでも、大人が責任を持つという真の分かち合いのなかで生きるという夢を私は抱くようになった」。

子どもだった頃の夢はよみがえり、具体化することになった。ミルナの想像力の中で、子どもを中心に大人、お年寄りが集う円形の空間が構想されていた。「それは今でも私の夢で、実現したいと思っている。夢を実現しようと、代議員として活動している」とミルナは力説する。

最初の柵の後も、障害となる柵は次から次へと彼女の前に立ち現れた。だが、生涯を通じて彼女はそれらの柵を壊してきた。ミルナがヨレメ語を学び、話すことを邪魔するという柵もあった。それは祖母の決断だった。アイデンティティを堅持していると、人種差別や差別に苦しむことになる。「そんな風に話してはだめ。勉強しなさい。そんな風に話すと、学校から追い出される」と、祖母はミルナに言い聞かせていた。

ミルナもほかの多くの先住民と同じく、アイデンティティを明確に意識せずに育った。「白人の中いるとどうして奇妙な感じがするのだろうか」と、ミルナは自問した。「学校という場で、私が私であってはいけないのか」。自らのルーツ、迷信と混同された文化に関する知識を救いたいという確固たる思いから、彼女は回答を見つけることになる。ヨレメには成人という概念がない。身につけた責任に応じて大人とみなされる。ミルナがヨレメのアイデンティティを完全に獲得したのは三〇歳になってからだった。「それまで拒んできた世界がとても素敵に思えた」。ミルナはこの不正を糾弾する。「出身地の言葉を話せないように、システム全体が共謀するなんて？」



マヨ川の中州にあるエル・レコド共同体の共同墓地



マヨ川下流域のヨレメ集落



コウイリンポでは牧畜



耕地の砂漠化が進行



現在は広大な小麦栽培農地が広がる



収穫の終わった小麦畑



朝早く学校まで自転車で通勤



制服姿の通信制中学校の生徒たち

疲れを知らない活動家ミルナは、結婚して子どもいたが、大学に進学し、ヨレメ語の教室に通った。それ以上に、彼女は年長者たち、彼女が母語を習得するのを邪魔した祖母のような老婦人から、ジョークや伝説、さらにはヨレメ語がよく使われる祝祭を通じて、ヨレメ語を学ぶことになった。

先住民、女性、教師

早朝、ミルナは共同体にある道を巡っている。この数カ月、協議ぬきで着工された下水工事で道路は掘り返されたままである。30 件以上も事故が起き、人命も失われた。ミルナはブアイシアコベの通信制中学校 130 まで自転車で通う。学校では 24 名の生徒が彼女を待つが、大半はメスティソ、メスティソ化し、ヨレメ語話者は皆無に近い。その道中では、別の時代から来たかと思われる馬や荷車が通り過ぎる。山々を染める素晴らしい朝日は、一日の始まりを迎える小集落の彼方から昇る。

男女とも制服で、女子は小さなチェックのスカート、男子は紺のズボンで通学する。人々は涼しい、「寒い」に近い状態で夜が明けるといえるが、ヨレメ砂漠の朝 6 時の温度計は 26 度を指している。家から学校までの自転車での通勤の途中には、ヨレメの人々が被ってきた様々な段階の略奪の光景が広がっている。遠景には小麦畑が広がり、かつて自分たちの土地だった場所で日雇い労働者が働いている。昔風の家はほとんど残らず、持ち込まれた素材で造られた家々が建っている。自転車に乗った男性がトルティリヤ売りますと宣伝している。自家消費用のトウモロコシを収穫する人はほとんどいない。教師と同様に、子どもたちは母語を話さず、民族衣装も着ない。この地域の大多数はメスティソだが、そうでない人たちもスペイン語教育を受け、制服を着ている。

そんな状況でも、いやだからこそ、ミルナは抵抗を広げる環境を整えている。一瞬たりともミルナは立止まらない。学校から家へ帰ると、そこから集会へ、コウイリンポでの土地侵略者に対する抗議行動などに参加する。その間も、ミルナは子どもや近所の人たちの携帯電話に対応する。

先住民、女性、教師として、ミルナはエンリケ・ペニャ・ニエト大統領〔2012～18 年在任〕の構造改革を拒否する。彼女が日々関心を寄せている教育改革は、「もはや国民の教育とはいえない代物として設計されている」。ここでは教育改革の問題はとても特異なものである。「略奪の結果、親の労働のサイクルは朝 4 時から畑で仕事をせざるを得ない。その時間から子どもは一人になり、可能で、希望し、朝食や他の条件を満たせば、学校に行くことになる。教育当局はこうした実況を調べず、「何が何でも次学年に進級させろ」と、私たちに言うだけである。そのため、退学者は驚くほど増えている。

ミルナははっきりした言葉でゆっくり話す。北部地方独特の強い個性と美しさを備えている。「メキシコの教育制度で、私は教師になっているのではない。この村に対する責任があるので、私は教師をしている」と、ミルナは

言う。教師として抵抗する彼女は断言する。「親が近くにいない子どもたちの責任者として、私はあの子たちをいつも守り続ける。教育改革は、彼らの役に立つことを何も私に提供しない」。2018年には、学校予算がなく何の援助もない新計画が施行されると、ミルナは説明する。「私たちに何も提供せず、剥奪するだけである。だから、これは教師の権利を攻撃する労働改革でしかない、私たちは断言できる」

教育面での不備に加え、ヨレメの共同体の健康状態は、近年、驚くほど悪化している。マヨ川河岸に居住する先住民族は、特にいろいろなタイプの癌などの病気に罹患している。「ヨレメの共同体には、非常に苦しい状況に置かれている。共同体は、病気に耐えていくとともに、経済状況の問題、あらゆる面での危機、それがもたらす苦痛の問題などにも耐えなければならない」。

土地収奪は留まる場所を知らないと、ミルナは説明する。収奪された土地の利用は、「私たちが良い生き方とするものとは大きく異なっている」。だから、「ヨレメ（敬意を払う人）」の人々は、「ヨリ（敬意を払わない人）」たちが共同体に持ち込んだものを恐れ、それと対峙することになる。

教育と同様、ミルナは健康上の問題を略奪と関連づける。彼女の説明では、「私たちの土地は盗まれ、騙されて買われていった。同時に、健康な食物を生産する方法も奪われた。鶏や豚や牛が食べる餌の内容を知る小規模家族経営の農場は姿を消した。今日、私たちは工業化され、加工された食品を消費する。自分が何を食べているのか、どれだけ害があるか、私たちはまったく知らない。最年長のヨレメたちによると、昔は糖尿病もなく、癌とか脳卒中もなかったし、病気は薬草で治していたという。

しかし今は健康が脅かされるようになってきている。「それもこれも、作物を植えるための私たちの土地が不足し、劣化してしまった食生活のためである。それだけでなく、水質の汚染とか、薬用植物の一部が徐々に失われていることも挙げられる」。こうした悪循環が存在している。

精神面での健康状態にも多大な影響がでていると、ミルナは説明する。領域の縮小、日雇い労働者の労働環境、新技術（携帯電話など）の導入によって、「人間の温かみが失われ、ともに語り合う友愛も失われている。要するに、共同体の精神が薄れている」。思春期や若者の間では、薬物依存症が見られるようになってきた。「私たち先住民族の生命をこのような形で脅かしている人間がいるなんて、想像すらできなかった」と、代議員ミルナは嘆く。

近くの村々の薬物の持ち込みの問題も見逃せない。街をぶらつき、街角に座り込み、あてもなく歩いている若者は、日常的に目にすることができる。このような事態に対して、「個別的に取り組むことはできない」と、中学校の教師は考えている。だから、私たちは一致団結する必要がある。

掘削と略奪

ミルナは、領域を防衛するためなら体を張る。私たちは、乗り合いトラッ

クでコウイリンポのカマルゴ付近の集落まで移動した。そこには、掘り出した土砂などを片側に寄せ、ピラミッド状に積み上げた巨大な掘削現場がある。その光景は荒涼としたものである。それはまさに略奪の完璧なイメージと言える。そこから建設用の砂利、玉砂利、石材などが掘り出される。ヨレメの家族が所有している土地なのに、許可申請や相談もないまま、土地が「暴力的に」奪われている。その土地約 500m 四方で、現在駆動している重機はシグロ・ベイティウノ社のものである。「私たちが気づくと、そこに生えていた草木はすべて切り倒されていた。数匹の動物の死骸も見えていた」。

ヨリ（白人、敬意を払わない者、部外者）はこのような態度で、「資材の採掘で環境の平衡が壊されても気にしない。その土地にある物質があれば、それを利用するのは当然である。雨が降ると、資材を取り出した後の巨大の窪みに水が溜まり、危険になる。ここはもともと低地なので、雨が降ると多くの小川から水が流入し、それが淀んで、感染源となる」。

ここから道路工事用の土砂も採取される。「サンイグナシオ入植地全域を元に戻したばかりである。道路工事用の土砂トラック 150 台分を窪みに流し込んだ。だから、今、喜んでいる人もいる。20 年間、政府に道路の整備を要求したが、今まで何もしてくれなかった。当時から、資材の採掘は悪いという人もいるし、良いという人もいる。略奪であるか判断するのは当局のはずだが、当局が略奪そのものに関与している」と、この村の伝統的政府の評議会の一員でもあるミルナは説明する。

現場に向かう途中、私たちは巨大な養豚場を通り過ぎた。「それも私たちに相談することなく設置された。そこには、飲料水用の井戸があったが、養豚場に近いために汚染されてしまった」。そこから病気が発生した。

2017 年 5 月末、ナチュキスとプンタ・デ・ラ・ラグーナの共同体を結ぶ道路で別の掘削があると、住民が知らせてくれた。ミルナを含む伝統的政府のメンバーは、数人の村人と出向いて、掘削担当者に説明を求めるまで、何も告知や情報はなかった。その掘削工事は、排水施設を建設するものだった。その時点で作業は中断したが、3 ヶ月後の 9 月に、別の工事が始まった。今度の工事は、コウイリンポ領域に属する放牧用の共同利用地に汚水処理用の酸化池を建設するものだった。その場所は、前述の昔からある村の集住集落であるランチョ・カマルゴ共同体に近い場所だった。

以前も、ヨレメの人たちは酸化池の建設を阻止したことがある。ヨレメの男女は、重機の前に体を投げ出し、現場にテントを張り、ブルドーザーの通過を阻止した。そうしていると、当局が「対話をしたい」とやって来た。先住民族開発全国委員会（CDI）や他の機関の官僚たちがランチョ・カマルゴにやって来た。それは、様々な生産プロジェクトの実施を認めるなら、学生たちへの奨学金や成人教育に対して何らかの対応をすることを共同体に提案するための予備的な工作だった。

酸化池システムは、一般的には農村地域で汚水処理のために利用される。

だが酸化池が雑菌の温床となり、周辺一帯に悪臭を放ち、廃棄物の処理装置というより健康被害を引き起こす元凶となりかねない。「人々はこの工事に抵抗している。その建設工事は何も便益を生み出さないし、共同体が要求した事業でもない。洪水が起きた場合、廃棄物が充満している酸化池が決壊しないという保証はない」と、ミルナは力説する。

現在のレコド共同体の掘削工事は、マヨ川から 50m 離れた所で行われている。作られる酸化池はナチュキスの下水を受け入れるというが、この『受益者』である共同体の住民もそのことを知らず、リスクを恐れる。「これがいつもの CDI のやり口である。共同体に『進歩』をもたらすと言いながら、私たちから略奪し、私たちを馬鹿にしている」と、ミルナは警告する。

水質汚染の問題は、ヨレメの人々の生活に影響を及ぼしている大きな問題の一つである。代議員ミルナは説明する。マヨ川に投棄された農業廃棄物によって、川だけでなく地下水層までも汚染され、「生命の水が今では死を意味するようになっている」。「私たちにとって、瀉湖はとても貴重な生態系である。汚染によって傷つけられている神聖な場所がいくつもある。政府は私たちの環境をまったく別の世界に変えてしまおうとしている」。

そのことを知っている教師ミルナは、共同体の紐帯を取り戻そうと日々活動している。「彼らが望むのは私たちを服従させることだから、私たちは抵抗を続ける」と、彼女は言う。

CIG メンバーであることは、生命の守護者

代議員ミルナが語るには、ヨレメの歴史のなかで、「解剖学的な男女の差異の一つと思うが、身体的力があるので男性たちが戦いに出ざるをえないという社会的反乱の時期があった。戦争によって男性の社会が崩壊したので、女性は自然にその役割を担うことになったという。コウイリンポにはナチャ・パスコラという女性の物語がある。白人が組織した人間狩りが繰り返られていたが、ナチャ・パスコラは女性たちを組織し、出撃し、戦いを繰り返して、白人を放逐し、ヨレメの家に侵入しないようにした」。彼女によると、この物語はマヨの女性の精神を描いたものである。

ミルナは女性と男性の強さを対立させるようなことはしない。「私たちはいつも脇にいっしょに並んでいる」。彼女は共同体にマチスモがあることを認め、「私たちをモノに変える」資本主義システムと関連づけて説明する。ミルナは次のような例を挙げる。「私は民族衣装が大好きだけど、『ああ、なんてこと。太って見えてしまうわ』と、多くの人は言う。だが、それが実際の姿であり、自分を否定する必要はない。自分が何者かを自覚し、自分自身への自信があるので、私の生き方を押しさえつけるようなことはしない。一方、資本主義は、虚栄心を推奨し、資本主義システムが押し付けるモデルを模倣させるため大量消費を奨励する。

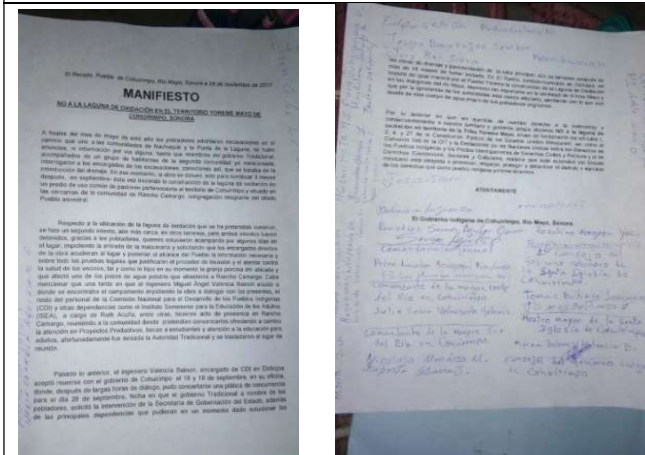
ヨレメを代表する代議員というミルナの役割によって、彼女自身も成長し



放置されたままの下水道工事



カマルゴにある無許可の土砂採集現場



コウィリンボ先住民政府の酸素浄化池建設反対決議書



マヨ川の水も消滅の危機に瀕す



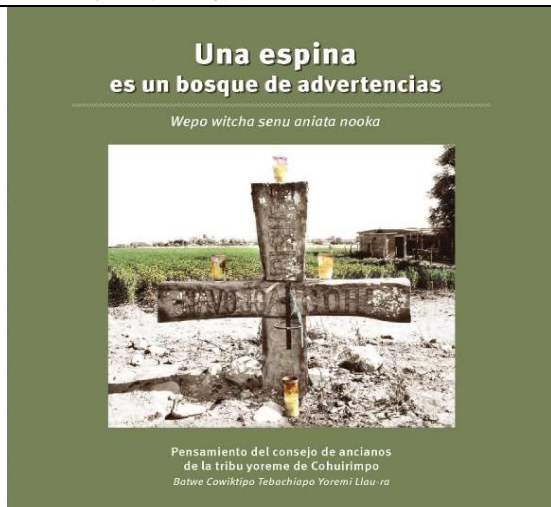
汚染が懸念されるマヨ川



共同体の集会で話すミルナ



長老評議会のアルフレド・オスナ



2011年刊行のアルフレド・オスナの著作

てきたことは言うまでもない。だから、「私たちは、自由に感じたままに行動するつもりである。それがマチスモに立ち向かっていくうえで大切なことである。私たちが女性を広報官として擁していること、彼女が私たちと同じ女性であることによって、私たちが自分たちの現実、私たちの家庭や仲間、そして自分自身を同じように自己管理できことを理解することができる」。

ミルナにとって、代議員であることは日々の仕事を継続することを意味する。「CIGの一員であることは、政府であり、生命の守護者であり、生命を維持し、人々を組織し、集団としての人々を守ることである。それは統治者というより、代表者ということである。私たちはCIGと名乗っているが、それは抑圧する政府ではない。人々に付き添い、問題とともに抱えて生きる政府である。疑うことなくものごとに立ち向かい、発言し、いかなる時も人々に付き添い、見返りを求めず、人々の苦痛を分かち合う政府である」。

ミルナも説明では、CNIの提案は、「救命胴衣のようなものである。ヨレメであることの本質に近づくこと、私たちという存在に響くものとなっている。すぐさま私たちのもとに届き、私たち自身を識別させ、『これが私である』と言わせてくれる何かである。それは私たちの遺伝子情報に組み込まれた祖先伝来のモデルととても近い統治のモデルである。なぜなら、私たちは、白人の政府、ヨリの政府が代表する当局というものを想像できない。それはつねに遠い存在、私たちと無縁の人々で構成されてきたからである」。

恋愛から愛へ

ミルナは17歳で結婚し、10年間の結婚生活を送ったが、「もういい。一人で歩く時が来た」と自らに言い聞かせた。そして一人で歩むことにした。彼女は、祝福されていると感じる母親と同じように、女性としても愛を満喫してきた。それは、「このサイクルで自らが到達すべき道に私は導かれている」からであるという。一方、男性は「私たち女性のように規制するサイクルをもたない」。

離婚したとき、答えを見つけるため、ミルナは、『恋愛から愛へ』という本を書いた。彼女はそれを回復療法と呼んだ。『恋する能力』は、繁殖能力があるだけでなく、人間として、女性として、生きていることを実感でき、とても誇らしい気持ちになる。パートナーを失くしたとき、彼女は「ほかにも苦しんでいる女性がいる」と思うようになった。彼女の夢は、女性とともに活動することだった。その夢は実現し、40人の女性が集まって一緒に活動しだした。彼女たちは「活動する女性たち」と呼んでいた。このコレクティブの支持を受け、ミルナは自分の属する共同体の役員選挙に参加した。当選しなかったが、この経験で彼女の政治参加への道が開かれた。「あの時でなかったなら、別の機会だったと思う」。それから、彼女は活動し続けた。

夜が更けた頃、ミルナはコウイリンポの長老評議会のドン・アルフレド・オスナ〔2021年9月逝去〕に挨拶に行った。彼はヨレメの賢者にして権威者

であり、CNI 創設時から仲間である。薄明りの中、ドン・アルフレドは彼女を迎え入れ、彼の最新の著作〔Una espina es un bosque de advertencias, 2011 年刊〕を彼女に読んで聞かせた。

「真実は、それに反対するものより擁護するもの議論の熱にさらされる。真実は力強く、残り続ける。真実でなければ、うまく捏造されたものである。真理は永遠に不滅である。誤りは消えていく。事実は小説よりも奇なり。真実は強い。サッカーボールのように昼のあいだずっと蹴ることができるが、夜になっても丸く頑丈なままだ」。

映像資料

Mirna Dolores Valencia Banda, Concejala yoreme. Comunidad Cohuirimpo, Sonora (8:42)

<https://youtu.be/8BqIwF4gjkI>

Perdida de la Lengua Yoreme (16:46)

<https://youtu.be/nTPmwwz43gw>

8 先住民、女性であることで踏みにじられたくない



ルセロ・アリシア・イスラバ・メサ
バハカリフォルニア州テカテ行政区フントス・デ・ネヒ
先民族クミアイ
1990 年生まれ

バハカリフォルニア州の北西隅に位置している 6 つのクミアイ共同体のひとつフントス・デ・ネヒに向かう曲がりくねった道のまわりには、ありとあらゆる形をした巨大な岩石が散らばっている。この広大な領域のなかで、CIG メンバーのルセロ・アリシア・イスラバ・メサは、子ども時代にはお馬さんごっこをして遊び、テカテ行政区に広がる砂漠の聖なる領域を馬にまがって行き来していた。

現存しているクミアイの数は極めて少ない。国立先住民言語研究所の 2010 年センサスでは、話者数はわずか 221 人だった。人数は少ないが「絶滅の危機はない」と、彼らは断言する。ルセロと同じように、クミアイの人々はそれぞれが属する氏族（家族）ごとに、人里離れた小規模農場に分散して暮らしている。公共政策から見捨てられ、法律侵害者に侵略されながら、彼らは自らの領域と文化に対する攻撃に抵抗している。

「4 人の男兄弟と私はここで育った。よくこのあたりりを走り回り、小川で遊んでいた」と、ルセロは回想する。お馬さんごっこをする時、兄に縄をかけられ鞭で切られたこともある。実生活と同じく、遊びのなかでも、男の子は雌

馬役の女の子に投げ縄をかけるカウボーイ役になっていた。しかし、ルセロはカウボーイ役になるほうが好きだった。

27歳だが細身で若い顔つきのルセロは、会議が満場一致で決めた代議員の役を受諾することにした。だがそれは容易なことではなかった。共同体を代表する役職は初めてで、この数カ月で彼女の人生は大きく変わった。彼女とのインタビューはチアパスから帰った直後に行われた。彼女は、サパティスタ共同体が CIG と広報官マリチュイことマリア・デ・ヘスス・パトリシオをチアパスの 5 つのカラコルに迎えた集会に出席していた。

ルセロが参加したイベントは、2017 年 10 月にサンクリストバル市で開催された CIG と CNI に加盟している先住民族との全国作業集会だった。彼女はその後にサパティスタ領域も訪問することになった。行く先々で何千人ものサパティスタが出迎えたことにルセロは驚いたという。「人々があんなに集っているのを初めて見た。とてもスゴイことだった。サパティスタの闘いは素晴らしく、私は彼らを信じて、闘いに邁進したい」。

サパティスタの闘争に触発され、代議員に任命されて以来、彼女はチアパスの反乱者たちの市民的呼掛けに応じたティファナ第六員会とサンディエゴ第六委員会のコレクティブと協働して活動している。ルセロは、CNI に結び付いた北部地区の先住民族が結集した集ったソノラ州エルモシージョの集会だけでなく、同じクマイイが住むカリフォルニア州サンディエゴでの会合にも参加している。CIG の提案を説明し、新しい代議員や代表委員を選出するため、彼女は南バハカリフォルニア州にも赴いたこともある。それは「活動する地域を開発するためだった」。

「伝統的な政治家」ではないので、ルセロは驚きや傷つきやすさを隠しはしない。マリチュイは彼女を勇気づけてくれる。「なぜなら、私たち女性はもっと何かできることを示しているから」と語りながら、「男性がすべて前面に立とうとする」共同体にはびこるマチスモを嘆いている。「こうした状況は変えなければならない。一方が前に立つのではなく、男と女は一緒に行動すべきである」。

クマイイの代議員ルセロは、国内 40 以上の先住民族、部族、民族集団がともに歩んでいる CIG が掲げる提案と、諸政党が掲げる提案の違いについて説明する。CIG に結集する先住民族は、組織方針として権力掌握を目指すということはない。2018 年の選挙過程に関与するのは、「先住民族のことが考慮されるようにする」ためであると、彼女は警告する。彼女の説明では「CIG は公約などしないし、T シャツ、必要物資、お金なども配らない。私はとてもいいことだと思う。公約を掲げる連中は実現できないことを約束する。評議員の私は公約ではなく情報を提供する。そうすれば、仲間と一緒に共同体のために何かできる。それが私のしたいことで、公約というものではない」。

CIG で彼女が担う役目は、地域を巡回して人々の要求を可視化することである。もっとも深刻な問題は、間違いなくクマイイの 6 共同体〔ラ・ウエルタ、フタス・デ・ネヒ、サンホセ・デ・テカテ、ペニャ・ブランカ、サンホセ・デ・ラ・ソラ、サンアント

ニオ・ネクア]の領域が侵略されていることである。例えばフンタス・デ・ネヒでは、「20年前に一人の侵略者が土地を奪いに来たが、今新たに別の侵略者が一晩で牧場を作った。土地所有の証明書はあると侵略者は主張している。だが、彼は土地所有者にはなれない。そのためには農地権が必要で、先住民族クミアイになる必要がある」と主張する。

土地の略奪は今に始まったものではない。砂漠に囲まれた荒れた道を通って行けるサン・ホセ・デ・ラ・ソラ共同体は、1.5万ha超の土地を取り戻す闘争を展開している。今も続く侵略で共同体の土地はあちこち断片的に奪われてきた。約160人が暮らすこのクミアイ共同体は、プラヤ・デ・ロサリートとエンセナダ行政区にまたがるバジェ・デ・グアダルルーペにある未公認だが所有する3千haの共同体の土地を今も守り続けている。

サン・ホセ・デ・ラ・ソラへ向かうには、ワイン街道〔テカテとエンセナダを結ぶルートでグアダルルーペ溪谷に多くのワイナリーが立地〕を辿ることになる。砂塵のなかから、消滅を拒む町が少しずつ姿を現わしてくる。土地略奪には特定の個人が関わっている。どの先住民族地域でみられるように、土地所有者と行政区・州・連邦政府の関係者たちとが癒着して繰り広げる策謀はよく知られている。政府関係者はそれなりの役得を手にして順次交代するが、実際に利益を独り占めするのは地元のカシケたちである」と、領域防衛の中心人物の一人マリア・デ・ロス・アンヘレス・カリージョ・シルバ〔2022年初の先住民族出身の州議会議員〕は2006年に私に語っていた〔『オハラスカ』2006年12月記事〕。

岩々の間で回転する巨大な風車

テカテ（クミアイ語で「割れた石」）に行くには、壮大なラ・ルモロサ山地を曲がりくねった道で越えることになる。岩々や秋を迎えた植生は風になびき、黄金色をした風景が広がっている。そして古代クミアイの洞窟壁画がある場所には、岩々の上に巨大な白い扇を持っている塔が一行に並んで聳えている。それは2015年から設置されだした風力発電塔の列である。

「この風力発電基地は、155メガワットを発電し、米国側の変電所に接続し、サンディエゴまで送電するという多国籍企業センプラ・エネルギー社の野心的な計画の第一段階である。188基の風力タービンを4期に分けて建設する計画（各47基）の最初に過ぎない。町の南部のアウバネル・バジェホ・エヒードでも700基以上の風力タービンを設置する計画がある〔2020年3月、同地訪問のAMLO大統領は景観破壊の風力発電基地を認めないと表明〕。これはラ・ルモロサ地区のフアレス山地における多国籍企業の一連の投資の始まりでしかない。米国側には二つの風力発電基地があり、ひとつは先住民族のクミアイ先住民地区（英語でクメヤアイ）、もうひとつはオコティロ地区にある。環境、健康、動物相やこの保護区に暮らす人々の健康への影響を危惧し、この地区の住民はこれらの風力発電設備の設置に抗議する活動の先頭に立っている。メキシコ側ではこうした危険性は過小評価されている」と、2015年2月19日発行の週刊紙『セタ』



日向で遊ぶまわる子ども



フンタス・デ・ネヒの集会所



米墨にまたがるクミアイの居住地域



テカーテからエンセナダに向かうワイン街道



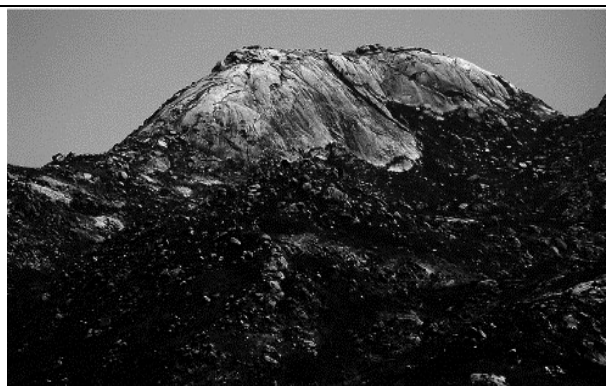
マリア・デ・ロス・アンヘレス・カリージョ・シルバ



エル・バジェシートの岩壁画



風力発電基地ラ・ルモロサ2



ペニャ・ブランカ

は厳しい論調で警告する。

フンタス・デ・ネヒ共同体は聖なる山脈に取り囲まれている。山の中には硬葉低木林、檜林、イトスギ、松の木などが生えている。村には水道、電気も下水もない。それぞれに必要なわずかばかりの生命の水は、小さな湧泉や井戸から汲みだされている。

ルセロの氏族が暮らしている小規模農場へ着くまでの道路からは、「侵略者の牧場」が見える。共同体はこの侵略者を追放する方法を探していると、ルセロは説明してくれた。クミアイを先住民族としての認知する姿勢が不足しているため、政府は共同体の土地を無理やりエヒードや国有地であると宣言していた。そのため、起きている大規模な侵略に対してどう対処するか、共同体の人々の会議で議論されている。

村のエヒードの境界区画の内側には 3 つの小規模農場に 3 家族が住んでいる。「ここでは皆が親戚なので結婚できない。皆が従兄弟、叔父叔母という関係なので、結婚するのはよくないとされる。村で相手を見つけられないので、若者は、SNS、Facebook、Whatsapp、あるいは街に出て、相手を見つける」と、ルセロは言う。彼女も「外部の人」と結婚し、5年間ティファナに住んでいた。

クミアイ（山の人、境界を歩く人という意味）は「ほかの先住民族と同じかそれ以上に差別されている」と、ルセロ・アリシアは警告する。「ここでは、インディオははした金のために 1 日 8 時間以上も死ぬように働かされる。インディオが土地を耕さなければ、メキシコ人は食べられないことをメキシコ人は知らない」。メキシコ北部では、先住民以外は「メキシコ人」と呼ばれ、外部者、あるいは「白人」とみなされている。

人種差別だけでなく搾取もある。「バハカリフォルニア・スルでは、日雇い労働者たちも不当に解雇される。彼らは先住民で、その多くはオアハカ州の出身である〔年間約 3.5 万人が来る。多いのはミシュテコ、次いでトゥリキ、サポテカ〕。不平や苦情を訴えても、何も取り上げられることはなく、無視されてしまう。非人間的な搾取があり、最低賃金で、1 日 8 時間以上も働かされる。

神聖で薬効のあるセージ

溪谷の静寂はオフロード・バイクがたてる轟音によって遮られる。溪谷はバイク・ツアーなど冒険好きな人たちの「観光コース」となっている。しかし誰もこの未舗装道路を横断する許可を取ろうとはしない。誰一人として岩の上に生えている薬草を採集する許可を申請しようとしないのと同じである。代表的な薬草は、消化不良、喉の痛み、記憶喪失、鬱を緩和するなど多方面の治療力があるホワイト・セージである。

11 月初旬の私たちの会合の数日前に、ルセロの家族は薬草を持ち去ろうとする盗賊団を追い払った。「連中は、薬草を踏みつけ、引っこ抜くなど、ぞんざいに扱うだけでなく、無許可で採集する」と、ルセロは言う。米国でこの薬草を売るために、侵略者は何十袋も取っていく。ここでは、薬草は治療だけでなく、

聖なるものとして、死者の供養、沐浴など、儀式や清めに使われる。母親の薬草に関する知識を受け継いでいるルセロは、解熱効果のあるセイヨウニワトコ、腎臓をきれいにするフレチャーペッパー、神経を落ち着かせるバレリアナを見せてくれる。

岩石に囲まれて育ってきたルセロ・アリシアは、岩石を敬い、岩石に想像上の女の子の姿を探したりしていた。「多くの岩石に意味や物語がある。あなたが探している岩石は、ペニャ・ブランカの丘にある。さらに母が生まれた麓のエル・アラモにも多くの岩石がある。ラ・ミーナにもたくさんある。どれもすべて共同体の一部と見なされている。

「この下にある岩に関して、多くの孫娘や娘のいる女性が洗濯のために川に行っていたという物語がある。その女性は小高い丘に登って、娘たちが牧童たちに盗まれないよう見張っていた。女性は高い所に昇って女の子たちを見守っていたため、太陽が沈むと石になってしまったという。「彼女はそこにいたというのよ」と、ルセロは語りながら、もう一つの一面つるつるになった巨大な岩を指さして言った。「かつて、ある叔父がその岩の上に現れた。けどどうやって登ったのか、誰も説明できなかった」。結局、ヘリコプターで彼を降ろすことになった。

通常、クミアイの人たちは裸足で領域を歩いている。足に何か履くのは、昔も今も苦手なのよと、ルセロは言いながら、「あれは象」、「これは蛇」、さらに「馬の横顔」と、岩々の中にある象を教えてくれる。岩々に何かの形を発見するのは、誰からも忘れ去られてしまったこの地域の子どもたちのお気に入りの遊びである。

母ヨランダ・メサ、社会運動活動家でルセロとクミアイの精神的指導者

ルセロの物語は、クミアイの教師、通訳者の氏族に属する母ヨランダ・メサの物語を抜きにしては理解できない。ヨランダは領域の防衛者、活動家、治癒者、精神的指導者である。彼女と3人の姉妹〔アウロラ、ヨランダ、ノルマ、エミリア〕は、自分たちの民族の言語を失わないようにするうえで大きく貢献している。彼女らの「祖母」というプロジェクトを通じ、子や孫に伝統や言語を教えている〔ペト・マタなど他の3人を加えた7人で発足、約35名の孫世代にクミアイ語を教える。現在は Shaak kumiai tipei awai (クミアイ語を話す女性) に改称〕。2005年のCNIのクミアイ代表となったのはヨランダ・メサだった。また「別のキャンペーン」が領域を通過する際、当時の副司令マルコスをサン・ホセ・デ・ラ・ソラに迎える集会にルセロを連れて行ったのも彼女であった。

「私は誇りを母から受け継いでいる。今の私があるのは母のおかげである。文化を守りながら領域のため必死に闘い、土地が侵略されると直ちに出動する。私が知っていることのほとんどは母が教えてくれた。母は共同体、習慣を守るために闘っている。母は、自分の子どもや孫たちに、共同体のために闘うこと、植物の管理の仕方、侵略者を見分けることを学んでほしいと思っている」と、



ホワイト・セージ (salvia)



ホワイト・セージの採取には権威の許可が必要



セイヨウニワトコ (sáuco)



ノルマ、エミリア、アウロラ、ヨランダの4姉妹



母のヨランダ・メサ



叔母アウロラ・メサ (2017年没、54歳)



樫の実



樫の実を磨り潰す



樫の実で作ったアトーレ

任命されたばかりの評議員は、誇らしげに語ってくれる。「私は母の歩みを踏襲したい」と、彼女はためらわずに告白する。「母に CIG の役職を引き受けたと伝えた。CIG 広報官は女性であり、私たち女性は団結して彼女を支えなければならないから。

インタビューの間も、ヨランダは孫たちの面倒を見ている。その後、デシンフォルメモノスのチームと一緒に食事をした。写真家ルイス・ホルヘ・ガジェゴスとミゲル・トバールは、クミアイの聖木である櫟の下で彼女を撮影した。櫟の木の実はクミアイの主食で、彼女はどのようにドングリを石で磨りつぶすか見せてくれた。こちらでは伝統的な柳や蔓で籠を編むことはしていないが、彼女や娘たちは、彩色した地元産のいろいろな種を付けて、ネックレスやイヤリングを作っている。

クミアイ女性は共同体内の役割を担う伝統

ルセロの個人史は、クミアイだけでなく多くの先住民の個人史でもある。小学校 5 年生までフンタス・デ・ネヒで学んだ。「その後、先生がいなかった」ので、生徒たちは車で 40 分の所にあるバジェ・デ・パルマスに通うことになった。家族には交通手段がなかったので、ルセロはその町に住むことになり、小学校を卒業後もそこに滞在した。現在、彼女は通信制中学校で勉強しており、2 つの試験に合格すれば卒業できる。

ルセロは 16 歳のとき、現在 8 歳、5 歳、2 歳になる 3 人の子の父親となる人物と一緒にになった。当時、配偶者はティファナの厩舎で働いていたので、ティファナで生活することになった。彼女は 10 年間、彼女の共同体とまったく違う国境の町の郊外にあるバジェ・レドンド地区で暮らすことになった。「道を行き来する多くの人、突発事故、食物やお金を乞っているホームレス、街角に立つ女性、銃撃事件」、これらすべてをティファナの片隅で彼女は体験したのである。

「ここではよく眠れるが、ティファナでは無理だった。突然、隣人が喧嘩したとか、何か起きたという話を耳にする。ここでは排気ガスもなく、鳥の声が聞こえる。都会はまったく異なり、車の騒音がするし、家が上下や両横にひしめいている。ハト小屋のようだ」と、ルセロは説明してくれた。

10 年間ティファナで暮らした後、ルセロは連れ合いと別れて、共同体に戻った。こうしたことは共同体では普通のことではなく、内部規範では受け入れられなかった。「別れた方がいいと思ったから。ダメなものはダメなの」と、共同体の習慣に逆らった若い女性は言う。「結婚して別れると、気がふれたのかと言われてしまう。私もそうだった。人から悪く見られるし、新しい相手がいるとなおさら」。彼女には新しい相手がいるが、「彼も悪くみられてしまう。というのも、かなり年下だから」。

男性は別居したり、婚外子ができたりしても、「非難されることはない。マッチョと言われるだけ。しかし、女性が 2・3 人の異なる相手と子どもを作ると、売春婦と言われることになる。男ならかっこいいと言われるはずなのに、その

ことにとっても腹が立つ。多くの場合、女性が子どもを産む理由をわかっていない。何が起きたか知ろうとせず、女性を馬鹿と見なす。レイプされ、自分の意思と関係なく妊娠することもあるのに。人間はそうした偏見に満ちている」。

先住民族クミアイの場合、「伝統的に女性は共同体のなかで役割を担ってきた」と、ルセロは説明する。彼女の氏族では特にそうである。つい2カ月前に亡くなったヨランダの妹、アウロラ叔母さんは語学の教師で、領域の防衛者にして伝統の保護者であり、メキシコや米国の人類学・文化研究機関と共同研究をしていた。

2年前、彼女はメヒカリの実業家で牧畜業者のルベン・マルティネス・ペレスから5頭の馬を盗み、彼の土地の略取を試みたとして、不当告発され収監された。3カ月収監されたが、無実を訴え、米墨両国にまたがるクミアイの人々の圧力で自由の身になった。体調を崩したアウロラ叔母さんは2年間ほど生き延びたが、昨年(2017年)の8月に亡くなった。

ルセロは母のヨランダや叔母のアウロラのように規則を破っている。「私が何か規則を破るのは、何か良くなるようにとと思ってである。私には無理だよと言われると、私のプライドが許さず、「私ならもっとできる」とアピールする。それは母からの教えである。

彼女の家族は、両親、子ども3人、兄弟4人、甥や姪9人、義姉2人、義弟1人、彼女の夫で構成される。彼女の夫はチアパス出身の若者で、家族とともにホワイト・セージの収穫に従事している。聖なる薬草の略奪者と違って、当局の許可も得ている。何よりも「植物に許可を得てから切っている。でないと乾いて二度と生えてこないから」。

過去数十年間、フンタス・デ・ネヒには電気がなかった。今も電線はないが、最近小さな発電器が設置された。「とてもいいわ。私の場合、赤ちゃんがよく病気になるので、吸入器を使わねばならない。以前には、陽が当たる谷間に行かねばならなかった。ルセロの子どもたちは陽の光を浴びて走り回り、地面に転がるプラスチック製の馬を投げ縄で捕まえようと遊んでいる。「子どもたちはいちばん大事よ」と、ルセロはつぶやく。

何年も前、副司令マルコスが来たとき、「いつか同じようなことをしたいと言いついて聞かせていた。今、私がしていることを見てほしい。私たちは先住民、女性という理由で踏みにじられることのないようにしたい。今、私はこの闘いに参加し、多くの人が私たちを応援していると実感している。その闘いは「共同体のため」だから。支援していないと言う人は、見たことも会ったこともない。

何世紀も前から語られた伝説がある。それによると、松、メキシコ松、そして檜は、ラ・ルモロサを出発し、長い旅に出たという。メキシコ松は疲れ果て、山の一番高い所で暮らすことになった。松と檜はさらに道を歩いていった。ラ・ウエルタの村の近くまで来て、疲れきった松は、ピノ・バイラドールで寝てしまった。その後、檜だけが歩み続け、すべての部族の元にまで赴き、食物に加工できるドングリをもたらしたという。

今日、ドニャ・ヨランダとルセロは、私たちとの別れに際して、ドングリの料理を振るまい、行く道を開くためのセージのお清めをしてくれた。

映像資料

Lucero Alicia Islaba Meza, Concejala kumiai. Comunidad Juntas de Nejí, Baja California (8:42)

<https://www.youtube.com/watch?v=tjnpjzLUKhg>

Las mujeres que platican en kumiay, 2012 (13:11)

<https://youtu.be/qnPismjrsGg>

Literatura indígena de Baja California: kumiai. Hojas secas (10:47)

https://youtu.be/fEWxF5_O1ww

Invaden reserva Kumiai.mp4 (5:54)

<https://www.youtube.com/watch?v=2ZjI-kIsfTI>

9 これが本来の私の姿



マグダレナ・ガルシア・ドウラン
メキシコ市
先住民族マサワ
1955年生まれ

マグダレナがもう一度母語で話し、民族衣装を着るようになるには、チアパスで反乱が起きることが不可欠だった。彼女の説明によると、以前はインディア・マリア〔マサワ先住民女性マリアが主人公の映画・テレビドラマ、1972~2014年制作〕が描き出していた人物像によって助長されてきた差別のため、彼女たちはスペイン語で話し、髪にカールをかけ、ヒールのある靴を履かざるをえなかったという。しかし、「私のなかに持ち続けてきたものは、誰も私から引きはがせはない」と、彼女は言う。

マサワ代議員マグダレナは、今では色鮮やかなプリーツ・スカートとブラウス、大きなリボンを巻き込んだ長い三つ編みの髪でメキシコ市の街路を闊歩する。「サパティスタの戦いのおかげでこの姿を取り戻せた。これが私の本来の姿よ」と言いながら、彼女は最高裁判所の向かいにある大テノチティトラン創設記念碑の元に座り、クロスステッチの刺繍製品を売っている。最高裁判所は、彼女の起訴内容に関して全面無罪、釈放という保護請求を認めたことがある。18カ月に及ぶ不当拘束の後だった。

刑務所の門が開かれ釈放された時、「あなたに御迷惑をかけました」という

お決まりのお詫びの言葉は、彼女に対しては向けられなかった。「私は身をもって弾圧を体験した。家族と離れた時間はとても苦しい時だった。収監された時に病気だった人とは、生きて再会することはできなかった。孫たちの誕生にも立ち会えなかった。だけど、何もかもが悪かったとは言えない。考えによっては、素晴らしい体験をしたとも言える。沈黙を強いられたが、種子をいろんな所に播くことができた。数多くの種を播くことができた。人々の意識を覚醒することができた」。首都のソカロ広場と生まれ故郷メキシコ州サンホセ・デル・リンコン行政区サンアントニオ・プエブロ・ヌエボで行ったインタビューのなかで、彼女はこのように語ってくれた。

彼女はメキシコ市に居住している先住民の諸権利の防衛に携わり、サパティスタの呼び掛けでメキシコの下の世界を巡回した 2006 年の「別のキャンペーン」の活動家である。2006 年 5 月、サンサルバドル・アテンコとテスココで弾圧された花卉販売者に対する連帯行動にマグダレナは馳せ参じた。国際アムネスティの認定では、多くの活動家やアテンコのエヒード農民を拘束する際、連邦警察はひどい人権侵害を犯したとされる。報告書には、少なくとも 26 名の女性への性的暴行があったという証拠も含まれていた。

2005 年に EZLN が発表した第 6 ラカンドン密林宣言の呼び掛けに応じ、マグダレナは数人のマサワの仲間とチアパスにも向かった。それからは別のキャンペーンとともに歩んできた。メーデーではソカロ広場で副司令官マルコスとともに発言した。その演説で、街頭は私たちより空腹を抱えている者のものと発言した。2006 年 5 月 1 日のメーデーだった。4 日は公道でデモ行進をする予定だった。

しかし 3 日にテスココ市にある市場で、花卉類を販売できないという問題が発生した。サンサルバドル・アテンコの住民は花卉販売者の支援に向かった。トラテロルコの集会において、アメリカ・デル・バジェ〔アテンコ土地防衛人民戦線の代表イグナシオ・デル・バジェの娘、2006~10 年に米国に政治亡命〕の発言を聴いた。彼女は、テスココの女性の花卉販売者が逮捕、殴打され、家から引きずり出され、子どもも一人殺されたと、発言した。弾圧部隊がアテンコまで来るかもしれないと、彼女は言っていた。

マグダレナの回想は次のようなものである。

「夜にアテンコまで行き、子どもの通夜に出席し、連帯の意思を表明できるかどうか、ほかの少人数のグループと議論した。私はアテンコに行きたかったので 3 人で出かけることにした。またデモ行進の予定もあった。私たちは自分たちが作った販売用の刻んだフルーツの盛り合わせ、チチャロン、フライド・ポテトなどを持参することにした。

4 日の早朝 6 時頃、警察や機動隊の部隊がアテンコに到着した。私はバスの中にいた。爆弾が投下され、上空ではヘリコプターがスズメバチのようにブンブンと唸っていた。自分たちの姿が見えないように、私たちはバスの扉を閉めた。同志の一人をバスから下ろそうにも、どうすれば後ろの扉が開くのか、私

にはわからなかった。

私は一番先頭にいたので、一人の機動隊にネックレスをつかんで引きずり出され、もう一人の仲間は別の機動隊員に引きずり出された。機動隊員は同志たちを殴りだし、私はバスから降ろされ、機動隊員は私が袋に入れていたものを盗もうとした。その後、私は殴打され、脅迫され、投獄された。私は極悪犯罪者としてアルモロヤにあるサンティアゴ刑務所〔主に政治犯、社会活動家、ナルコ関係者など収監〕に1年も収監された。

多くの血が流されたその日、マグダレナは腹ばいのままで護送車に載せられ、多くの警官が彼女を足で蹴りだした。「スパイク付のブーツで私を踏みつけた。ほかの人に向けて熱い灰のようなものが撒かれ、腹部を火傷した人もいた。死んでしまうと思った。その時はポンチョを着ていたので、それで首を絞められているのだと思った」。

載せられた護送車で私が目撃したのは、「たくさんの方が積み重ねられた様子だった」。一人の体の上に別の方が重ねられ、人々のうめき声を耳にした。「私は他人を踏みつけたくなかったが、警官たちは私の髪の毛を引っ張り、皆を踏みつける形で、護送車後方に押し込んだ。上に積み重ねられた二人が私を足蹴にすることになった。私は警棒で殴打され、血まみれになった。誰か一人でも動くと、殺すぞと脅された。私はとてつもない恐怖に慄いた」。

マグダレナなど 100 人以上がサンティアゴ刑務所に送致された。「私たちはごく少人数だと思っていた。しかし刑務所には、殴打され怪我した人が多くいた。私は意気消沈し生きる気持ちが萎えたが、私はどこで仕事ができると考え、刺繍することにした」。

組織的犯罪行為、計画的誘拐、公共交通機関に対する攻撃という罪状で、彼女は告発された。国際アムネスティは、彼女を「良心の囚人」に認定した。80カ国以上で彼女の釈放を求める運動が展開した。彼女が収監された刑務所まで、正義を要求している座り込みの情報がもたらされた。刑務所の外でセレナータが謳われることもあった。「マグダレナ、私たちはあなたをとっても愛している」という大きな声が彼女まで届いていた。

マグダレナは、サンティアゴ刑務所に1年、テスココ市のモリーノ・デ・フロレス刑務所に6カ月と5日収監された。「私を勇気づけたのは、私は権力者が指弾する人間でないことだった。いつか刑務所を出て、無実を証明できると考えた。私は誘拐犯ではなく闘争や変革について話してただけである。誰も、私の中に何も悪いことを見つけ出せない」。まるで昨日のように刑務所内で生活した日々を思い出しながら、マグダレナは語ってくれた。「私は何も罪を犯しておらず、無罪が確定し、刑務所を出所した。実際に悪いことをした連中は、拘束もされずそのあたりを臆面もなく歩きまわっている」。

私自身は、家族の誰かが私に会いに刑務所を訪問してほしくはなかった。「連中は面会の署名も念入りに調べるので、家族が刑務所に何かの痕跡を残してほしくなかった。こうすれば、家族を護れると私は思った」。出所するとすぐに、



演説するマグダレナ



テレビのコメディ番組「インディア・マリア」



大テノチティラン創設記念碑の露店



マサワ女性の伝統衣装で路上販売



連れ合いと菓子類の販売



2006年5月メーデー、ソカロ広場でのマグダレナ



マグダレナ釈放要求のポスター



釈放後、連れ合いとグアダルーペ寺院訪問

刑務所前の広場で座り込みを続けていた「別のキャンペーン」の所に赴いた。そして、別のキャンペーンの仲間とグアダルーペ寺院まで徒歩で向かった。

マサワの仲間は釈放された彼女を呼び出し、公道での仕事を今後も止めないと伝えた。「私は回り道をしたけど、こうしたことに気付いた。私は気力を奮い起こした。何が冗談で、何が法なのか？私はほかの仲間と再組織化に着手した。朝5時、連邦区政府と交渉するために役所の門の前に立った」

こうして、彼女は不当な収監生活から「公道上の不当極まりない生活」に変わるようになった。しかし、「私たちがいる空間が尊重されるように、私は闘いと抵抗を継続してきた」。そして今も闘い続けている。無主の空間や母なる大地は私たちが養っていると確信する。私たちはそこから生活の糧を得ている。だから闘いは続く。

リンゴやミカンに石油やガソリンがまかれ、三つ編みの髪が切られる

サンホセ・デル・リンコン行政区サンアントニオ・プエブロ・ヌエボは住民500人弱の小さな村である。大半の家は住人が不在で扉は閉まっている。20世紀半ばからメキシコ市に移住するようになった先住民マサワの村である。初めは、農閑期だけメキシコ市に移動していたが、徐々に定住しだした。『マリア』は70年以上も前からメキシコ市の街路で果物、お菓子、民芸品を売って生活しているマサワ女性に与えられた蔑称である。彼女たちは自らを移住者でなく、メキシコ市の居住者と思っている。二つの概念は同じではない。市民の権利、なによりも居住の権利を要求している。

村に点在する住宅はいろんな形態をしている。マグダレナが育ったのはトタン屋根で地面にゴザを敷いて寝るといふ木造住宅だった。これは昔からの伝統的な住宅で、薪を使う竈がある台所は離れた所にある。今は、徐々にアルミサッシの窓や扉がついたセメント・ブロックやレンガ造りの住宅が建てられるようになっている。カリフォルニア風の外見をした住宅も数軒ある。それは国境を越えた出稼ぎに行った人たちの想像力の産物である。しかし米国から帰国する人はしだいに少なくなり、大半は送金するだけになった。どの家にも、丸屋根に十字架がついた小さいけれど優雅な祭壇が敷地の中央に設置されている。

一見したところ、誰もいないように見える。しばらくすると、数匹の牛、ひとつがいの馬、数匹の犬、そして数人が道を横切る。この村では家族全員がそろふことはほとんどない。「女性は家族ができて子どもを持つようになる。私の場合、メキシコ市にわずかばかりだが露店設営のための歩道の権利を受け継いでいるので、この村に戻ることはなくなってしまった。私たちのものであり続ける露天設営のための歩道は、私たちが働いて食い扶持を稼ぐために家族や村人が勝ち取った空間である」。「私の祖父母たちは、リンゴ、桃、ミカン、クルミ、ペピータ〔カボチャの種〕、菓子を売ることから始めた」と、マグダレナは語っている。彼女自身も、アラメダ中央公園、サンフアン・デ・レトラン通り、イダルゴ大通り、ブランキータ劇場正面、タクバ通り、レフォルマ大通りなど

で、こうした商品を買っていた。

マグダレナは、当時の迫害、差別、虐待のことを鮮明に覚えている。「2週間も投獄されることが少なくなかった。私たちは女性用の一時留置場であるラ・バキータ〔雌牛の意味、男性の留置場はトリート〔雄牛〕と呼ばれていた〕に連行された。商品のリンゴやミカンには、売れなくするため、石油やガソリンがまかれた。気に入らないという理由で、私たちの三つ編みの髪が切られることもあった。私たちは長い髪にリボンや髪飾りをつけることに馴れていた」。

1970年代になると、当時の大統領ルイス・エチェベリア・アルバレス〔1970～76年就任〕は、「先住民が自分の共同体に戻る」という計画を思いついた。政府内部では、「先住民はよく思われていないので、メキシコ市内に居場所がない。出身地に帰るほうが良いと言われている。私たちが祖父母のもとに帰るには何台のバスが必要だろう。しかし、先住民は次のように返答した。私は自分の国メキシコにいる。ほかの国にいるわけではない。こうして私たちはメキシコ市内で働き続けた。私は民芸品を売る仕事が気に入っている。マサワの仲間の多くは、果物、焼きトウモロコシ、果物、チチャロンやポテト・フライといった揚げ物などを販売して食費を稼いでいる」。

続けて彼女は説明した。その時期、「多くの人々はメキシコ市内に先住民などいないと考えていた。私たち先住民はもう絶滅したものと考えていた。しかし、メキシコ市では、マサワの女性、カボチャの種を売るマリアたちが増えていることが分かっていた。マサワの女性と分かると、私たちはひどい差別、抑圧、とてつもない人種差別を受けることになった。政府はそうした問題を解決せず、助長するだけだった。

私たちはラ・メルセー市場〔ソカロ東の巨大市場〕の一つの大回廊に連れて行かれた。そこで、私たちはシャツの袖、襟、ブラウス、ハンカチ、花瓶敷、眼鏡ケースなどを刺繍することになった。私たちは報酬を受け取っていたが、金額は覚えていない。私はそんな作業したくないと言った。一週間毎日、働きに通うより、路上で物売りの仕事をしたい。私たちは当局に追いまわされたが、刺繍の仕事よりはるかに多くのお金を稼げた」。

彼女は活動家仲間ではドニャ・マグダレナとして知られる。彼女はわずかばかりの賃金で刺繍をすることをやめ、路上での物売りを続けることにした。1972年、セリア・トレス〔メキシコ小規模商人革命的運動指導者、後にPRD議員〕という女性と知り合い、労働条件向上を目指し一緒に活動することになった。例えば、その年には、「リンゴやカボチャの種子を地面に並べるのではなく、果物を置けるテント地の木製の踏み台のようなタイヤが付いた荷車を手に入れることができた。とてもよい出来ばえだったので、リンゴを手にするためわざわざ屈みこまなくてもよかった」。

同じ時期、セリア夫人の事前の根回りで、マサワの女性は、モレロス、グラナディタス、マルティネス・デラ・トレ、ラ・ビジャ、サンファン・デ・レトランといった地区の市場でも路上販売ができるようになった。マグダレナはデピ

ート地区に近いグラナディタスの市場で物を売っていた。「私の祖母がそこに大きな露店を持っていた。だけど、私の一番お気に入りの売り場は、ラテンアメリカ搭があるアラメダ公園だった」。セリアと一緒に活動して私が習得したのは、組織化と自己防衛の仕方だった。

押し寄せる波のようにメキシコ市に来たマサワの人々は当初は市中心部の歴史地区の一角で暮らしていた。最初の人々はベルサリオ・ドミンゲス通10番地〔ガリバルディ広場の2区画南〕に居を定めた。その前には、「ロマス・デ・チャプルテペック〔メキシコ市西郊の丘陵地〕の洞窟で暮らしていた」と、マグダレナは説明した。マサワの人たちは商いで生計を立てている。家族の必要なものを満たす点では、「大地はほとんど何も与えてくれない」ので、人々はメキシコ市に居住し続けた。1980・90年代になると、メキシコ州ネサワルコヨトル〔メキシコ市東隣の低所得者集住行政区〕やチャルコ行政区に居住するようになった。

「私たちが働き続け、誰も私たちの邪魔をしない。そうなったら、私たちは生き残ることができる。そうすれば、教育を受け、病院で長い列に並ばなくても個人医の診察を受けることができる。尊厳のある住宅で暮らすことも可能になり、電気・水道代、家賃も支払える。たとえ、フリホール豆だったとしても、手に入れることができる」。問題は、「私たちが自由に働けないことである。私たちを支援しない法律が制定されることである」と、彼女はまとめた。

ある日、「休暇で出かけ、メキシコ市に戻ってみると、市民文化法が再び制定されていた。それはマルセロ・エブラルド〔2004年市政府交通局長、2006~12年市長、現外務大臣〕が定めた法令で、庭園、公園、歩道を清潔にするため、それらの場所での営業活動を禁止するものだった〔2004年8月制定〕。そうなればメキシコとしてのアイデンティティが失われてしまう。アラメダ公園では、綿菓子、リンゴ、風車、風船が売られていたのをよく覚えている。アラメダ公園はとてもメキシコらしかった。カートや独楽をもった子どもたちが集まっていた。しかし今は何の面影もない」。

マサワ女性代議員の意見はこうである。「先住民の路上販売者が望ましくないというなら、民芸品広場を設営すればいい。そこでは、民芸品の製造者や販売者、誰もが尊重される。私たちは文化面ではけっして貧しくないが、金銭面で誰もが本当に困っている。言葉、衣装、慣わしや習慣、社会の在り方が尊重されることを私は夢見ている。メキシコ市でどのように生きていくかを決定するのが私たち自身であれば良いと考えている。差別と抑圧、ひどい人種差別がこれ以上なければいいと思っている」。

幼少期のマグダレナは学校が嫌いだった

観光地バジェ・デ・ブラボ〔メキシコ州西端の湖を囲むリゾート都市〕の近くにある「お嫁として出た家」の生垣に座り、マグダレナは「とても素晴らしかった」と幼少期を回想してくれた。その当時は、「歩きまわり、深く息を吸い込み、遊ぶ空間がいっぱいあった。ケリーテ〔食用野草〕、ジャガイモ、キノコ、ソラマメ



サンアントニオ・プエブロ・ヌエボの風景



出身地の教会前の広場



出身地の木造小屋



ソカロ隣接のポルタルでの露店



連れ合いのドン・アルフレッド



ラテンアメリカ塔とアラメダ公園



ソカロの国立宮殿前に立つマグダレナ



CIG ポスターをもちアラメダ公園をデモ

など、畑から収穫できる食物はどれも身体に良いものだった。「メキシコ市にいた時に母親は私を身籠った」が、マグダレナは幼少期をサンアントニオ・プエブロ・ヌエボで過ごした。

彼女は、両親が飼っていた羊、ロバの群れや小さな牝牛数匹の世話をしていた。記憶の中でもっともよく覚えているのが、「雨が降り、一帯が緑となり、白、赤、黄色の花が咲き誇っている時期のことである。女の子全員それらの花で花束を造って、8月15日〔聖母被昇天の祝祭日〕に、畑が喜んで奇麗に見えるように、花束を畑に捧げていた」。

幼少期のマグダレナは学校が大嫌いだった。実際、「学校では、読み書きができないと定規でひどく殴られていた」ので、学校は恐ろしい所だった。彼女は祖父母と暮らしていて、祖父母も彼女が殴られ、叱られることを望んではいなかった。だから、祖父母は彼女を無理やり学校に通わせることはしなかった。当時、馬に跨った村の小学校の視察代理人は子どもをかき集め、学校まで連れて行っていた。視察代理人に見つからないように、マグダレナは背丈ほどのあるカヤの陰に隠れていた。「教室に一度も足を踏み入れたことがないけど、少しは読み書きを習得した」。

その後、両親とメキシコ市内で暮らすようになって、マグダレナは故郷の村と行き来するようになった。それも14歳までのことで、それから後は祝祭があっても村に戻ろうという気持ちはなくなってしまった。

彼女がドン・アルフレッドと呼ぶ男性と結婚してから、41年が経過している。彼を知ったのは実家のあった村に戻った際である。彼は「慎ましく質素で貧しく誠実で正直な人」である。個性の強い開けっぴろげな性格の彼女は、村の古臭い習慣を無視し、すぐに彼と一緒にになった。「私から誘って彼のもとに行った」と、彼女は悪戯っぽく笑いながら言った。結婚してからメキシコ市に戻り、1980年に6人の子どもの最初の子を産んだ。今では、14人の孫がいる祖母である。

「そのことをとても誇らしく思うわ。孫や子どもたちは両親や義父母の未来、種子にほかならない。私たちは貧しくても幸せだから、私は神に感謝している。病気にならなければ、私たちは生活を支えるために働き続け、将来起きることに対応できるから」。

起きていることは不当だから、私たちは組織化した

ドニャ・マグダレナは組織化に着手した。「私たちへの弾圧がとても厳しかった時期、20数人のマサワの男女と一緒に、先住民路上商人としての労働の権利が尊重されることを目指して活動することになった。私たちの身に起きていることは不当極まりない。1996年4月15日、私たちは集まった」。

みんなの合意で、路上で働く権利の認可を得るため、私たちはメキシコ市政府を訪れた。しかし、「時には間違いを犯すことがある。許可申請を提出する相手が誰かを知らなかったのである」。私たちはすでに路上販売する空間を手に入っていたのは明白である。必要なのはそれが尊重されるようにすることだった。

市役所の事務所から INI に赴いて、「私たちの空間が尊重されるための措置」を要請することになった。返ってきたのは、「政府機関である INI はそうした措置はとれないが、技能研修の実施は可能である」という答えだった。全員で INI が提供する研修に参加することになった。それは長い目で見ると、別の空間での戦いに結集していく基盤となった。

「研修を受けている過程で、多くの不正があるという自覚が私に芽生えてきた。私たちは虫けらのように見なされ、他者を汚染する恐れがあるのとみなされ、受け入れられないことを知った。そこで体験した活動のすべてが私たちを前進させるものだった。労働、健康、教育、正義の分野で、私たちは極めて劣悪であると分かった」。

INI の研修の過程で、市内に居住しているほかの先住民、おもにオトミ、トゥリキ〔オアハカ州西部の先住民族〕の人々と知り合うことになった。マグダレナは、マサワの移住者組織であるラ・ホジタ〔メキシコ市東隣のチマルワカン行政区西端の居住区〕に集住する 26 名のマサワ女性の代表になった。

INI の「ある人物」が、彼女たちのために先住民の権利に関するワークショップを組織してくれた。「その目的は明白だった。私たちが望んでいたのは、公道での商いに関する問題に対応するため、私たちを支援してくれることだった。私たちは助言や支援以上のものを要請する気はなかった」。マグダレナはメキシコ市に居住するさまざまな言語集団からなる 14 組織が参加する先住民組織連盟の代表に任命された。

「この段階で、ワークショップを組織した親切な男性と私は、メキシコ市で大きな集会を開催し、25 以上の組織が切実な要求を携えて参加した。私たちは、そうではないにもかかわらず、先住民は弱い存在として扱われてきたかについて訴えた。私たちは何かをやる能力を持っている」。彼女が言うには、集会ではそれは自明のこととされた。

サパティスタとの出会い

このように彼女が闘っていたなかで、1994 年元旦が来た。「INI の研修を通じて、私はサパティスタ運動を知った。テレビや他のメディアがサパティスタは土地をめぐる争い、殺し合っていると言っていたので、私はサパティスタに恐怖を抱いていた」。

INI の研修では、サパティスタにラモナ司令官〔1959～2006 年、チアパス高地先住民ツォツィルの EZLN 司令官〕という背の低い女性がいることを教えてもらった。ほかの女性とともに女性革命法を制定していたことを知った。その法律では、連れ合いの男性が酔わずに自覚を持つため、共同体に酒類を持ち込むことは禁止されている。また、メキシコ市の私たちの闘争とチアパスでのサパティスタの闘争を比較したらとも言われた。私たちは住宅を、サパティスタは屋根ある建物を、私たちは教育を、サパティスタは学校を求めて、闘っている。サパティスタをどう評価するのかと尋ねられた際、「それは私たちの闘いでもある。まった

く同じ闘いである」と私は答えた。

マグダレナは回想しながら語った。「先住民女性が出産時に体を洗えないため死ぬことについて、私たちは話し合った。清潔になるまでダメだと追い返されて、家に戻る時には死んでいる。先住民であるというだけで。貧しくスペイン語をうまく話せないだけで、子どもは小学校に入れず、わずかに許された空間は公園か地下鉄ぐらいで、そこでチューインガムを売るしかない。子どもたちの門戸は閉じられている。住宅に関しても、私たちの場合は、4m四方の部屋で、5・6家族が子どもたちと暮らしている。イワシ缶のように4分割された部屋に押し込まれて暮らしている」。

その後1997年、サパティスタの一行がメキシコ市を訪問した〔1997年9月12日、サパティスタ民族解放戦線創設集会に参加〕。ドニャ・マグダレナは、3人のマサワ女性の仲間とショチミルコにサパティスター一行を迎えにいった。「全国協議のために1,111人のサパティスタが到着した。マサワ、トゥリケ、オトミの女性の仲間を集めることが面倒だとは思わなかった。その後、大地の色の行進の際には〔2001年2～3月〕、安全警護の輪に参加し、宿泊場所である国立人類学歴史学学校に一行を連れていった。さらに、サンラサロの国会にも同行した。国会ではエステル司令官〔モレリア・カラコル地区出身〕が文書を読み上げた。何もかも感動に満ちたものだった」

こうして先住民運動へ参加していたため、CDIの責任者ショチトル・ガルベス〔オトミ出身の起業家、2000～06年にCDI初代総裁〕が、マグダレナを探し出し、審議官として働くように要請してきた。「良いことかもと考えたわ。けど私たちは政府からの施しはまっぴらだと言ってきた。その政府がなぜ私を誘うのか？フォックス政権〔2000～06年PAN政権〕も従来の政権となんら変わりはないと、言われていた。けど彼女は先住民の仲間だからいいのではとその時は思っていた。ショチトルは私が必要と思ったので招請したと説明した。

私は問い返した。どうして私が？読み書きなど何もできなくても？彼らはそれでもかまわないと言った。私の頭や心、身体は誘惑に負けそうになった。しかし記憶はそうではなかった。トウモロコシ、フリホール豆、土地、水、ホテル、北米自由貿易協定が話題になった際、政府はこれまでと同じことを続けるだけだと、私は言った。政府が豊かにするのは企業家だけで、農民は自分が生産したトウモロコシを売ったり、トルティリャに加工したりできない。こうしたことに同意できないと発言した私を彼らは奇妙に思ったにちがいない」。

「私は一年間を失ったが、サパティスタを見捨てることはなかった。CNIの集会に参加し続けた」と、マグダレナは言った。ラカンドン密林第6宣言委員会、別のキャンペーンなどメキシコ南東部から届く様々な行動要請に参加しながら、闘いに全面的に参加している。2016年10月のCNI創設20周年集会において、EZLNはサンクリストバル市に参集した議員たちに代替案を準備しているかと、問いかけた。

「サパティスタは私たちが分析・検討する提案を持ち寄った。権力掌握では



メキシコ市居住の先住民女性たち



サンクリストバル市での CIG 創設集会



メキシコ市 UAM での講演



マリチュイの代行でコリマ州キャンペーン



ソノラ州でのキャンペーン



2020年2月21日、領域と母なる大地防衛行動



2020年10月オトミによる INPI 本部占拠



2020年9月 独立200周年

なく、闘争が可視化できるように、共和国大統領に先住民女性を立候補させるという提案だった。自らの歴史を良く知り、闘いを続け、記憶を保持しているのは先住民女性である。私は個人としてそうすべき時期であると発言した。私たちはそれが実現可能とは思わないが、一瞬であれ、人々を驚かせることができるのではと、考えるようになった」

まる一日をかけて提案は討議され、先住民族ごとに協議するという結論となった。「それは合意の一つである。別の合意は12月半ばに先住民族の代議員が結論を持ち寄ることになった。メールで結論を送付できない場合は、個人的な意見でも構わないことになった。先住民族の大多数は、基盤の人々から、基盤の人のために、今展開している闘争を通じて再組織化を呼びかけるというサパティスタの提案を了承した。そして先住民女性の大統領候補ではなく、先住民族や基盤にいる人々の声を皆に伝える役割の女性広報官と位置づけるべきだという声が上がった。実際の大統領候補はCIGの全員でなければならない」。

マグダレナは闘いを続けてきたメキシコ市の代議員である。「もう居住していないマサワの共同体の代議員ではない」。彼女たち代議員の関心は大統領の座ではなく、組織化である。「特権のある椅子に座ることに関心はない。関心があるのは、人々の声に耳を傾けること、破壊されたものを再建すること、生活のため、未来のため、子どもたち何かを遺すために闘うことである」。

各代議員の責任について彼女は次のように説明する。「協議を展開し、学校、主婦、共同体で提案を共有することである。基盤から着手し、協力して活動することである。最優先すべきはどのように推進するかということである。先住民族の中で活動しているCNIの代議員もいる。彼らと協力しながら、「こうした状況ある私たちマサワ女性が望んでいるのは、こうした問題である」と、助言できる。私が代議員として発言しているのではない。基盤にいる人々が、自分たちが暮らす空間が尊重されるにはどうしたらいいか、自分たちの住宅として何を望んでいるかについて発言している」。

ランチェラなどの歌が大好き

一目見ただけの印象では、マグダレナは生真面目で怒りっぽく、物悲しいように見える。しかし実際はまったく反対である。彼女は歌や踊り、冗談などが大好きである。「私は台所でいつも歌っている女性よ。だから、私のことを一杯ひっかけていると言いつらす人もいた。そんなことはない。酒が好きなのは本当だけど。ランチェラ〔メキシコ独特の農村風の歌〕や歌も大好きだわ」。

私が怒りっぽいという人もいるわ。だけど、それは私の表現の仕方だと思っている。私はお願いなんかしたくないのよ。刑務所から出た時、私のことを「お前はサパティスタだ」という人がいた。だけど、私がサパティスタでないのはとても残念だわ。サパティスタはとても規律があるけれど、私ときたらまったくの向こう見ずだから」。

マグダレナは自分が強い人間かどうか分からない。人生を通じて分かったこ

とは、彼女と同じように多くの女性は生れた時から抵抗していることである。「女性はいつも遠ざけられている。発言する機会も奪われている。女性は家の雑用にしか向いていないとされるが、それは違う」。彼女は主張する。もはや、「私たち女性は、連れ合いであろうがなかろうが、男性とともに歩む時が来ている。一人も女性がいない闘いは、闘いとは言えない。闘いは対等な形で女性と男性が担うべきものである。これまで、いつも男性が展開する闘いだったので、私たち女性は何もできないと思い込んでいた。しかし私たち女性もできる」。このように断言するのは、市内の留置場に拘留された何十人もの先住民を釈放した女性である。自らも1年半にわたる不当拘留を体験し、出獄後は闘いに戻った。キノコ、ケリーテ、炒ったソラマメ、ジャガイモ、フリホール豆、米やカボチャを食べ続けるためだった。マグダレナはそうすることが大好きだったからである。

映像資料

Magdalena García Durán, Concejala mazahua. Ciudad de México (9:39)

<https://youtu.be/IO3XJD5AbfI>

Magdalena Garcia Duran. Las cuatro ruedas del capitalismo: Desprecio (13:42)

<https://youtu.be/xr8zUtUnhWg>

Mujeres con Causa | Magdalena García Durán (23:28)

<https://youtu.be/nAEdO9U6jHw>

10 希望は苦悩の大きさに比例する



マリア・デ・ヘスス・パトリシオ・マルティネス
ハリスコ州トゥспан行政区
先住民族ナワ
1963 年生まれ

2017年5月29日、マリア・デ・ヘスス・パトリシオ・マルティネスの人生は大きく変わってしまい、それまでの54年間とは異なるものになった。創設されたCIGの広報官に指名されたからである。翌月から数カ月間、彼女は忘却されたメキシコの最深部の隅々をキャラバンすることになった。キャラバンの中で、彼女は略奪、脅迫、弾圧、無数の苦悩や抵抗と出会うことになる。無視されてしまった状況を癒す薬草などない。唯一の処方箋は組織化することである。このことを治療者であるマリチュイは人々に訴える。

10月、サパティスタ第5管轄区〔チアパス州北東部カラコル・ロベルト・バリオス管轄〕とパレンケの訪問で、キャラバンは公式に始まった。それ以来、生まれ故郷ハリスコ州トゥспанに戻れたのはほんの短期間でしかない。数か月前までの20年間、彼女はトゥспанにある健康の家「テコルワカン・トゥチャン」の責任者だった。3人の子どもは村を出て、親族に世話してもらっている。こうしてCNIの共同創設者のマリチュイと連れ合いのカルロス・ゴンサレスは、CIGの仲間とともに歩みだすことになった。略奪と闘うため組織化を推進するよう人々に呼びかけるためである。

その日以降、マリチュイはメキシコの大半の土地に足を運んだ。先住民族を

拒絶してきた国に伸びる細道を白色のバンで踏破した。訪問先の広場や集会で共同体の集いを開催し、地元の問題を論じてきた。演壇に立つ彼女の姿を見ることもあるが、報道カメラのない所で会合が行われることもある。新聞や報道向けの時間がないと批判されることも少なくない。しかし当初から、キャラバンでは直接的な意見交換が最優先されていた。

「この20年、しだいに状況が悪くなった」ことを目撃してきた彼女は、メキシコの先住民が抱えている問題について熟知している。マリチュイは、CNIに結集している人の多くが語る「数多くの略奪や不正」を目の当たりにしながら生きていた。「集会では言い足りないこともあった。外部から強制された巨大開発計画が引き起こした破壊や死を数多く目撃してきた」と、彼女は語る。

それに関連している要素は数多くある。政府や多国籍企業は共謀し、マニュアル通りに略奪を実行する。村々に入り込むと、誰とも協議せず、村の領域に巨大開発計画を押しつけ、村の景観を荒廃したものに変えた。ナワ広報官の語るところでは、「年配者はこうして起きている事態を悲しく思っている」。そして、「この破壊に対抗する力をつけよう」と抵抗を呼びかける。

人々が抱える苦悩から反乱は生まれると、マリチュイは強調する。「人々は、自分たちの領域、大地、組織が壊され続けることを座視しできない」。問題が深刻な場所では、「より強力な抵抗、より強固な組織、より強靱な活力が生まれる」。このように、今年の初めにメキシコ市のデシンフォルメモノス事務所で行ったインタビューで彼女は語った。

抵抗に対する弾圧の方法はマニュアルの別の頁に書いてある。「破壊に反対している人は、殺害し、投獄し、失踪させる。脅して、恐怖を抱かせ、組織化をさせないためである。共同体はそう考えている」。しかし、そうしても、無駄である。なぜなら「弾圧が続いても、人々の声は語り、『私たちはあなたたちとともに歩む』と言いつける。自分の力で強くなっていく。そうしないと、私たちは前進できない」と、彼女は言う。

マリチュイは単独でキャラバンしているわけではない。彼女にはCIG代議員のグループが同行している。その多くは女性である。行事や集会で発言しているのも女性である。CIGは、会合や集会に持ち込まれる苦悩を集めているが、その解決方法を提示し、解決を約束することはない。解決策はそれぞれが自分の力で見つけるべきであると、CIGは断言している。

ハリスコ州北部のウィシヤリカ共同体のパトリシア・マリアノ・サラスは、キャラバンの大半でマリチュイに同行している。地域によっては、CNI委員とともにキャラバンが訪問する州で選出された代議員も加わる。キャラバンの一行を載せた車両のアイスボックスには、飲料水や果物などが積み込まれる。飛行機、キャンピングカー、護衛、特別料理、高級ホテルなどとはまったく無縁である。キャラバン一行は、宿泊する共同体の集会所の食卓でフリホール豆、米、鶏を食べる。安全のため、一行を受け入れる人々の歓待に応え、集落の外には宿泊しない。

人々の集う館

1996年10月12日、CNIは誕生した。同年1月にサンクリストバル市で開催された「先住民の権利と文化に関する特別フォーラム」における合意に基づいて、CNIは生まれた。このフォーラムは、サパティスタ蜂起後、EZLNの呼び掛けで国内の先住民族が初めて参集した場だった。先住民族の再構築と国家との関係を基軸にした先住民自治を掲げて、少なくとも35の先住民族、ナシオンや部族から代表500名が集った。マリチュイもその一人だった。

「お互いの違いや議論を無視しろと、私たちは要請することはしない。むりやり団結せよとか、別の考え方の力に自分の考えを従属させろと、お願いすることもない。違った考え方をもっている人に対しても、尊敬と寛容の態度をもって臨んでほしい。皆さんにお願いする。…我々の未来として死とか屈従しか提示できなかったこの国、この世界に対して、人々とともに一つの教訓を示そう。愚かさや犯罪に汚れた世界を救出するための人間の尊厳という教訓を示そう」。これは、1996年1月4日にカルメン修道院〔サンクリストバル市にあるフォーラム会場〕で聴いたサパティスタの言葉である。赤ん坊と同じように9か月の準備期間を経た10月、マリチュイが共同創設・推進者となる先住民族のネットワークであるCNIは産声を上げるようになった。

20年後、CNIの挑戦は多くの声を糾合するが、それが均質化することはなかった。今歩み出した道では、それが可能となっている。マリチュイによれば、「この過程に踏み込んだ目的の一つとして、CNIに未加盟で私たちとともに歩んでいない仲間の共同体を訪問することがある。その仲間の言葉、問題に耳を傾け、私たちの提案を作り上げていきたい。ともに歩むことに同意できるなら、CNIへの参加を呼びかけていきたい」。この提案は、「自らのものと感じた仲間には受け入れられた」。都市部の仲間も非先住民だが、この呼びかけを感じ取っていると、彼女は強調する。「なぜなら、ほかのセクターや仲間とともに歩もうとしているからです」。

鉱山、ガスパイプライン、風力発電基地、高速道路建設など

国内の15州以上を訪問した総括として、提起した主要目標の一つは達成できたという。「人々の存在、問題、闘争を可視化すること、何よりも、私たちが前進し、資本主義がもたらす分断と対決するためには、私たち全員の連携が不可欠というメッセージを送ること」。「水を汚染する露天掘り鉱山。発電ダムに水を奪われる河川。風力発電、ガスパイプライン、高速道路による領域汚染、裁判問題など」、被害リストは長いものになる。さらに悲しいことではあるが、母語は話せるがスペイン語は話せないことが、自己防衛能力という点で問題となっている事実なども挙げるができる。

略奪とともに、「言葉や衣装を捨て去り、特定の文明への統合させることが先住民に強制される事実がある」と、彼女は説明する。「先住民族は、先住民族として生き存在したい。お願いするのは、先住民族という存在、私たちの領域、

大地、植物、樹木、自らを組織化する本来の在り方を尊重することである。それがまったく考慮されていない」。

マリチュイが先住民族に関して持っている知識は膨大である。CIG 広報官と聞き取り役として様々な問題に身を浸らせ、次々と増える略奪を自分の体で感じている。モレロス州テポストランを訪問した際、「人々の合意なし」で、高速道路建設のための重機が導入される様子を目撃した〔2012年着工、2014年最高裁判決で建設中断〕。木々や聖なる丘が重機によってズタズタにされる「破壊」を目の当たりにした。テポストランで彼女を迎えたのは、マリチュイと同じ先住民ナワ出身の80歳の女性代議員オスベリアだった。「彼女や私たちは、大地は生命をもち、私たちに生命を与え、存在を可能にすると、言ってきた。高速道路は私たちの存在の一部を破壊している」。

例えば南部では、カンデラリアの代議員サラの案内でカンペチェ州を巡回した。彼女やほかの人たちは、遺伝子組み換え作物やアフリカ椰子の栽培導が拡大していることを証言する。「そのため癌などの健康問題が深刻化している。自分たちが栽培してきた作物の生産サイクルが変わり、食料確保は壊滅状態である」と、彼女は述べる。ユカタン半島には森林減少や水質汚染の問題がある。

「そこから北に行ったベラクルスには、地域を汚染している4万基以上の油田がある。オアハカ州には、住民に供給する水を横取りする水力発電所、テワテンペック地峡に建設された25の風力発電基地がある。風力発電塔の巨大風車の羽根が落下し、家が破壊され、大地には有害物質がまき散らされている。大地は汚染され、生産力を失っている」。

ベラクルス州北部のキャラバンにおいて、マリチュイとCIG一行に語られたのは、環境汚染、森林消失や組織的犯罪がもたらす厄災である。「人々の組織化を阻み、何も言わせないため、組織的犯罪が政府の手で繰り広げられることを人々は恐れている。人々は怯むことなく闘い続けている。人々が必死に守ろうと格闘している河川がある。自分たちの水、労働の糧が奪われないようにするため、どこまでも闘い続ける覚悟をしている」。

広報官の説明では、プエブラ州においてはガスパイプラインや水力発電所の建設〔モレロス統合計画の一環〕が強制され、反対する人々に対するやり放題の弾圧が行われてきた。メキシコ州では、住民を支配するため、支援と偽った政府の計画の報告があった。メキシコ州では、「政府が建設を画策する高速道路や環状道路の建設〔先住民オトミ共同体サンフランシスコ・ショチクアウトラが反対、2018年最高裁工事差止認定、2019年共同体の工事実施容認で2020年完成〕による森林の破壊が顕著な形で観察できる」。

彼女の出身地ハリスコ州の深刻な問題は、鉱山の水汚染、アボカド栽培企業や温室栽培企業の拡大、鉱山会社による領域略奪である。一方、コリマ州で彼女の関心を惹いたのは、「自分たちの領域を鉱山から防衛するために進んでいるサクアルパン共同体の組織化である。コカ・コーラ社が水を欲しがるとある川があるが、コカ・コーラを飲むより川の水で料理を続けたいと考え、人々はその川を



CIG 広報官指名。右は連れ合いカルロス



サパティスタ領域からキャラバン開始



伝統医療所「テコルワカン・トゥチャン」



オベンティックでの CIG 女性代議員



チアパス州パレンケでのキャラバン



同行するパトリシア・マリアノ・サラスと



CIG は運動の費用を自己調達



署名獲得が闘いの目標ではない

防衛してきた」。

マリチュイは、苦悩が大きければ希望も大きくなると強調する。抵抗も同様である。彼女が認めるように、「組織がとても強靱な所もあれば、少し脆弱な所もある。激しい弾圧や外からもたらされた分断のせいである」。分断は略奪に関するもう一つのマニュアルである。「企業は集会などに介入し、組織を分断している。その目的は、固有の組織形態を破壊し、強制を継続するためである」。

彼女の説明では、抵抗という闘いは、「大半の共同体で直接的な形態となっている。『私たちを無視するなら、私たちは道路を封鎖する』、『鉱山会社の侵入など認めない』、『主張を聞いてもらうため、道路封鎖を執行しよう』など、人々は口にしている。こうした直接行動によって、投獄、弾圧、失踪が起きるが、それに挫けることなく、人々は抵抗を継続している」。

UNAM にこんなに多くの人々が結集するとは考えなかった

メキシコ市は国内を北から南、南から北へと移動するための架け橋となっている。マリチュイのキャラバンは地理的なロジックで展開するわけではない。メキシコ市では他の代議員や支援チームと会合を持ち、情報メディアとの連続インタビューをこなす。チアパス州以外での最初となる大衆的な動員はメキシコ市で行われた。

UNAM での動員の中心テーマの一つは女性殺害だった。中央図書館の屋外テラスでの中心行事に先立って、若い女性レスヴィ・ベルリン・オソリオ・マルティネスの遺体が発見された大学都市内の公衆電話ボックスの場所でデモ行進が行なわれた。そこではレスヴィの母親アラセリ・オソリオ、女性暴力に抗議する活動を組織するフェミニストのグループが迎えてくれた。

UNAM でマリチュイは「地震世代の若者」に迎え入れられた。9月19日の地震の瓦礫を片付けるため、彼らは街頭まで繰り出した。私たちはここいると叫び、若い男女は食料を調達し、生命を救うために組織化を進めてきた。マリチュイは大統領選挙に立候補した最初の先住民女性で、今回の候補者たちで最初に最高学府を訪問することになった。

2017年11月28日、先住民族と持たざる者たちの広報官は、由緒ある大学の屋外テラスを市民の支援を集める多くの支援者たちで一杯にした。独立系候補としての正式登録には、百万人近くの署名が必要である。その日、学生たちはすべきことをやった。1月段階の数字は目標にほど遠かったが、不可能ではない。署名活動の締め切りは2月17日だが、マリチュイ一行のキャラバンは、独自の方針に基づいて続行している〔2月13日に南バハカリフォルニア州で起きたキャラバン隊車両転覆で中止〕。全国選挙庁は2月19日を署名活動の締め切りとしている〔マリチュイの獲得署名数26万。1%の署名獲得できず〕。マリチュイによれば、集めるのは「署名ではなく、苦悩」である。

マリチュイが指摘するように、CIG はキャラバン経費調達のための特定の財源を当てにできない。「可能なことについて多くのことが言われてきたが、不可

能と思われることについて語ろう」とする運動に資金を提供するという目的で、共同食堂、福引、縁日や上映会を組織する人々からすべての財源は提供されている。マリチュイは述懐する。UNAM での行事で明白になったのは、「私たちが辿っている歩みは、先住民族だけでなく、この再構築の過程の一翼を担っている人たちのためでもあるということである」。

マリチュイにとって、「私たちの非先住民の仲間の基軸となっているのが、若者であることは、明白である。その一部を構成している学生たちは、何が起きるか、すぐには分からない。」しかし、学習し、予習することで、彼らは次のように言っている。「何のため？自分たちが殺されたり、失踪したりすること、あるいは職にありつけるか、そういうことを私たちが知らないなら」

マリチュイは断言する。「若者は未来ではなく、現在である。自分たちの手で、何かリアルなものを創り出すことができる」。あの日の午後にあった若者たちとの語り合いはとても重要だった。「なぜなら、国内のすべての住民、別のセクターの身ぐるみ剥がされた人々にこの提案は向けられている。そのことが明白になったからである」

ともに歩むことを理解、合意できないのは男性であることが少なくない

マリチュイはフェミニストかもしれないが、フェミニストとは名乗らない。彼女たちにとり、フェミニストは外来の概念である。しかし、家父長制度との戦いは、日常的に続けてきたものである。共同体では、女性たちは抵抗の戦いの重要な一翼を担っている。「共同体において、女性たちが可視化され頻繁に表に出るということはなかったが、女性はずねに存在していた」。マリチュイによれば、多くの場合、「共同体が意気消沈していると、女性側から、『やりたくないなら、私たちが先頭に立つ。前進しよう』という発言がある。その決意により、誰もが勇気づけられ、前進することになる」。

CIG の提案はきわめて女性的である。壇上に立ち、政治議論を繰り広げ、活動を組織するのは女性である。会議の場で、料理の鍋を準備し、設営準備に携わり、子どもを世話するだけの女性の姿を目にすることはない。マリチュイが指摘するのは、「私たちが意図するのは、意思決定の場にさらに参加することです」。ほかの女性代議員と同じようにマリチュイは断言する。「男性とともに歩むことが必要だ。後ろや前を歩みたくない。自分たちの生命を守る戦いをともに展開したい。生命は皆のものだから」。

最初の女性先住民大統領候補マリチュイは、共同体を歴訪する過程で多くの女性に参加を促している。CIG 広報官が女性でないなら、多くの女性代議員は励まされなかつただろう。「自分たちでやればできることを理解し話し合ってきた。私たちがうまく組織化し合意できるなら、このメキシコを再構築していく過程を一緒に進むことができる」と、村々では語られ、女性の代議員の仲間内でも繰り返されている。

共同体におけるマチスモは「とても根深いものである」と、マリチュイは断

言する。人々のなかで、「理性があるのは男性だけとするために、資本主義の仕組みがどのように工夫され、設計されてきたかについて、私たちは見続けてきた。資本主義の構造は私たち先住民族にとって死を意味している。それを設計してきたのは男性たちである」と、彼女は説明する。だから資本主義の構造そのものを破壊しなければならないと、彼女は言う。「私たち女性は、資本主義とは異なるものを構築する作業に参加する権利、そして義務と責任を持っている。私たち女性自身が参加し、男性とともに歩むことを決めていくことで、初めてそれは達成できる」。

しかし、それはとても困難なことである。女性代議員のなかには、離婚経験者やシングルマザーが少共同体の慣習に挑戦してきた強い女性である。「ともに歩むことを理解せず、合意できないのは、多くの場合、男性である」。母や娘である女性代議員にとって、「ともに歩むことはとても難しい。彼女たちは働きながら、前進しなければならない。この過程に参加するには、特定の空間を創出する必要がある。だから、仲間の何人かは、単身者を続けることを選択し、女性でも出来ることを示そうと決意している」。こう言いながら、「しかし、それは人それぞれだわ」と、彼女は微笑みながら付け加えた。

先住民と自覚しだしたのは14・15歳の時

マリチュイが自分のアイデンティティを意識しだしたのは、この国の先住民の多くと同じように、幼少期を過ぎてからである。「ともに生活し、畑の耕し方や実施される祝祭の様式」によって、自分が特定の共同体に属していることを知った。独自の衣装と言語をもっていることは分かっていたが、「自分のアイデンティティを明確に意識しだしたのは14・15歳の時だった」。先住民族の多くは、自分のアイデンティティを否定することに馴れ、差別を回避するため、言語や習慣を失ってしまった。

幼少期のマリチュイには腑に落ちないことがいくつもあった。「私たちが貧しいのはなぜ？なぜ私たちの土地に他人がいるのか？と」思っていた。「先住民は二級市民とみなされている」ことを彼女は徐々に理解した。

例えばトゥスパンの近くのシウダー・グスマンに出かける際、祖父は馴染みの店でズボンとシャツを借りていた。粗布半ズボンと木綿上衣という伝統衣装で都会のいろんな場所に出入りすることは許されなかったからである。「同じ差別を受けないように、お前たちは自分の服を着ていけない。私たちにあったことがお前たちにも降りかかるから」と、祖父はみんなに言った。「女性としてそのことをよく知っていたが、なぜ駄目なのか？なぜ、本来の姿で出かけられないのか？そんなことはよくないのでは？と、自問するようになった」と、ナワ女性は述懐する。

1963年12月23日生まれのマリチュイは、高校修了後、知識を深めるためにグアダラハラ大学の伝統医療コースを履修した。学歴のためではなく、祖父母や両親の知識よりも役立つだろうと、考えたからである。「みんなを見捨てるこ



テポストランの高速道路拡張工事現場



水質汚染は先住民居住域の深刻な問題



殺害女子学生の母親アラセリ・オソリオと



元 UNAM 学長パブロ・ゴンサレス・カサノバ



EZLN 支持基盤の女性たち



先住民プレペチャの女性たちと



2018年3月第1回闘う女性国際集会（カラコルモレリア）



2021年11月GNI代表団の欧州ツアー（マドリール）

とはしない」と、彼女は祖父母や両親たちに伝えていた。「みんながどう思われていたかを理解したいという気持ちがあったから」。

成長するにつれて、「共同体に属することは大事なルーツを持つこと、まったく無縁なイデオロギーで私たちが侵略した連中がやってくる前に存在していたのは先住民族であるということ、マリチュイは理解するようになった。

蜂起は 1994 年以前メディアに存在しなかった先住民族を可視化

1994 年元日の EZLN 蜂起は参拾代だったマリチュイに衝撃を与えた。多くの人と同じく、マリチュイはテレビを通じて蜂起を知った。彼女は彼らが掲げる大義は自分のものと同じと感じた。その年の 8 月、マリチュイはグアダルルーペ・テペヤックで開催された第 1 回全国民主会議〔8 月 7-9 日、集会所アグアスカリエンテスに約 6 千人参加、暫定政府や新憲法制定を議論〕に参加した。2017 年 10 月に始まったマリチュイらのメキシコをめぐるキャラバンの出発に当たり、グアダルルーペ・テペヤックの共同体〔EZLN 支持基盤住民は 1995 年 2 月の政府軍急襲で避難、2002 年 2 月帰村〕は再び彼女を迎え入れることになる。

1994 年当時、共同体の領域を防衛する闘い参加していたマリチュイは、仲間 6 名とともに、EZLN が呼びかけた全国民主会議に参加するため、チアパスに向かった。こうして南部から到来したイニシアティブへの参加を通じて、彼女は徐々にサパティスタの道をたどることになっていった。彼女が言うには、「私たちが死の危機にさらしているものと対決するには、いろんな人たちの団結が重要である」ことは明白だった。

CIG 広報官マリチュイは、1994 年以前には地域の農民組織〔父親らが組織した民衆革命運動〕の運動に参加していた。土地を防衛し、自分たちの主張がハリスコ州南部一帯で聞き入れられ、穏やかに暮らすため、大事な土地が略奪されないように活動していた。同じ考えは今も続いている。「お金さえ配れば、先住民族は無視され忘却されてきたことを忘れてくれると、政府は考えている。私たち先住民族は、権利を与えられる対象ではなく、権利を行使する主体になりたいと思って長いあいだ闘い続けてきた。物事を決定し、何をすべきか私たちに命令するのは、私たち以外の人であってはならない」。

先住民の蜂起は、「私たちがすでに手にしていたものを再強化し、先住民の存在を可視化してくれた。1994 年の EZLN 蜂起以前、メディアにとって、ハリスコ州には先住民は存在しないとされていた。だが蜂起以降、メディアは先住民について報道し、ハリスコ州の先住民のことを説明するようになった」と、彼女は指摘する。ハリスコ州における直後の対応といえ、施しものを提供すればいいという古臭い方策の繰り返しでしかなかった。政府はそれ以外の方策で先住民族に対応することなど考えていなかった。彼女が言うには、「先住民族が欲しがるのはお金である」と、人々は考えていた。

2001 年、憲法における先住民族の権利の認知を要求する「大地の色の行進」で、EZLN と CNI がメキシコ市まで来て国会で闘ったのはそのためである。3



2001年3月、国会で演説するマリチュイ



2001年3月、国会で演説するファン・チャベス



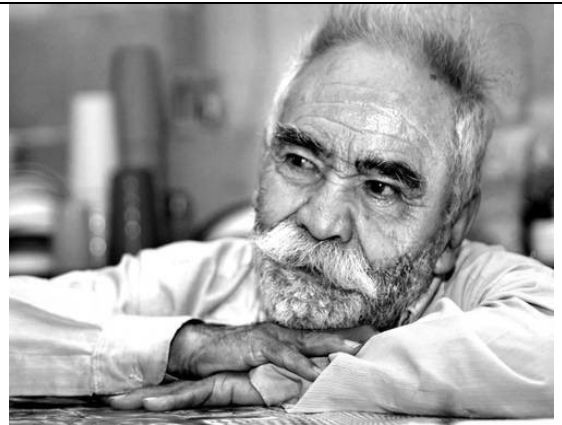
ラモナ司令官



フェデリコ・オルティスとファン・チャベス



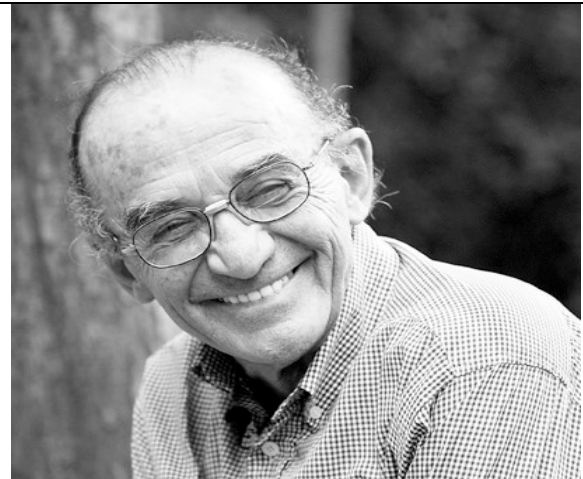
エビータ・カスターネーダとエフレン・カピス



フェリックス・セルダン



アンドレス・オブリエ



リカルド・ロブレ

月 28 日、マリチュイは CNI 代表として国会で演説した唯一の女性であり〔CNI 代表で話したのは先住民プレペチャのフアン・チャベスとミへのアデルフォ・レヒーノ〕、EZLN の女性代表として話したのはエステル司令官だった〔EZLN 代表はダビ、タチョ、セベデオの 3 名の司令官〕。

CNI の亡くなった同志たち

CNI の 20 年の歴史で「亡くなってた同志は少なくはない」。病気や事故だけでなく、領域を防衛する戦いのなかで殺された人もいる。こうした人たちから「私たちは多くを学んだ」と、マリチュイは断言する。

マリチュイは例を挙げてくれた。CNI 創設の基盤となったラモナ司令官〔チアパス高地の先住民ツォツィル、サンアンドレス出身、2006 年没〕。エフレン・カピスとエビータ・カスタネーダ〔ミチョアカン州エミリアノ・サパタ共同体成員連合創設者夫妻、2005 年と 2017 年没〕。フアン・チャベス〔ミチョアカン州ヌリオ出身、ナシオン・プレペチャ創設者、2001 年国会演説、2012 年没〕。ノエ・トレス〔ミチョアカン州プレペチャ指導者、1997 年没〕。フェリックス・セルダン〔モレロス州で 1940-60 年代のルベン・ハラミージョ運動参加、2015 年没〕。だみの声リカルド・ロブレス（非先住民だが先住民に）〔先住民族ララムリで活動イエズス会士、2010 年没〕。アンドレス・オブリー〔マヤ地域人類学的支援協会設立、チアパスで活動のフランス人学者、2007 年没〕。ウルアパンのフェデリコ・オルティス〔フアン・チャベスと行動。2016 年没〕。

これらの人が CNI の途上で倒れたが、CNI は彼らの活動を顕彰している。彼らや彼女たちのため「戦いは続いている」と、マリチュイは言っている。

映像資料

Marichuy, vocera del Concejo Indígena de Gobierno. Comunidad nahua, Tuxpan, Jalisco (11:07)

<https://youtu.be/jQ6jXMnfTB0>

La vocera (我らが民の代弁者) | Netflix

<https://www.netflix.com/jp/title/81442108>

Tejiendo redes por la vida (10:21)

<https://youtu.be/lkyXABQbtrM>

あ と が き

ここに訳出したのは、メキシコの独立系メディア *Desinformémonos* によって 2018 年 1 月に刊行された *Flores en el desierto* 「荒野に咲く花々」の一連の記事である。原書は、編集長グロリア・ムニョス・ラミレスが行った 10 名の先住民女性のインタビュー記事、写真、映像資料で構成されている。

取り上げられた 10 名は、2017 年に発足した先住民統治議会 (CIG) の代議員として選出された先住民女性である。代議員は先住民族居住地域に設定された 100 近くの地区から男女 1 名ずつ選出された。CNI-CIG の具体的な行動としては、いわゆるマリチュイのキャラバンが、2017 年から 2018 年春先まで各地で展開された。目的は CIG 広報官マリチュイを 2018 年のメキシコ大統領選挙候補者に登録するための署名を収集することだった。2018 年選挙では、野党の国民再生運動 (MORENA) のアンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール (通称 AMLO) が当選し、1980 年代以降のネオリベラル政策を見直す「第 4 次改革 (4T)」が推進されるようになった。

原書出版から 5 年が経過した現在、レポートで紹介された彼女たちの運動も新しい展開を示している。2018 年と 2019 年 3 月の国際女性の日に合わせて組織された 2 回の「闘う女性たち国際集会」には、10 名の女性のうち半数近くが参加している。2021 年秋には EZLN と CNI によって組織された「生命のための巡歴 (Gira por la Vida)」のヨーロッパ派遣団にマリチュイらが参加している。

抵抗運動も新しい局面に入っている。ベッティナが取り組んでいたテワンテペック地峡部での風力発電基地に関しては、2019 年のエオリカ・デル・スル (三菱商事資本) 操業は阻止できなかったが、それ以降の風力発電基地新設の計画を完全に白紙撤回に成功した。その一方で、AMLO 政権が推進する地峡部回廊計画による土地収奪の攻撃が加速化している。同じような事例は「国家の安全保障事案」とされるマヤ鉄道計画である。サラが居住するカンペチェ州では、鉄道建設のため、カラクムル自然保護区やエル・ティグレ遺跡の森林伐採が強行されている。オスベリア (2023 年 3 月 6 日逝去、Q.D.E.P) が取り組んでいたテポストランの高速道路拡張計画は差止請求で凍結されていたが、「国家の安全保障事案」として、再開にゴーサインが出されている。

一方で、抵抗運動が成果を得た事例もある。ロシオが属するメスカラの人々は、コカ共同体を侵食していた別荘地の土地を 2022 年に完全に取り戻すことができた。コムカクのガブリエラは 2022 年に行政区民族レヒドールに就任し、電力供給などの基盤整備の援助を獲得している。

この原書は、2019 年から大阪で月一回のペースで開催してきたスペイン語の学習会でテキストとしてきた。約 3 年でその多くを訳し終えたので、今回 PDF という形で日本語の読者に提供することにした。

2023 年 3 月 8 日

小林 致広